原作：AIC
志真 元



バブルガム クライシス
Bubblegum Crisis
超鋼守護天使
ハードメタル・ガーディアンズ

ASAHI NOVELS

バブルガムクライシス
超鋼守護天使
ハードメタル・ガーディアンズ
志真 元
ASAHI NOVELS
朝日ノベルズ

ASAHI NOVELS

「バトルコマンド。〝トランスフォーム〝オン！」
瞬間、淡く青白い光がその場を包み込んだ。だが、このドレススーツはそこらのゴスロリとはひと味違っていた。戦闘用に作られたゴスロリなのだ。
『ナイトセイバーズ』が用いる第一種装備、『ドレススーツ』。これは瞬時に外形変換の可能な超伝導色彩と形状記憶繊維によって生成されている。このドレススーツは、――着用者の全身を覆い、そのパワーとスピードを倍力強化アシストする！――

バブルガムクライシス　超鋼守護天使

Cover Illustration
深野洋一
Cover Design
松倉真由美
（バナナグローブスタジオ）

バブルガムクライシス 超鋼守護天使（ハードメタル・ガーディアンズ）

志真　元

ASAHI NOVELS

ASAHI NOVELS

バブルガムクライシス

超鋼守護天使（ハードメタル・ガーディアンズ）

志真　元

朝日ノベルズ

バブルガム クライシス
超鋼守護天使（ハードメタル・ガーディアンズ）

志真 元　原作：AIC

ASAHI NOVELS

この作品は書き下ろしです。

バブルガム クライシス
Bubblegum Crisis

超鋼守護天使
ハードメタル・ガーディアンズ

contents


KEEP OUT AD.POLICE KEEP OUT AD.POLICE KEEP OUT AD.POLICE KEEP OUT
プリス朝霧
女子高生にしてプロ級のロックアーティスト。彼女の演奏風景がネットに投稿されるやアクセスが殺到し、一躍有名人となった。
Bubblegum Crisis
ネネ六波羅
お気楽極楽を絵に描いたような普通の女子高生。ブーマ暴走事件でプリスと知り合い友だちになる。生い立ちに秘密があるらしい。
レオン六波羅
ネネの兄。
警視庁所属対ブーマ武装警察『AD.POLICE』の刑事。



シリア榊原

SKインダストリーグループ
を支配する富豪家の令嬢。
対ブーマ秘密部隊「ナイト
セイバーズ」のリーダー。

命英ヘンダーソン
榊原家に仕える初老の執事。
元傭兵上がり。



リンナ山崎

金融財閥家の令嬢。
女子高生にしてメイド喫茶店
長を務める。
化学に詳しい。

イラスト／深野洋一

ハードスーツ原案／園田健一

総合プロデュース／坂東ジロー

ストーリー構成協力／北城一輝

第一章
Battle Of Queen

その警察車輌は、首都高の路面下に設置された緊急時専用架線による無接触電源供給と車載電池を併用して大電力を消費しつつ、過回転で焼きつく寸前の高負荷をモーターにかけながら疾走していた。
時速一八七キロメートルで移動する車上にあるレオン六波羅（ろくはら）は、次第に大きくなる暴走ブーマを睨みつけた。
「追いついたぜ！」
接近すると、その姿が詳細に分かってくる。
かつての姿――大排気量ＳＵＶの面影はどこにもなかった。
表面は濡れたような光沢があり、よく見ると脈打っている。生きているかのようだ。
人肌に似せた有機マテリアルは削げ落ち、金属の肌が剝き出しになっている。背中から生える腕についている重火器には、血管か神経線維を思わせる紐状の膨らみが網の目のように走っていた。
なぜ相手が攻撃してこないのか理解したレオンは、唇を歪めた。
融合が進みすぎ、車内にあった銃弾やロケット砲弾までボディーの一部と化してしまったのだ。

銃撃や砲撃は、文字通り身を切るほどの痛みの感覚をあのブーマに与えるのだろう。
――こんな化け物ロボットの出てくる映画が、昔あったよな？
幼い頃にケーブルテレビで観た記憶をまさぐるが、タイトルが思い出せない。
彼は頬を歪める。そんなことを考えている場合ではない。これは現実だ。映画や小説とはわけが違う。一瞬の気の緩みが、死に直結する！
ボンネットから人型の上半身を突出させた異形（いぎょう）の暴走ブーマは、もうすぐそこにいる。
レオンはスロットルを固定し、身体を吹き飛ばそうとする風圧に抗（あらが）いながら身体をひねり、背負っていた対物ライフルを正面に構えた。
口径二〇ミリ、全備重量二五キロ。射手が倍力装置つきの強化外骨格を身につけていることを前提に開発された、新時代の対物ライフルだ。
その照準器に、暴走ブーマの車輪を捉える。呼吸を整え、静かにトリガーへ指を添えた。
祈るように、嘲（あざけ）るように呟く。
「さぁ、躍れよ」
彼はトリガーをそっと引いた。目の前へバスケットボールほどもある火球が出現し、直後に肩を力一杯蹴飛ばされるような衝撃がレオンを襲う。雷鳴のような銃声と共に銃身から吐き出された銃弾が、音速の三倍で暴走ブーマへ突き進む。
激痛で上半身を仰け反らせるのが分かった。左側後輪をえぐられたブーマは車体を左へ

と傾ける。相当なダメージを与えたことは間違いない。
「ハッハァ！　思い知ったか、化け物め！」
ブーマは苦痛にあえぎながらも逃走を続ける。レオンは迷うことなくその後を追った。

彼女が最初の曲――可変翼戦闘機が活躍する映画の、スローでドラマチックなアンセムをオリジナルアレンジで奏でた途端、会場の空気は瞬間沸騰した。それからは一気呵成だった。
プリス朝霧（あさぎり）の初ライブはアッという間に一時間が過ぎた。彼女は時が過ぎるのを忘れてギターを弾き、そして歌い続けた。
ギブソン・ダークファイヤーの重みでストラップが肩に食い込んでいるが、痛みも疲れも感じていない。
観客の熱気が、彼女に力を与えていた。
――これがライブの一体感ってヤツか……。
一人で演奏していたら決して味わえない高揚感だ。
プリスは、胸の奥から熱いものが込み上げてくるのを感じた。
それが涙腺を刺激する前に、彼女は口を開いた。
「みんな、ありがとうー！」

ヘッドセットのマイクが彼女の声を拾い、スピーカーで会場へ広める。

観客たちが彼女の言葉を聞こうとして次第に口を閉じていく。

舞台の袖へチラリと目を向ける。

格安で貸してくれたライブハウスのオーナーが、苦笑しながらカンペを掲げている。

——一曲だけだ！　思う存分やれ！

カンペには、そう書かれていた。

プリスは小さくうなずくと、顔を観客席へ向けた。

「もっと歌いたいけど……」

目を走らせ、会場の隅に立っているセーラー服の一団を捉える。

「門限もあるから」

制服を着れば高校二年生に変身するアーティストの言葉に、観客が爆笑した。

「最後に一曲だけ」

プリスはギターを抱え直し、バランスをとるように足を動かした。

同時に、ギターのボディーにあるダイヤルスイッチをさりげなく回す。

チューニングの修正を告げる電気信号が金属の弦を伝い、ヘッドに内蔵されたモーターへ作動を促す。

独トロニカル社製のシステムはわずか一秒足らずで六つの弦を、彼女が歌う曲を演奏す

るのに最適な張力へと自動調整した。
ピックで軽く弾いてチューニングの完了を確認するや、彼女ははにかんだ笑みを観客へ向けた。
「まだ誰も聞いたことのない作ったばかりの新曲、聴いてください！」
会場の空気が沸騰、爆発した。

勇敢と無謀の狭間にある武装刑事が操る四輪白バイと、彼の追う暴走ブーマは横浜ベイブリッジを走り抜けた。道は首都高名物の大ループへと続いている。
激しい遠心力がレオンの身体をループの外側へと引っ張った。
「クゥッ！」
彼は思わずうめく。タイヤの悲鳴、サスペンションの軋みとフレームの歪みがそれに続く。レオンと白バイの寿命が確実に縮まる。
だが、無理をした甲斐はあった。
半人半車の怪物と四輪白バイの距離は、確実に縮まっていた。
ブーマが上半身を大きくひねり顔を向ける。人間以外の美意識で成形された機械の顔だ。
その、人ならざる者が憎しみと——恐怖を込めてレオンを睨む。
「シュールレアリスムは時代遅れだぜ。メトロポリタン美術館にでも飾られてろ！」

レオンは悪態をつきながらスロットルを目一杯ひねる。インホイールモーターが焼けた臭いを発する。
更なる加速感を得たレオンは、両手から力を抜いた。それまでボディーをしっかり挟んでいた両足も脱力すると、彼の身体は風圧とGの合力によって車体から引きはがされた。装甲服込みで一〇〇キロに近い質量がなくなったことにより、四輪白バイは更に加速を増してブーマへと突進した。
異形の暴走機械が驚きで上半身を固まらせるのを、レオンはしっかりとその目で捉えた。四輪バイクはホイールとフレームをひしゃげさせながら、車体と路面の間へクサビを打つように激突した。激しい火花を散らしながらスピンし、外側の壁へと滑っていく。
そのまま壁に激突する。だが、運動エネルギーは壁を粉砕してもまだ失われなかった。暴走ブーマと四輪白バイはもつれ合うように空中へと躍り出た。
怪物が発する絹を裂くような女性の悲鳴を耳に捉えたが、それは次第に遠のく。
彼は自分をいたわりながら、身体を転がして路上へ大の字になる。
そして手足の先を動かし、身体に異常がないか確認する。あちこちから伝わってくる痛みは、あえて無視した。生きている証拠だ。
「やったぜ、ザマァ見ろ」
荒い息の下で、レオンは言葉を吐いた。

このまま寝たいと思う心を叱咤して上半身を起こしたとき、新たな破壊音が周囲の空気を震わせながらレオンの身体を叩いた。
武装刑事は痛みも忘れて外壁の破孔に駆け寄る。目にした光景に、彼の顔が強張った。

間奏の間、プリスは観衆の反応に確かな手ごたえを感じていた。
——キてる！
彼女は満面の笑みを浮かべる。ゆったりとした滑り出しの曲調に、内心は不安を感じていたのだ。
プリスは曲の終わり近い山場に向けて、アルペジオを弾きながら息を吸った。
彼女は口を開く。
災厄が降ってきたのは、その直後だった。
すぐ隣に雷が落ちたような轟音(ごうおん)が会場を揺らし、天井の梁から下がる照明が一斉に落ちた。
照明とアンプの電源も落ち、その破壊音と観客の悲鳴が暗くなったホールの空気を震わせる。
すぐさま、非常灯が点った。
視覚を維持する光を得たプリスは天井を仰ぎ、目と口を大きく開いた。

何か、車のようなものが天井を突き破り、梁に引っかかっている。
天井は軽めの素材で作り、落下しても下の観客に被害がないようにし、代わりに梁はトラックが落ちてきても受け止められるよう頑丈になっていた。
高速道路の足元という立地から、こんな事故もあるんじゃないかと備えていたと、オーナーから聞かされていたことを思い出す。備えあれば憂いなしである。
その実証を見せられたわけだが、あまりの驚きにプリスは呆然とした。
「みんな逃げて！」
ヘッドセットのマイクを通さない、プリスの肉声が会場の隅々まで響く。
出入り口で非常ブザーが響き、回転灯が瞬いた。
そしてモーター音と共に、ステージの大型セット搬入以外では使うことのない大扉が開いていく。
ステージ脇にいたオーナーが非常ボタンを押したのだろう。
「プリス、お前も逃げろ！」
脇からオーナーの声が聞こえる。
「分かってる！」
ギターからケーブルを抜き、ステージ裏の非常口へ向かおうと身体を翻す。そのとき、頭上から悲鳴とも絶叫ともつかぬ、神経を掻きむしる声が響いた。

見上げたプリスは、今度こそ腰を抜かしかけた。
「人が……生えてる？」
辛うじて自動車と分かる機械のボンネットから、手を一〇本近く生やした化け物の上半身が垂れ下がっている。
人間ではなかった。
「ブーマ‼」
しかし、それはもはや〝人間を限りなく模したロボット〟とは言えない姿をしている。機械の化け物。そう呼ぶのが相応しい。
怪物は逆さになって梁に乗っかる車体から上半身を垂れ下げ、数メートル下の地面へ手を着こうと腕を伸ばしている。
「何なんだよ、アレ⁉」
唖然と見上げていたプリスは、新たな異音の発生に気づいた。
それは、車と人型ロボットの融合する化け物から発している。
メタルの肌をした化け物は上半身を前後に揺すり、車体から抜け出そうとしていた。
やがて、上半身がスルリと抜け出た。
正確には、胴が伸びて下へ垂れ落ちる。
まるで、粘度の高いオイルが滴り落ちるのを見ているようだ。

プリスは、養父と一緒に観た古い映画を思い出していた。
未来からやって来た、液体金属製の殺人ロボット。
その動きに似ていた。
化け物ブーマの手が床に達すると、車体と繋がっていた長い胴がブツンと千切れた。
「ドリームワークスもビックリじゃん……」
ゆっくりと大きく息をすることで混乱する精神を落ち着かせながら、一七歳のロッカーは懸命に減らず口を叩く。
その胸の中では、ゆっくりと怒りが燃え上がってきた。
異形のブーマは長い胴を蛇のように床でのたうたせ、ゆっくりと周囲を見渡している。
そして機械の双眸(そうぼう)が、ステージに立つ人間を捉えた。
視線を交わした途端、女のような骨格をしたブーマが大きく口を開き、きしるような威嚇の声を上げた。
それをプリス朝霧は、戦いのゴングと受け止めた。
「ふざけんじゃねぇー！」
プリスはヘッドセットをつかむと、それをブーマへ投げつけた。
ブーマの腕の一本が鞭(むち)のようにしなり、それを弾き飛ばす。
その間に、プリスはステージの端を蹴っていた。

「喰らえ！」
ギブソン・ダークファイヤーのネックを両手でつかみ、大上段に構えると、彼女はブーマの頭目がけて振り下ろした。
頑丈な合板製のボディーがブーマの頭蓋を粉砕し、めり込む。
一〇本近い腕が宙をつかんだまま全て痙攣している。
効いている証拠だ。
「効いてる効いてる！　このクソブーマ！」
プリスは再びギターを振り上げ、渾身の力でボディーをブーマの割れた頭へ叩きつけた。
「アタシの、初ライブを、滅茶苦茶に、しやがって！」
何度も打ち据えた後で、数歩後ろへ下がる。
化け物ブーマの頭部は、原型を留めていなかった。
鼻から上は完全に粉砕され、細かいワイヤーが力なく蠢(うごめ)いている。
半開きになった口からは、弱々しいうめき声しか聞こえない。
「くたばれぇ！」
プリスは重さ四・二キロのギブソンをバットのように構えると、ブーマの首目がけ一気に振り抜いた。
ブーマの口から短い悲鳴が漏れ、首と胴が泣き別れになった。



重々しい音を立てて、首が地面に落下する。
胴体は暫く痙攣していたが、やがて動きを止め、落ちた首へ覆い被さるように倒れた。
「ざまぁみろ」
——父さんと母さんの仇だ。
一四年前、暴走したブーマに両親を殺された少女は、憎悪の視線をスクラップとなったブーマへとぶつける。
そして放心状態のままで、もはや楽器とは呼べない残骸となったギターを投げ捨てながら呟いた。
「この勝利をジミヘンに捧げるよ……」
静まりかえった会場の中で、次第に落ち着きを取り戻したプリスの耳が小さな音を捉えた。
それは、誰かのすすり泣きだった。
「……怖いよう。助けて、お兄ちゃん」
その声に、慌てて周囲を見渡す。
会場の中ほどにある、太く頑丈な支柱が邪魔になって非常灯の明かりが届いていない陰から、その泣き声は聞こえた。
そこに駆け寄ると、柱の陰でお下げ髪の少女がうずくまって泣いていた。

彼女の前にしゃがみ込み、そっと両肩に触れると身体がビクリと撥（は）ねた。
セーラー服からそれと分かる学校の後輩が、涙でグシャグシャになった顔を上げる。
「大丈夫か？　名前は？」
「……うん。ネネ。ネネ六波羅（ろくはら）っていうの」
彼女はヒックヒックとしゃくり上げながら小刻みに顔を上下させた。
「ネネ、どうしてみんなと一緒に逃げなかった？」
「ビックリして腰が抜けちゃって……みんな他の人たちと行っちゃったのに……ネネ一人だけ取り残されちゃったの」
もう大丈夫だとプリスは微笑み、腰を上げた。
「立てるか？」
「まだ、足に力が入らないの……」
後輩の弱々しい返事に、プリスは苦笑した。
よく見ると、膝をすりむいて赤いものが滲んでいる。
ネネが震えているのを感じたプリスは彼女を抱きしめた。目を覗き込み、ライブ中とは別人のように優しい声で言った。
「大丈夫。きっと、大丈夫さ」
遠くからパトカーのサイレンが聞こえた。先ほどの混乱の中、逃げ出した誰かが通報し

たに違いない。
　だが、すぐに到着というわけにはいかない。再開発の影響で道が入り組んでいるし、逃げ出した客であたりが混乱している。
　警察が来るまで、まだしばらくはかかるだろう。

「おい、もっとスピードは出ないのかよ！」
　レオンが乱暴に叫んだ。パトロール中に運悪く通りかかった警察官が半泣きで応じる。
「ムチャ言わんでください！　一三〇キロ出てます！　街中でこれ以上は危険です！」
「クソッ！」
　レオンは舌打ちした。
　暴走ブーマが落ちた場所にはライブハウスがある。彼は、今朝方にそれを聞いていた。彼の妹が得意げに教えてくれたのだ。今夜は東京湾岸、首都高大ループ下のライブハウス「ベイサイド・ホール」で開催される高校の先輩のライブに行くことを。
　レオンは左手首の腕時計を見る。
　門限を巡って激しく口論したから、時間はよく覚えていた。
　一八時三〇分開演、一九時三〇分終演。アンコールがあっても二〇時までに全員退出。
　現在時刻は、一九時三八分。まさにアンコールの真っ最中だったに違いない。

彼はスマートコミュニケーターを取り出した。盤面を滑るように指を走らせ、家族の位置情報を知らせるアプリケーションを起動させる。
何度も確認したが結果は一緒だった。
彼の妹、ネネ六波羅はまだ［ベイサイド・ホール］にいる。
レオンは自分のうかつさを呪いながら祈った。
「ネネ、無事で待ってろよ！」

「そろそろ立てるだろ、ネネ？」
「えっと……肩、貸して欲しいなあ、なぁんて」
「甘ったれんなヨ、しょうがないな」
プリスはネネの肩へ腕を回して「よっ」と持ち上げる。
ネネがよろけながら何とか立ち上がった。スカートのすそを叩きながら言う。
「朝霧先輩、あのお化けは？」
「アァ、頭を潰してやったよ」
そう言って、ステージ正面へと首を回したプリスは息を飲んだ。
——いない！
そこにあったはずの、異形のブーマの姿はなかった。床を染めるオイルはつい今し方ま

で、そこに横たわっていたことを告げている。
「このまま静かに出るぞ」
そう言って一歩踏み出したとき、二人に頭上から何かが覆い被さってきた。
「！」
それは、人型とは呼べないほどに変わり果てた化け物ブーマだった。
プリスのへし折った頭部が、胸の中央に埋め込まれている。
復元した顔を歪ませ、プリスを睨んで威嚇の声を上げてきた。
「キャーーーーーーーー！」
すぐ横で耳をつんざくネネの悲鳴が響き、その声量にプリスは頭がクラクラした。
「逃げるぞ！」
後ろを振り向き、ネネの身体を抱えるようにして駆け出した途端、プリスは腹に重く鈍い衝撃を感じた。
「ゥブッ！」
大蛇のように長く伸びた胴で、ブーマが打ち据えたのだ。
後ろへよろめいた二人の身体を、ブーマの腕がつかんだ。
「しまった――」
抗う間もなく、プリスは後輩と共に、一〇本近い腕に絡め取られた。

「いやーっ、放して！　助けて、お兄ちゃーん！」
すぐ横で、ネネが泣き叫んでいる。
「クソッ……タレッ！」
——冗談じゃない、初ライブで怪我人どころか、死人まで出せるかよ！
彼女だけでも何とかして逃がそうと懸命にもがく。
だが、身体に巻きついたブーマの腕は、ますます強い力で締め上げてくる。
「痛い痛い痛い！　放してぇー！」
ネネも同様に締め上げられているのか、顔が苦痛に歪み、口からは悲鳴がほとばしっている。
「クッ、うっ！」
——駄目だ。このままじゃ、呼吸が——
肋骨と両腕の骨が悲鳴をあげ始めている。
激痛が精神を乱打し、気が遠くなってきた。
「放してぇー！　放してったらぁー！」
すぐ横では相変わらずネネが騒いでいた。
「もー、えいっ！」
身体に巻きついている腕から枝分かれし、触手のように目の前で揺れている細長いコブ

に、ネネが嚙みついた。
次の瞬間、彼女の顔が歪み、口からメタルのコブを放した。
「ふぇーん、歯が欠けたぁ〜。口の中切っちゃったよー……」
――なんつー……無駄に元気な……ヤツだ……よっ！
薄れゆく意識の中で、プリスは後輩の意外なタフさに場違いにも感心していた。
――ふざけんじゃねぇ。ふざけんじゃねぇぞ畜生！　親子揃ってブーマに殺されるなんて、笑えないジョークだ。
プリスは運命を呪い、魂の欠片を振りかざして最後の抵抗――減らず口を叩こうとした。
そのとき、ブーマの身体が震えた。
振動が激痛となってプリスの脊髄を走り、彼女の精神を鞭打つ。
「アガッ！」
身体を締めつける力がわずかに緩んだ。
その隙を見逃さず、彼女は肺腑へ空気を吸い込んだ。
「コンノォ！」
まだ自由な膝から下を動かし、踵を打ちつけようとする。
《動かないで！》
そのとき、頭上から凜とした声が聞こえた。

ヴォコーダーをかけ、シンセサイザー音のように加工されているが、女性の声だ。
――最近は天の声もテクノ化してんのかよ！
胸中で毒づきながら見上げる。天井の梁から何かが舞い降りた。
その影はスレンダーで女性的なシルエットをしていた。
右手に細長いものを持っている。非常灯の赤い光を反射して鈍く輝くそれが、プリスの目の前で一閃（いっせん）する。
途端、それまで彼女を苦しめていたメタルの枷（かせ）が全てなくなった。
切断されたブーマの腕と共に、プリスは床へ落下した。
「いたーい!!」
すぐ横で、尻餅をついたネネが悲鳴をあげた。
《早く逃げなさい！》
再度、電子加工された女性の声が響く。
声の正体を見定める間も惜しんでプリスはネネの身体を抱えると、床を這うようにその場を離れた。
出入り口近くまで来たとき、空気を鞭打つような衝撃音が背中を叩いた。
思わず止まって後ろを見る。
「何だアリゃぁ!?」

プリスは異形のブーマと対峙する者を見て、そう呟く。
そこには見たこともない流麗な装甲服に身を包んだ人間が、細身の長剣（レイピア）を右手に携えて立っていた。
ロボットやブーマではない。
頭部がバイクのヘルメットのように大きく、それは中に人間の頭部が収まっていることを示している。
そしてさっきの高飛車な命令口調。上から目線のブーマなんてあり得ない。
また、衝撃音が空気を震わせた。
次の瞬間、ブーマの太く長い胴体に槍のようなものが刺さる。
飛んできた方向を見てプリスは驚いた。いったい何度驚けばいいのか。
高速道路よりの落下物から会場を守る太い梁の上に、ブーマと対峙している者と似た装甲服を着る人間が立っている。
それは剣ではなく、大きな弓を右手に抱えていた。
——アレは、矢が刺さったってこと!?
そう考えたのは正解だと示すように、梁の上の戦士は新たな矢をつがえて弓をギリギリと引き絞った。
その矢が放たれた途端、また衝撃音が会場を震わせる。

「音速超え!?」
突如発生した爆発的な衝撃音の正体に気づいて、プリスは思わず声をあげる。
瞬間移動の速さで、矢はブーマの胴へと突き刺さった。
まるで標本にされる昆虫のように、ブーマが床へ縫いつけられていく。
そのたびに、ブーマは悲鳴を上げて上半身を仰け反らせた。
明らかに、ブーマが弱っていくのが分かる。
《成敗！》
レイピアを持つ装甲戦士は、そう言って剣を正面に構えた。
そして目にも止まらぬ速さで、剣を続けて振るう。
彼女の動きが止まった後には、プリスとネネを死の淵まで追い込んだ異形のブーマが、
細切れの姿になっていた。
「スゲぇ……」
思わず言葉を漏らすと、レイピアを持つ装甲戦士は顔を向けてきた。
《まだ逃げ出してなかったの？　それとも、途中で腰が抜けちゃったのかしら？》
「ナン……だと!?」
いたわりの欠片もない言葉を耳にして、プリスの中で何かがカチンと鳴った。
「朝霧先輩……」

怒声が喉元まで出かかったとき、彼女の右腕に抱きついていた後輩が声をかけてきた。
「とりあえず、ありがとうって言いましょ？」
「あァ……」
素朴な正論を聞いて、プリスは脱力した。
《お礼なんか要らないわ。私たちのルールとして、あなたたちを助けただけだから》
突き放すように長剣――レイピアを携える装甲戦士が言った。
彼女の横に、梁の上から矢を放っていたもう一人の戦士が降り立つ。
かなり硬質な装甲服と映るのに、まるで天使が舞い降りるように軽やかな着地だった。
《今夜、ここで見たことは誰にも話さず、忘れなさい。それが、あなたたちのため》
レイピアの戦士がプリスたちへそう告げている間に、弓の戦士は細切れになったブーマの残骸の前でしゃがみ込み、何かをつかみ上げた。
それを確認した後でレイピアの戦士は、またプリスたちへ顔を向けた。
《いいわね、忘れなさい》
そう言い放つと、二人の装甲戦士は膝を軽く曲げた後で大きく跳躍した。
細身な装甲服のどこにそんな駆動力があるのかと思わせる跳躍だった。
瞬く間に天井の梁へ着地するや、二人は再び跳躍し、あのブーマが開けた天井の穴から外へと飛び出していった。

「ナンなんだよ、あれは！」
呆然とそれを見送った後、プリスは吐き捨てるように言った。
「あの人たち、カッコよかったですね、先輩！」
「あのナ……」
後輩の素直な感想に、初ライブを滅茶苦茶にされた高校二年生は返す言葉もなかった。
遠くからパトカーのサイレンが聞こえてくる。
「ネネ、大丈夫か、生きてるか！」
〔ベイサイド・ホール〕の入り口から男の声が聞こえた。
「お兄ちゃん！　ネネ、生きてるよ！」
ネネが即座に反応し、声のする方に駆け出していく。
元気そうな彼女の様子にプリスは苦笑した。
何気なく、腕時計を見た。
あの化け物が天井から落下して、まだ五分も経っていないことにプリスは驚く。
今夜だけで、一生分の驚きを味わった感じだ。
「冗談じゃないよ……」
プリス朝霧は悪夢を振り払うように、頭を軽く振った。
大きく深呼吸して天井を見上げる。

穴の開いた天井から、赤く大きな月が顔を覗かせていた。

第二章
Get World Queen

たとえ人類最後の日が訪れようとも、朝は必ずやって来る。
デビューライブをメチャクチャにされた、その翌朝。
プリス朝霧はいつもどおりに早稲田通りでペダルを漕いでいた。
「っつ！」
サスペンションでは吸収しきれなかった道路の凹凸が車体を揺らす。
その衝撃で、痛む身体の節々が悲鳴をあげた。
顔をしかめながら、彼女は歯を食いしばって前を見た。
早稲田通りと中杉通りの交差する信号が見える。いつもなら何でもない距離。
だが今日に限っては、ひどく遠く感じた。
――やっぱ、タクシーでも使えば良かったかなァ……。
弱気になって後悔がわいてくる。

ブーマ乱入事件の後で、プリスと後輩は警察に保護された。
全身すり傷だらけなプリスが「歩けるから！」とわめいた。救急隊員はその言葉を無視して、彼女たちを強引にストレッチャーに乗せ、そのまま救急車へと突っ込んだ。

病院では、応急措置と精密検査、それに刑事が手ぐすねを引いて待ち構えていた。
身体中に絆創膏、磁気と超音波が全身を輪切りに、とどめは得体の知れない心理テスト。
下された診断は『軽い打ち身、筋肉疲労、すり傷と若干のストレスが見られる』。
ちょっとボケ気味な接骨院の先生でも分かる。保険金の無駄遣いだよ。
刑事は刑事でムダにしつこいし、説教くさい。
名前や住所を聞かれるのは当然だが、あとは向こうの聞きたいことを聞かれるばかりで、こっちの話はちっとも聞いてくれない。
「何ゆえ高校生が、平日の授業に差し障るライブ日程を組んだ？」という質問は、事件と何の関係があるのかさっぱり理解できなかった。
狙いが見えず要領を得ない質問に、プリスの堪忍袋の緒は切れた。
到着の遅かった警察をなじったのは覚えている。聞いた刑事が激怒したのも覚えている。
そこから——。
何か暴れたのかもしれない。ひどく興奮したのは覚えてる。
クルマで迎えに来た養父と一緒に、高円寺(こうえんじ)の家へ帰った——のだと思う。
軽くシャワーを浴び、昇天したように眠った、はずだ。朝起きたときに髪からはシャンプーの香りがしたし、服もちゃんと着替えていた。
何しろ病院で興奮してから目を覚ますまで、間に何があったか記憶にないのだ。

それでも、眠っている間に彼女の世界はリセットされたらしい。
目覚まし時計がいつもの時間に、聴き慣れたハードロックを盛大に奏でる。
そしていつものように歯磨きし、いつものように養父の焼くハニートーストを頬張りながらオレンジジュースを一気飲み。
騒々しい昨日よＧｏｏｄ　Ｂｙｅ！　新しい一日が始まった。
「行ってきまーす！」
挨拶を告げるが早いか、玄関のドアを開けて愛車にまたがったのは十分前だった。

交差点を二つ曲がり、住宅地を走る裏道を抜けて早稲田通りに出る。
五月晴れに照らされながら中杉通りの交差点まで全力疾走。遠くない距離だがもう汗だくになっている。
だがそこで突然、彼女に休んでも構わないという有り難いお告げがいまさら届く。
昨晩の事件が報道されて驚いた担任から、自宅に連絡があったらしい。
『ラッキーだな、先生公認のズル休みだよ。戻るか？』
スマートコミュニケーター越しに見る養父は微笑を浮かべている。だが彼女はサンクスと礼を告げながら断りを入れて、即座に通信を切った。
彼女は唇を舐めて、ラッキーなアンラッキーだな、と思った。

休んでいいのはラッキーだけどここまで来ているのはアンラッキー。思うようにならないけれど止まっちゃいられない。
そう考え、彼女は愛車アレックス・モールトンを加速させようと腰を浮かせた。
「Ｒｏｃｋ　Ｙｏｕ!!」
ヤってやるぜ！　と威勢良く叫びながら自分を鼓舞して、セーラー服のロックアーティストは全力でペダルを漕いだ。

彼女が思っていたよりも、ずっと早く登校できた。
事件のせいで遅れたという言い訳の用意はある。
でもそのカードを使うのは潔くないと思っていた。
しかし代償は大きく、体力の消耗はいつにも増して激しい。教室前ではすでにヘトヘトで足が重い。
プリスは両手のひらで顔を叩き、気合いを入れながらドアを開く。いつもより力を込めて挨拶する。
「オハヨー！」
すると突然、周囲から歓声が沸き上がる。フラフラになりながらゴールを目指すマラソンランナーを迎えるスタジアムになったようだ。

あちこちから声がかかる。彼女を心配しているようだ。
「プリス、おはよう！」
「身体、本当に平気？」
「休んじゃえばいいのにぃー」
何が起きたのかと一瞬考えたプリスはァァとある考えに思い至り、力なく微笑んだ。
そしてマスコミとクチコミが持つ情報伝達力の凄さをいまさらに思い知った。
同情されるのはカッコ悪い。彼女は虚勢を張ることにした。
「何の何のこれしき。大したことなかったでござるよハッハッハ」
「さすがは男前、『ブーマ殺しのプリス』ね！」
「ハ？」
席へ向かっていたプリスは、目を瞬かせながら声の主を眺めて立ち止まった。
「いったい何の話？」
「え？」
クラスメートがキョトンとした顔を向けてくる。
明らかに、話のかみ合っていない妙な違和感がある。
「アタシが何を？」
「あのブーマ、プリスがぶっ壊しちゃったんでしょ？」

「ハぁー？」
頭から抜けるような声をプリスはあげた。
さっきまでとは違うイヤな汗が、彼女の背中を伝って落ちる。
――いったい全体、どうなってやがるんですか？
プリスは引きつった笑みを浮かべる。そして狼狽しつつ、事前に念押しされていた〝公式発表〟を口にする。
「ンなわけないでしょ！　あいつは勝手に自分でぶっ壊れたの。ニュースでもそう言ってたの聞いたでしょ？」
首都高湾岸線とベイエリア一帯を震撼させた大追撃戦。
事件は、違法改造ブーマを満載したトラックの検問突破に端を発していた。
高速機動隊と対ブーマ特殊部隊は、違法ブーマの運び屋と激しい銃撃戦を展開。
逃走途中でトラックは高速の大ループを曲がりきれず壁に激突、そのまま高架下に転落。
そして運悪くもプリスが演奏中だったライブハウスへ落下し、運転手は死亡。
激しく損傷した違法改造ブーマは暴走し、逃げ遅れた屋内の女子高生たちを襲うも、すぐに自壊し始め、完全に機能を停止。
そこで警察と救急隊が到着し、奇跡的に死傷者はなし。
これが公式発表であるとして、ニュースは伝えている。

そもそもトラックではなくＳＵＶだったこと、ブーマが自動車と一体化していたことはもちろん、首を飛ばされても動作していたことは、まったく報道されていない。
ましてやあの女性たち、装甲戦士については――
プリスは内心で首を振る。ともかく、警察からきつく口止めされている。彼女としては、公式発表を唯一の事実と繰り返すしかない。
彼女は苦笑を浮かべつつ、肩をすくめた。
「だからニュースのとおりで、アレは勝手に壊れたの」
「またまたぁウソついちゃって」
クラスメートは笑いながら、教室の奥を指し示した。
「私は、それを『見た』って子から、もう全部聞いちゃったよ？」
「ナっ！」
彼女の言葉にプリスは絶句する。
同級生ではない誰かが、教室中央の席に座っていた。その周りには、クラスメートが群がっている。賑やかな人だかりで、中心にいる人物が誰かは見えない。
呆然とする彼女の耳に、クラスメートの女子が質問する声が聞こえた。
「ねえ、本当にあの高そうなギターで殴っちゃったの？」
「そうなんですよ。ギターって打楽器だったって、先輩は知ってましたぁ？」

能天気に明るい声が、教室に響いた。
プリスの脳裏に、ツインテールの後輩の顔が即座に浮かび上がる。腹の底から響くような声で、彼女はその名を呼んだ。
「ネネ六波羅ァーー！」
名指しされた当人が振り向く。そして彼女の顔を見るや、無邪気な笑みを浮かべた。
「おはよう、プリスちゃん！」
意表を突く屈託のない笑顔と呼びかけが、プリスの怒気を吹き飛ばす。
「ちゃ……ちゃん？」
小さな頃から大人びていたプリスは、『ちゃん』づけで呼ばれたことなどない。ましてや後輩からタメ口で馴れ馴れしく呼ばれるなんて、初めての経験だ。
プリスの感情と言葉は、空回りを始めた。
「身体大丈夫？　ネネは大したことなかったけど、プリスちゃんはあのブーマと激しく戦ったもんねー。どこか痛いところないの？」
椅子から腰を上げた彼女が、朗らかな笑みを浮かべて歩いてくる。
「…………」
プリスは口を半開きにして、いったい何が起きてるんだ？　と考えたが、理解できない。そのまま、ただ呆然と立ち尽くした。目の焦点はどこか遠くを見ている。

プリスの前に立ったネネは、首をかしげて彼女を覗き込む。
そして手を伸ばして、プリスの横髪をやさしく撫でる。
「やっぱり、どこか痛い？　無理しちゃダメだよぉー」
猫撫で声を耳にして、プリスはようやく思考を再起動させる。そしてネネの手を軽く振りほどき、詰問調の言葉を発した。
「オマエ、何でアタシを『ちゃん』づけなの!?」
——いやいや、問題はそこじゃないだろ！
プリスは脳内で自分にツッコミを入れたが、二の句は継げなかった。
「だって、プリスちゃんはプリスちゃんでしょ？」
曇りのない笑顔でネネが言葉を返す。彼女は小首をかしげながら言った。
「ネネとプリスちゃんは、生死を共にした仲でしょ？　先輩と後輩の壁なんて乗り越えて」
予想外の言葉にプリスはネネを凝視した。
ネネは上目遣いで濃厚な視線をプリスに投げかけている。
互いが真剣な視線を交わす妙な雰囲気にハッとして、プリスは耳の後ろが熱くなる。
「ナっ、そんな紛らわしい言い方すんなよ！」
気がつけば男子たちが興味津々の、妖しい光をたたえた瞳で自分を見つめている。

――チクショウ、汚らわしい野獣共め！
妄想で頭がいっぱいの男子たちに向けて、プリスは語気を荒らげた。
「違うぞ、ぜんぜん違うからな！　ヘンタイめ！」
プリスはあたりを見回し、激しく吠えた。彼女の厳しい視線に、二人を取り囲んでいたオーディエンスたちは一瞬たじろぐ。
その隙を突いて、プリスはネネの肩をつかんだ。そして教室から廊下へと引っ張っていく。
「ちょっと来い！」
「痛い、プリスちゃん痛いよう！　もっとやさしく抱きしめてぇー！」
プリスは抗議の声を無視して、半ば抱えるような感じで強引に、ネネを屋上へと通じる階段のところに連れて行った。
二人が消えた教室では、ヒワイな妄想を炸裂させた女子が黄色い歓声をあげていた。

転落防止の高いフェンスが張り巡らされた屋上に人影はなかった。
プリスは大きく息を吸い込み、力の限りに怒鳴る。
「どういうつもりなんだよ！」
ネネはきょとんとした顔でそれを受け止めた。

「いったい何のこと、プリスちゃん?」
本心からそう思っているのか、ネネが小首をかしげてプリスに尋ねる。
プリスは、具体的に問い詰めることにした。
「アタシがブーマを倒したなんて、真っ赤なウソじゃないの!」
「だって、プリスちゃんが殴ったのはホントだしー、ヨロイ着た人たちにも口止めされたしー。怒らないでよ、プリスちゃん……」
ネネは眉を寄せた困った表情で、プリスを見つめる。
——まあ一発殴ったのは、そりゃあそうだけど。
そう考えてから、プリスはあることに気づいてネネに問い質す。
「オマエ、もしかして警察にもアレを言ってないの?」
「うんッ!」
元気な回答を耳にして、プリスの怒る気持ちは霧散した。
「ドラマみたいに正義のヒーローがご登場、なんて信じてもらえるわけないよ、プリスちゃんは喋っちゃったの?」
「アァ……」
プリスは鈍い顔をして答えた。彼女は病院で事の次第を細大漏らさず刑事に語っていた。高飛車な装甲戦士が最後に発した言葉など、きれいに忘れていたのだ。

《いいわね、忘れなさい》
プリスは電子加工音声を、にわかに思い出した。
「ダッメじゃーん。プリスちゃん約束破りだぁ。助けてもらったのにぃー」
プリスは厳しい顔で空を見上げる。
プリスの横顔を覗き込みながら、ネネは彼女に慰めの言葉をかけた。
「だいじょうぶ、ヨロイの人たちの話なんて、きっと誰も信用しないよ」
「そうだ、思い出したぞ。オマエの兄貴、いったい何なんだよ！」
プリスは突然叫んだ。ネネはキョトンとして応じる。
「何って、刑事だよ？　昨日、お話ししたでしょ？」
「あぁ、まったく散々な刑事だったよ！　オマエの兄貴は！」
プリスを聴取したレオン六波羅は、『見たこともない装甲服』の話を鼻で笑い飛ばした。挙げ句には、ライブを滅茶苦茶にされたショックで救済者を待望するあまり、幼い頃にテレビで見た特撮ヒーローの記憶を事実と混同しているんじゃないか？　と心底バカにしたような口調で言った。
レオン刑事がいつのまにか消えた後、プリスは別の刑事にも同じことを言ったが、彼は可哀想な人を見るような目で彼女を見つめた。そして、
「再度の事情聴取は気持ちが落ち着いてから行う。だから今日は帰りなさい」

と彼女に優しく告げた。
あげくはPTSD予防だと、犯罪被害者心理カウンセラーの連絡先までプリスに教えた。
「まったく、信じられない話だけど、オマエも見たろ？　同じ目撃者だろ？」
「ここは一つ、ふたりで秘密の約束を守ってみようよ？　うふっ、プリスちゃん」
「プリス〝ちゃん〟とか、シレッと呼ぶな、シレッと」
プリスはネネを羽交い締めし、両手の握り拳でこめかみをグリグリとこね回した。
「イタタタタぁ！　暴力反対、暴力ハンターイ！」
ネネの悲痛な叫びは、虚しく屋上にこだました。

警視庁ビルは、皇居の南面を守るようにそびえ立っている。
その一角にある特別室で小さな嵐が起きようとしていた。
「何とかならんのかね？　六波羅君。私は暴力沙汰がひどく嫌いなんだよ」
白髪交じりの男性は、レオンを見上げながら言った。両手で大事そうに番茶の入った湯呑を抱えている姿は、どこか田舎の町役場職員を思い起こさせる。
課長にも拘（かかわ）らず特別に個室を与えられるほどの警察官にはとても見えない。
「ハッ、分かっております、課長！」
レオン六波羅は、天井を見ながら直立不動の姿勢で答えた。

それを聞いたAD・POLICE捜査課長の二宮(にのみや)警視が、唇をへの字に曲げる。
「分かっておらんだろう。それに、君の首に貼ったシップは何だね？」
レオンは課長の指摘を受けて首に手を置いた。メンソールの香りに顔を歪める。
——あの小娘め、今度会ったら……
「交通機動隊の本多(ほんだ)警視正から伝言だ。『さすがAD・POLICEの有名人は、度胸も腕っぷしも大したもので感心した』そうだ」
「自分のような若輩者には、もったいないお言葉です」
「イヤミに決まっておるだろう！　どこの世界に、交通機動隊から白バイを強奪する刑事がいるというんだ」
「緊急、かつ非常事態でしたので」
実際にそうだった。あのまま暴走ブーマを放置していたら、都内は戦場となっていた。
課長だって今頃は、呑気に番茶などすすってはいられなかったろう。
二宮が湯呑を、ゆっくりと机に置いた。
「つまるところはだ、六波羅君」
彼は少しだけ声のトーンを低く抑え、若干の威厳を言葉に込める。
「君が勝手なことをするのも、捜査を一人でやっているからだ。相談相手がいないから混乱して無茶をする。補佐役がいれば大丈夫。私はそう考えたのだが、違うかね？」

「お言葉ですが課長。自分を補佐できる有能な刑事など、この課にいるのですか?」
「おらんよ」
二宮課長は吐き捨てるように言った。
彼には腹立たしいことに、部下の言うことは残念ながら正しかった。
ここの捜査課員には、科学捜査研究所の捜査官でも舌を巻くほどの広範な先端技術知識が要求される。レオンと同世代の刑事であれば、目を白黒させての思考停止に追い込まれるほどのものである。
重ねて、泣く子も黙る特殊急襲部隊——SATの猛者(もさ)も呆れるほどの体力と行動力を要求されることに、ベテラン勢がついていけるはずがなかった。
おまけに、刑事に必要な犯罪への嗅覚を、レオンは十二分に持っている。
無二の存在に無二の相棒など用意できるはずがない。だから二宮浩一郎(こういちろう)はレオン六波羅の単独捜査を、仕方なく黙認していた。
——だが、それも今日で終わりだ。
二宮は科学の進歩と納税者の寛容に感謝して、薄い笑みを浮かべた。
「昨日までは、そうだった」
課長の含んだ笑みを見たレオンは悪い予感がして、彼の背筋を冷たいものがなぞった。
二宮課長は勝ち誇った気分で、デスクに置かれた構内電話機の内線ボタンを押す。

「入ってこい」
数秒と経たずに、廊下とつながっているドアがノックされる。
そして入ってきたのは、若い私服警官だった。
年齢はレオンと同じくらいで、背も同程度である。ただし、身体の線は細かった。
刑事よりも、ホストか俳優でもやっていた方が似合いそうな雰囲気だ。日本人離れした美貌を持ち合わせている。
——華奢なコイツが、俺の相棒か？
欧州からの移民二世だろうか？　と、レオンは見当をつけた。
「シルヴァ君だ。階級は巡査部長」
「はぁ、そうですかぁ」
レオンが生返事をすると、新人刑事——シルヴァはレオンへ顔を向け、微笑を浮かべた。
妙齢の女性か有閑マダムが見たら、そのまま昇天しそうな甘い笑顔だとレオンは思った。
「はじめまして六波羅警部。あなたのパートナーになれたことを、光栄に思います」
そう言って差し出されたシルヴァの右手をレオンが反射的に握ろうとしたとき、彼はシルヴァの目の奥に小さな光が瞬くのを捉えた。
途端、彼は手を引っ込め、顔を強ばらせた。
「お前はブーマなのか⁉」

「はい、そのとおりです。内蔵光学デバイスのわずかな明度調整に気づきましたね」
美形の人型機械が淡々と発した言葉を無視して、レオンは課長へと顔を向けた。
「課長、この茶番を説明してください！」
「シルヴァはわが警視庁が試験的に導入した捜査支援型ブーマだ。ウチでテスト運用することになったので、君に担当してもらう」
「ちょっと待った！」
「彼がブーマであることを知っているのは警視庁の上層部とＡＤ・ＰＯＬＩＣＥの幹部、それに君だけだ。誰にも言うな。マスコミが知れば、『ブーマが知的労働者の職を奪った』と騒ぎ立てるからな」
「よりによって、何でこの私に――」
「ウチの刑事で、ブーマに導入された最先端技術へ一番通じているのは君だ。ちょうど相棒もいないしな。打ってつけじゃないか」
「俺がブーマをメチャクチャ嫌いなのは課長もご存じでしょう。その理由も含めて！」
二宮が右の眉を上げた。彼は右手を机の下に入れる。カチリという音がかすかに響いた。
それを確認した二宮の頬に獰猛な笑みが浮かぶ。
「――おい、口を閉じろ、青二才がいい気になるんじゃねえよ」
二宮の声が急に野太くなった。椅子を蹴飛ばして立ち上がり、三白眼でレオンを睨む。

「この俺が、俺の権限で決めたんだよ、文句あるのか、アァ⁉」
二宮に気弱なサラリーマン風の雰囲気は、もうどこにもなかった。
かつて東京中のヤクザをびびらせ、関東一の広域暴力団組長に泣いて詫びを入れさせたインテリヤクザ風の鬼刑事が、そこにはいた。
「しかし、こんなブリキ頭を相棒にしろなんてあんまり……」
「たかが好き嫌いで、ゴチャゴチャ抜かすな！」
レオンの目の前に立ったＡＤ・ＰＯＬＩＣＥ捜査課長は、鬼の形相で胸元からグロック自動拳銃を抜く。彼は目にもとまらぬ速さでそれをレオンの顎の下に押しつけた。
「ちょ、ちょっと課長」
二宮は歯をむき出して、凄みのある表情を浮かべた。
「六波羅。お前がどんだけ腕に自信があるのかは知らん。だが、お前は俺がコレを突きつけるのを防げなかった。つまり、一〇〇パーセント、ココで死んでるってことだ」
「いや、普通こんなこと予想しませんて！」
「ただの油断だ。俺たちゃ、油断ならねえ暴走ブーマ相手の商売なんだよ。気ィ抜いたら〇・一秒で死体になる。死なないためには、背中を守る相棒が必要だ」
二宮はシルヴァに向かって顎で問いかけた。
「シルヴァ巡査部長。お前、俺がグロックを抜くのを予想できたか？」

レオンの相棒候補はうなずき、冷静な声で告げた。
「二宮警視の右肩、人差し指と眼球が連動して動くのを確認していました。この場合、八九パーセントの確率で銃を突きつけると予想できます。阻止可能確率は九六パーセント」
「一気に生存率が上がったな。相棒ってのは頼りになるだろ。その相棒が、お前の場合は機械ってだけだ。それを『ブリキ頭』とか呼ぶんじゃねえ。パートナーには敬意を払え」
「……いいんですかね？　庁内で拳銃を部下に押し当てるなんて。この部屋だって監視モニター入ってるんでしょう？」
「本庁のマザーには緊急対応訓練の信号を送ってある。よってこれは訓練だ。で、どうする？　ごちゃごちゃ抜かすと、訓練中に事故がおきるかもしれんぞ？」
「わかったやります、やりますよ。こいつとやらせてくださいよもう！」
レオンはやけ気味に返答した。課長が短気なのにも程がある。
二宮はいつもの温和な顔に戻った。
そしてグロックをホルスターへ戻し、呑気そうに言った。
「では六波羅君、よろしく頼んだぞ。かわいい部下に相棒ができたことを私は喜んでいるよ。なあに、歩行機能つきのコミュニケーターと思えば何ともないじゃないか」
レオン六波羅は、憤然たる足取りで廊下を歩く。彼のすぐ後ろに、先端技術が生んだ人

型機械の規則正しい足音が続いている。
すれ違いざまにそれを目撃した婦人警官や女性職員は、一様に息を飲んだ。
――何が相棒だよ！　何が歩くコミュニケーターだよ！
確かに最新型のブーマは知的レベルもかなり優秀だ。上位機種になれば、並の人間より知的水準が高いと認識されるほどである。
レオン六波羅はAD・POLICEの誰よりも、ブーマの進化に用いられた技術のことをよく知っていた。なぜならレオンは警察官を志す前に大学院で、ブーマに知性を与える研究をしていたのだ。
「畜生め！　大学院になんか行ったのが恨めしいわ」
「六波羅警部、どうしましたか？」
わずか数分前にレオンの相棒になった、人間ではない銀髪の刑事が彼の後方から尋ねた。
「脈拍と呼吸それに血圧が、かなり興奮状態にあると出ていますが……」
「お前は俺の高機能ヘルスメーターかよ！」
レオンは立ち止まって振り向き、吐き捨てるように怒鳴る。
「任務には、パートナーの健康状態をチェックすることも含まれています、六波羅警部」
無表情で答える相棒に、レオン六波羅の目線は天を仰いだ。
「……その、六波羅警部ってのはやめてくれ。背中が痒くなる。レオンでいいぞ」

「分かりました、レオンさん」
捜査型ブーマの声が少しだけ和らいだ。レオンは毒気を抜かれて苦笑を浮かべた。

同時刻、東京某所。
薄暗く無機質な部屋の中で、知性的な外見の少女が大型モニターに向かい合っていた。
最近流行のナノ発光モニターではない。一昔前に流行した有機ＥＬ液晶のモニターだ。
何事かを情報端末に入力しながら、彼女は時折視線を横にある机にずらす。
見たくないが、見ざるを得ない――そんな仕草だ。
机の上には、かすかに紅く光る小さな物体があった。やがて彼女は手を止めた。首を振って小さくため息をつく。
ＬＥＤ照明が明るく点ったのはそのときだった。
「リンナ。薄暗い部屋に居続けると、性格まで暗くなるわよ」
勝気そうな少女の声が響いた。声の主に気づいて部屋の住人は応じる。
「申し訳ありません、シリアお嬢様。ですが、明るいとどうにも集中できないのです。何というか――」
「後ろから覗かれてる気がするってわけ？　まったく、しょうがないですわね」
シリアと呼ばれた少女は、おどけた口調で肩をすくめた。

お嬢様風の言葉とゴスロリの外見には、あまり似合っていない仕草だ。
だが次の瞬間に、彼女は表情を変えた。真剣な声音でリンナに問いかける。
「コアユニットの解析結果はどう?」
「シリアお嬢様。実に興味深い結果です」
シリアが身を乗り出した。
「どう興味深いの?」
リンナは表情を変えずに応じる。
「ブーマ技術の根幹を成す技術『α GEED』は説明するまでもありませんが……」
「『α GEED』。地球生命の進化を司る未知なる外的作用力。既存人類知識を超越するテクノロジーの根幹で、完全な解明はできていない」
シリアはお決まりの謳い文句を暗唱して、確認するように言った。
「で、それが?」
「生命進化の先にはいったいどんなものがあるか、見当がつきますか?」
リンナの問いに、シリアは鼻で笑った。
「分からないから、未知のテクノロジーなんでしょ。発展形を作ることができるなら、是非とも見てみたいものだわ」
リンナの唇が少しだけ緩む。その反応にシリアは眉を吊り上げた。

「まさか……？」
「そのとおりですわ、お嬢様。まずはご覧いただいた方がよろしいかと」
リンナは照明を、シリアが来る前の薄暗い状態へと落とした。
空中に投影キーボードの青い光が浮かぶ。彼女はキーボードを操作し、部屋の中央に置かれた大型三次元モニターに映像を流した。
何かの結晶構造が大写しになった。
「アルミニウム、シリコン、鉄、銅、マンガンとマグネシウムの合金です」
「6000系合金。自動車外板によく使われてるやつね」
シリアの言葉にリンネがうなずく。彼女はポインターを操作し、一部を拡大する。
金属分子らしき格子構造、その間に入り込んだ糸のようなものが見えた。
シリアの目が大きく見開かれた。
「これは……！」
「シリアお嬢様、さすがに気づかれましたね」
説明するまでもなくシリアが理解したことに、リンナの頬は緩んだ。
彼女はすぐに表情を戻す。笑いごとで済ませられない話だった。
「微細電流を流して確認しました。ほぼ間違いなく、神経線維です」
「あり得ない！」

シリアは叫んだ。彼女の知る限りにおいて、そのような技術体系はない。シリアたちも相当な技術力を持っているが、全力を用いてもおそらく実現不可能だろう。
だが、リンナは冷静である。静かに事実を告げる口調で言った。
「現実なのです。明らかに、金属と分子単位で融合し、神経線維が張り巡らされています。すなわち……」
「新たな超テクノロジー……ってことなのね？」
「ええ。うまく使えば、人類に大きな恩恵をもたらすでしょうが」
リンナは冷静な声で続けた。
「残念ながら、悪用することもできます。神経組織に対応するだけの容量があれば、どんな金属物体でも制御できます」
「今回はＳＵＶだった。でも、もっと大きなものでも、ってこと？」
「ええ。ブーマの個体が保有する人工知能の容量次第では、トラックだろうと、リニア鉄道だろうと、軍艦だろうと、とにかく金属であれば、融合して乗っ取ることが可能です」
「何てことを――」
シリアがうめく。最悪の想定を彼女は口にした。
「沖縄（おきなわ）沖に浮かんでいる国連軍の最新鋭メガフロート空母〈エンタープライズ〉でも乗っ取ることができる。そういうことね？」

「ええ。最新鋭の艦載機〔シースペクター〕も、海中警備の新型原潜〔ジェリコー〕級も、全部をコミコミで」

リンナの言葉に、シリアは天を仰いだ。それを見たリンナは、とりなすように補足する。

「あくまでも理論上の話です。実際に〔エンタープライズ〕を乗っ取るなら、百メートル四方の人工脳髄が必要になります。現実的ではありません」

リンナはそう言い終えると、シリアを安心させるように大きくうなずいた。

「大丈夫です、原理は判明しました。早速、対抗ナノマシンの作成に入ります」

「対応は可能なの？」

シリアが腕組みした。リンナが微笑む。

「ご存じのとおり、私たちにはそれを可能にする力がありますから」

「お願いするわ。私たちの戦いが、それにかかっている」

シリアはそう言うと、照明を明るくしようとした。リンナはそれを手で制する。

「待ってください お嬢様。もう一つ、見ていただきたいものがありますので」

三次元モニターの画像が切り替わる。先ほどとは違う、小さな結晶構造が投影された。雪の欠片のように、きれいな結晶である。

「ナノマシン？　これがどうしたの？」

「これは、コアユニットから発見したものです。内部解析の結果により、これが干渉して

動きを止めたと思われる形跡があります」
「リンナ、それは――」
「お嬢様のご想像どおりだと思われます」
彼女の報告に驚くシリアを見て、リンナは満足げにうなずく。
「まさか、今になって見つかるとは……」
シリアの呟きに、リンナが応じた。
「保有候補者は三名。そのうち一名には、すでに手を回しています」
「ずいぶんと早いのね」
リンナは苦笑しつつ答える。
「まあ、半分は偶然です。……残る二名について、どうなさいます？　確保しますか？」
リンナの質問に、今度はシリアが大きくうなずいた。
強い意志を込めた口調で彼女は命じる。
「当然じゃないの。リンナ、すぐに命英(めいえい)を呼んでちょうだい。最優先で」
「承知いたしました、お嬢様」
リンナは一礼した。彼女は空中キーボードを操作し、三次元モニターのスイッチを切る。
それを確認したシリアが照明輝度を上げた。
ＬＥＤが白い光を放って部屋を明るく照らす。

すると机の上で怪しく光っていた物体の正体が明らかになった。ブーマのコアユニットである。

ずいぶんと痛んではいるが、それもそのはずだ。これこそ昨日にレオンが銃撃し、プリスが首を吹き飛ばし、ネネが噛みついた暴走ブーマのコアユニットなのだ。

リンナとシリア――二人の少女こそ、装甲服の戦士だったのである。

二人は視線を交わし、軽く会釈する。その後は一言も発することなく、己の使命を果たすためだけに動き始めた。

自由を告げる鐘の音が鳴り響いた。

彼女にとっては何のためにあるのか意味の不明な、現代国語の授業が終わった。

プリスはいち早く席を立った。誰よりも先にドアを開け、廊下へと飛び出す。彼女には急がなければいけない理由がある。

生きていれば自然の摂理として空腹になる。栄養摂取を求めるのは命をつなぐのに必要なことだ。ましてや、それが育ち盛りであればなおさらである。

プリスは生命としての本能で動いていた。

階段を一段飛ばしで駆け下りる彼女の脳裏にあるのは、ただ一つの単語。

――タマゴチャーハン！

今日は水曜日。学校の隣にある『香港亭（ほんこんてい）』で、高校生だけにタマゴチャーハンが半額になる日なのだ。数は限定一〇食のみ。レア度が高い。
プリスは『香港亭』のチャーハンを愛している。豪華なものではない。タマゴとネギ、それにわずかばかりのチャーシューが入っているだけ。味つけも、塩、コショウのみ。
——シンプル・イズ・ベスト！
プリスはそれを愛していた。単純な構成でありながら、他のおかずを必要とせずに主食として成立する。料理人の込めた思いが奇跡を成し遂げている。
最後の角を曲がり、あと一息走れば『香港亭』まで一直線。プリスは前傾姿勢をとり、バスケットシューズで床を蹴る足に力を込めた。
最後のダッシュ。この直線で勝負が決まる。彼女は気合を込めて叫んだ。
「そぉりゃアアアアアアア！　アアァ？」
彼女が発した叫びの語尾が疑問形となってしまった。突如、横合いから何かが飛び出し、プリスにすがりついたからだ。それは腰にまとわりつき、プリスのダッシュ力を奪う。
プリスは姿勢を崩す。視線を送ることもなしに思いっきり怒鳴りつけようと口を開いたところで、能天気な声が響いた。
「プーーリーーースゥーーーちゃあーーーん！」
こんな能天気な声の知り合いは世界に一人しかいない。ネネ六波羅だ。

プリスは力なく二、三歩進み、ネネを引きずろうと試みた。だが、いくら能天気だろうと一人の女子高生はそれなりに重い。かといって、ネネを説得している暇はないだろう。彼女の快進撃はそこで止まった。がっくりとうなだれる。
突進力を失った彼女の脇で、やはり『香港亭』を目指す勇者たちが駆けて行く。その数は優に一〇を超えていた。
もはや、『香港亭』の半額タマゴチャーハンにありつくのは絶望的だった。
来週の水曜日は定休日。だから半額タマゴチャーハンにありつくには、どんなに短くても二週間待たねばならないことになる。
プリスは膝からガックリと崩れ落ちた。目からは光が失われ口はだらしなく半開きに。
失われた機会の重さに、呆然としているのだ。
傷心のプリスをネネが抱きしめた。天真爛漫そのものの声で言う。
「プーリスちゃん。いっしょにご飯食べに行こー!」
ネネはプリスの顔を覗き込んだ。反応がないことに怪訝そうな表情を浮かべる。
彼女は大きく息を吸い込み、耳元で半ば叫ぶように言った。
「プーリーースーーちゃーーん! ごーーはーーんーー!」
ハッと意識を取り戻したかのごとく、プリスの目に光が戻る。何度か瞬きをしてあたりを見回した。



「あたしの……半額タマゴチャーハンは……どこに……？」
「もしかして『香港亭』？　ダメだよ、プリスちゃん。今からじゃ、絶対間に合わないよ」
ネネが首を横に振った。人差し指を立て、得意げに言う。
「遅いよ遅いよ。もう少し早く行かないとぜーーったい間に合わないよ。次からは気をつけてね～」
プリスの目は大きく見開かれ、彼女は完全に再起動を果たした。
「ネェーーーーネェーーーーー！　オマエがァアアアアア！」
彼女はネネの両肩をつかみ、前後に激しく揺さぶる。
ネネは気持ちよさそうに目を閉じる。そして甘えるような口調で言った。
「私が、なーに？」
「オ、オマ、オマ、オマエが――」
「だから何？　プリスちゃん」
さらに何か言おうとしたプリスは、周りがどこか騒がしいことに気づく。
彼女はもう一度あたりを見回した。プリスとネネを遠巻きにして女子たちが立っている。
不意に、一年生女子の一人が、ポツリと呟いた。
「朝霧先輩とネネって……そーなんだ……」

彼女はさらにあたりを見回す。彼女たちのヒソヒソ声が聞こえる。
「ネネをあんなに激しく抱きしめて……」
「ロックミュージシャンて……やっぱり情熱的……」
「ね、そう思う？　やっぱそう思う？」
「これって、吊り橋効果ってヤツ？　そうだよね？」
――チッ！
ヤバい、何がどうなのか考えたくないが、とにかくヤバい。
プリスとネネがブーマに襲われたことは、すでに学校中の人間が知っている。何しろ今朝のニュースだけでなく、当事者のネネが相手構わず言いふらしているからだ。
とにかく、この場を何とかしなければマズい。プリスはその一心で叫んだ。
「ネネ、逃げるぞ！」
プリスはネネを抱えてそこから走り去った。
背後で爆発した嬌声を、プリスは聞こえないことにした。

「ごっはん、ごっはん。たのしぃごっはん！」
得体の知れない鼻歌を呑気に歌うネネを、プリスはため息と共に見つめる。
降りかかる災難は明らかにネネが元凶だ。しかしなぜか憎むことができない。能天気な

せいなのか、空腹のせいなのか、どうにも正解が分からない。考える気力がない。
今日のプリスは、少し遠くまで足を延ばすことに決めた。
学校の周りは『香港亭』以外だと軽食系の店がほとんどだ。何しろこのあたりは住宅街で、高校生以外のまとまった客が見込めない立地なのだ。
それでも味の確かな店はある。本格コーヒー店の『珈琲家族』や甘味どころ『しろがね屋』などは、観光ガイドブックに乗るほどの名店だった。
だがプリスには、名店を選ぶ選択肢がなかった。
『珈琲家族』の自慢はパスタランチである。だが週代わりでメニューが決まっていた。今週はムール貝が自慢のペスカトーレのみ。貝を食べるとジンマシンが出る彼女にはとても食べられない代物だ。
『しろがね屋』の幕の内ランチは素晴らしい。季節の野菜と旬の魚を用い、健康を考えて玄米ご飯をつけてくる親切さにプリスはいつも感心していた。ただ一点、一五〇〇円という値段を除いての話だ。
そんなわけで、プリスは商店街に歩を進めていた。商店街に行けば、彼女が『香港亭』の次に愛している『松永精肉店』の牛肉コロッケがある。
それを『ベーカリー清水』の食パンで挟めば、最上級のサンドイッチに変身だ。半額チャーハンには負けるが、彼女のお気に入りメニューの一つだった。

天気もいい。歩道も芝生に覆われた緑あふれる商店街まで足を延ばすのも悪くない。
先を行くネネがスキップする足を止めて振り返った。楽しそうに言う。
「こうやってお散歩するのも、すごく楽しいね！」
「そうだな。『香港亭』で半額チャーハンを食べてたら、もっと楽しかったはずだ」
「プリスちゃん、さっきも言ったでしょ。もう少し早く出ないとダメだってば」
「だからキサマの……あぁ、もういいよ」
小動物のようにキラキラとしたネネの目にプリスは首を振る。どうも調子が狂う。
彼女は、何度目になるか分からないため息をついた。
「何で着いてくるんだよ、ネネ？」
「何でって、プリスちゃんが連れて来たんだよ？　無理やり抱きかかえてぇ」
ネネが上目遣いで見上げた。無邪気を装う悪魔の表情である。
「そりゃ、あの状況であの場にいるわけにいかなかっただろ？」
「そうだね。早くしないとお昼終わっちゃうもんね」
プリスは平手でこするようにしてネネの頭を軽く叩く。ネネは頭をさすりながら言った。
「イッタあ。プリスちゃんがぶったぁ～」
「だから、〝プリスちゃん〟はやめろってば！」
突然、ネネが小首をかしげる。

「ところでプリスちゃん、私たちどこに向かってるの？」
彼女は脱力しながら言った。
「ほら、見えるだろ、『松永精肉店』。あそこの」
「分かった、牛肉コロッケだね！」
プリスは満足げに微笑む。
この数時間でようやく人類らしいコミュニケーションの成立した瞬間だ。
「そうそう。メンチカツの方が美味いってヤツもいるけど、あたしは牛肉コロッケの方が好きなんだ。あの、柔らかさの中に感じるほのかな牛肉の……」
「ネネもお兄ちゃんも大好きなんだ。美味しいよね、アレ！」
プリスの蘊蓄(うんちく)を無視したシンプルなネネの同意に、彼女は力なく微笑を浮かべた。

レオンが運転するトヨタ製の覆面パトカーは、疑似エンジン音を響かせながら早稲田通りと中杉通りの交差点を曲がった。
助手席に座っているシルヴァが困惑したように眉を顰(ひそ)める。
「レオンさん、調布(ちょうふ)へ行くには道が違いませんか？」
「昼飯だよ、昼飯。動物は生きてりゃあ腹が減るんだ」
シルヴァは硬直して視線を虚空に向ける。一瞬の後、レオンに視線を移す。

「それでも、この道を行く合理性がありません。先ほどまでのルートで科学捜査研究所に行けば、途中に個人経営の定食屋が六三軒、ファミリーレストランが二十八件あります。一方、現在進路から想定されるルートでは、それぞれ一〇分の一以下になります」
「何だ？　Vネットで調べたのか？」
レオンがフンと鼻を鳴らす。シルヴァは軽く首を振った。
「いいえ。警視庁にあるマザーのホロメモリに直接アクセスしました」
「本庁にはどうでもいいデータも保管されてるんだな」
レオンはそう言うとアクセルを踏んだ。五〇キロワット超の出力を誇るモーターが、可聴域ぎりぎりの耳障りな高音を立て、歩行者への危険防止を兼ねた重低音が打ち消す。排気ガスを模した水蒸気をたなびかせながら、覆面パトカーは込み入った街に入る。
シルヴァが彼をたしなめるように言った。
「レオンさん」
「お前の言いたいことは理解できる。栄養補給だけが目的ならお前が正しい」
「ならば……」
「人間ってのは非合理的な生き物なんだ。こういうときは、大体何か他の目的が隠れてる。お前も捜査型ブーマだってんなら、当ててみろ」
シルヴァが再び視線を虚空に向けた。計算処理をするときの癖らしい。

一〇秒ほど待っても答えが出ない。先ほどよりも時間がかかっている。レオンがとりなすように言った。
「まあ、お前みたいなでき立てのブーマには無理かもしれないが――」
シルヴァの目に焦点が戻った。レオンに視線を送って口を開く。
「ネネ六波羅さん、ですか。様子を見に行くおつもりですね？」
レオンの頬に笑みが浮かんだ。
「そうだ、よく分かったな、合格だ。時間はかかりすぎだが」
「ありがとうございます」
シルヴァはうなずいた。頬には笑みらしきものが浮かんでいる。
「ネネ六波羅。昨日の暴走事件における被害者で、レオン六波羅の義理の――」
「義理はいらない。あいつは、俺の妹だ」
レオンが笑みを消してシルヴァの言葉をさえぎる。思いがけない強い語調に、シルヴァの笑みが消えた。捜査型ブーマは深々と頭を下げる。
「あなたの気分を害する表現を用いて、申し訳ありません」
「いや、いい。それとな、こういうときは『申し訳ありません』じゃなくて『すみません』にしてくれ。あんまり畏(かしこ)まられると、背筋がゾワゾワしてくる」
「申し訳……すみません」

言い直したシルヴァが軽く会釈する。レオンの頬に笑みが戻る。
「ま、とにかく。科捜研には、一六時までに着けばいいんだ。その間に、昨日の被害者が今どうなっているか、状況を確認するくらいの時間はあるだろう？　捜査の一環だよ」
それを聞いたシルヴァが首をかしげた。レオンが顔をしかめる。
「何だ、まだ文句があるのか？」
「いえ……ただ、食事はどうなるのか、と」
レオンが笑い出した。
「安心しろ。当てがある。実はな、ネネの高校の近くに『松永精肉店』っていう肉屋があって、そこの牛肉コロッケが……まあ、食えば分かる。もうすぐそこだからな」
前方に赤信号が見えた。レオンはゆっくりとブレーキを踏む。電力を失ったモーターが唸りを抑えた。
レオンはふと気になり、シルヴァに声をかけた。
「ところでお前さん、モノは食えるのか？」
「大丈夫です。味覚と、それを表現する語彙はあります」
レオンはその言いように肩をすくめた。忘れていた首の痛みが蘇り、彼は苦笑した。
『松永精肉店』はもうすぐそこだった。見るからに肝っ玉母さんな、でっぷり太った店主

とお客さんの会話が聞こえるほどの距離だ。
ネネは上機嫌で鼻歌を歌っている。先ほどとは、メロディと歌詞が変わっている。
「こーろっけーの中にはーころっけーが一つ、叩いてみるたびころっけーが増える！」
――コロッケのマトリョーシュカかよ、わけの分からない歌だ……
プリスは複雑な笑みを浮かべる。彼女は少し変だが悪意はない。むしろ警戒心がなさすぎで大全開の印象だ。それがネネを嫌いになれない理由だと気がついたのだ。
このまま受け入れるしかない。それでもいいと思っている自分の気持ちに、プリスは少しだけ驚いた。
「死線をくぐり抜けた腐れ縁、ってやつか」
思わず独白した、そのときである。
『松永精肉店』の前に一台のセダンが停まった。プリスは何か嫌な予感を感じる。
左右両方のドアが開き、二人の男が現れた。がっしりしたアスリート体型の男と、ちょっとクールな美形だった。
アスリート体型の男は躊躇なくレジの前に立ち、大声で店主に言った。
「おばちゃん、牛肉コロッケ、六個！」
「ごめんねぇ、今はあと五個しかないんだよ！」
「ホントかよ。じゃあ、五個全部！　二個、二個、一個で包んでもらえるかな」

「あいよ、悪いねえ」
プリスは呆然としてその光景を見詰めていた。
『香港亭』の半額チャーハンがない今、プリスにとって『松永精肉店』の牛肉コロッケは最後の希望だった。
残された希望が今、目の前で奪われようとしているのだ。魂の叫びが口をついた。
「ちょ、ちょ、ちょっと待ったぁアア！　いや、待ってください！」
希望を独り占めしようとするアスリート体型の男が、プリスの方を向く。
その男であるレオンの目に、どこかで見覚えのある女子高生の姿が映った。
だが直後に響いた声は、彼女が誰なのか思い出そうというレオンの思考をさえぎり、彼の意識を刑事から私人へと引き戻した。
「お兄ちゃんっ」
レオンは破顔した。彼は真っ直ぐに飛び込んできたネネを抱え上げる。くるくると数度空中で回し、地面に下ろして頭を撫でた。
「ネネ、どうしてここに？」
「えっとね、お昼ご飯買いに来たんだぁ」
「そっか、お兄ちゃんもだ。一緒に食べるか？」
「えっと、どうしようかなぁ」

ネネが少しだけ困ったような顔をした。レオンがその意味に気づく。
「お友だちがいるなら、一緒に食べよう。ご飯ってのは、皆で食べた方が美味しいもんだ」
「そう？　じゃあ」
ネネは振り返った。
「プリスちゃん、お兄ちゃんが一緒にお昼ご飯食べようって！」
ネネの〝お友だち〟が誰かを知ったレオンは思わず叫ぶ。
「何だよ畜生、プリス朝霧かよ！」
「アンタはレオン六波羅！」
アスリート男の正体に気づいたプリスは叫んだ。昨日の夜、怪しげな事情聴取を繰り返した仇敵(きゅうてき)が、今度は彼女から牛肉コロッケを奪おうとしていたのだ。
「あれぇ？　お兄ちゃん、プリスちゃんともうお友だちなの？」
「ああ、強敵と書いて〝トモ〟と読ませるってヤツだ。異論はないよな？」
それは彼女も望むところだ。プリスは獰猛(どうもう)な笑みを浮かべる。
「そうさ、ネネ。アタシたちはお〝強敵(とも)〟だちなんだよ、フン」
それを聞いたレオンが顔をしかめる。
「俺の妹を気安く呼び捨てにするんじゃねぇ」

「仕方ないだろ、ネネがそうしろって言ってんだから。だよな、ネネ?」
プリスの問いかけには答えずに、ネネは困ったような顔で兄を見つめた。
それを見たレオンは勝ち誇ったように言葉を吐く。
「ハッ、見え透いた嘘を! ネネがこんなに困って……」
「お兄ちゃん、この人はいったい誰なの? お兄ちゃんの友だち?」
虚を突かれて、レオンは驚いたような表情を浮かべた。
「そっか、まだ紹介してなかったな。こいつはシルヴァ。最新……の、俺の相棒だよ」
暴走ブーマ事件の被害者に『捜査型ブーマ』とは言えなかった。ましてや被害者は、彼が最も大切にしている妹なのだ。
「はじめまして。レオンさんの相棒を務めさせていただくことになった、シルヴァと申します。よろしくお願いします」
「あたし、ネネ! ネネ六波羅。よろしくね」
ネネがシルヴァに両手を差し出した。彼はにこやかにその手を取る。
平和そのものの光景なるも、対決を中断されたプリスは状況が気に入らなかった。
彼女は咳払いをすると、レオンに話しかける。
「和気藹々(あいあい)としてるところで悪いんだけどさ、そういうの後に……」
今度は『松永精肉店』のおばちゃんがプリスの言葉をさえぎった。

「コロッケ五個、お待ち！　六〇〇円だよ！」
「あいよ」
　レオンはおばちゃんに応じた。彼はプリスから視線をそらさずに財布からデビッドカードを取り出してレジに押し込む。横目で値段を確認し、支払いボタンを押す。
「毎度どうもー」
　おばちゃんの笑顔に、一瞬同じ笑顔で返したレオンはプリスに向き直って言う。
「和気藹々としちゃあダメなのかい、〝プリスちゃん〟よ？」
「そんなこたぁないさ。ただ、ちょーっとそのコロッケを譲ってもらえないかな、〝ネネのお兄ちゃん〟」
　ネネと同じように呼び合う二人だが、相互に悪意を込め合っているのは明らかだ。
　困った顔をしていたネネは手を叩いた。
「そうだ、五個あるんでしょ？　一個ずつ分けようよ。皆で食べれば美味しいよ」
「んー、それもいいんだけどさ。もっといい方法があると思うんだよなあ」
　プリスは手のひらを組み合わせ、パキパキという音を立てて腕を回す。
　それを見たレオンがニヤリと笑った。左手を開いて右の拳を叩きつける。パーンという鋭い音が、さして長くはないアーケードに響き渡った。
「そうだな、こういうのはシンプルな方法が一番なんだよ。なあ、〝プリスちゃん〟」

首を回そうとしたレオンは、忘れていた痛みを感じて顔をしかめる。
その原因に気づいたプリスの顔が、あざ笑うように歪んだ。
そして彼女は挑発するように言った。
「誰にやられたか知らないけど、カッコ悪いなぁー。シップつきで大丈夫なのかい？」
「お、お前が……」
怪訝そうなネネとプリスの視線を見て、レオンは何か言いかけの口をつぐんだ。
「覚えてないなら別にいい。とにかくお前の知ったことか。刑事には色々あるんだよ」
「ふうン、何だか知らないけど宮仕えってのぁ厄介だな」
プリスはそう言って笑みを深める。
「で、ルールはどうするんだ？」
「武器使用なし。目潰しもなし。あとは……往来の迷惑にならなきゃ、大丈夫だろ」
「ＯＫ。話が早いね」
「待ってください。二人とも、何をするつもりですか？」
シルヴァが割って入った。動揺はしていないようだが、若干混乱した口調だ。
プリスとレオンは視線を合わせた。プリスが口を開く。
「何って、エキシビションマッチでしょ？」
「そうだ、俺もそう思ってたぜ」

レオンが言い、プリスが激しくうなずいた。シルヴァは冷静にとがめる。
「いけません。警察官が昼間から、しかも公道での喧嘩なんて、本庁に知れたら」
レオンが反駁する。
「何を勘違いしてんだよ、シルヴァ。エキシビションだって言ってんだろ」
「それは喧嘩とどう違うんですか？」
「わかんねえなら、黙って見てろ」
「うん、黙って見てるよ。さ、シルちゃん、こっち！」
シルヴァの手をネネが引っ張った。
「シルちゃん……？」
きょとんとした顔になった彼は、虚空を見据えたままずるずると引きずられていく。おそらく、『シルちゃん』とは何を意味するのか、本庁のデータベースやVネットから情報を引き出そうとしているのだろう。
プリスは同情したように言った。
「あのトボケたのが相棒だなんて。苦労してるでしょ」
「……人生は色々あるってことだ」
レオンが首を振るのを見て、プリスが肩をすくめた。
「そこまで分かってんなら牛肉コロッケの一つや二つ、素直に譲ってよ」

「二つ譲ったら俺の分がなくなるだろうが。それはそれ、コレはコレだ」
プリスが右足を前に出し、手をやや高く掲げた。
「じゃ、やるしかないってわけか」
レオンが左足を前に出し、ボクシングスタイルに構える。
「そういうことなんだな！」
言うが早いか、彼は右のロシアンフックを打ち下ろした。
プリスはその軌道を完全に読んでいた。当たるような動きではない。おそらく、彼女の腕前を試しているのだろう。
——それなら！
彼女は素早く身を沈めた。そのまま屈伸するような姿勢を取り、左足を伸ばしてクルリと一回転する。足を払われたレオンは体勢を崩した。
「水面蹴り！　久々に目の前で見たよ！」
おばちゃんの叫ぶ声が聞こえた。プリスは微笑む。こんなところに、破壊王の技を知っている人がいるなんて！
だが刑事の肩書きは伊達じゃなかった。普通なら尻餅をつくはずの攻撃に、よろけるくらいで耐えている。
「チイッ！」

レオンは舌打ちと共に、ミドルキックを繰り出した。
しゃがんだままの姿勢では危険だ。
そう判断したプリスは身体をそらせ、手を後ろにつく。レオンの蹴りがプリスの腹上を通り過ぎる。
プリスはそのまま腰を上げ、逆立ちの姿勢になって開脚する。手を支点にして回転し、レオンの胴をなぎ払った。直後、彼の痛みにうめく声が聞こえた。
「カポエラかい、見事なもんだねー」
再びおばちゃんが叫ぶ。格闘技マニアだったらしい。
しかし、その声に気を取られたのが一瞬の隙につながった。
一回転半してプリスが立ち上がったとき、すでにレオンは彼女の真後ろにいた。
彼は右腕でプリスの首を捕獲しようとしていた。スリーパーホールドで絞め落とそうというのだろう。
「残念だが、午後の授業はお休みだ」
レオンは余裕たっぷりで彼女に言った。だがこの一言によって、プリスは勝利を確信した。レオンは、見せてはならない隙を見せてしまったのだ。
彼女は両手を頭上後方に回し、レオンの首に巻きつけた。彼の首を肩に固定し、同時に両足を前に振り上げて思い切り尻餅をつく。

「スタナー！　何てことだい、ストーン・コールドばりだね」
おばちゃんが叫ぶのと、レオンの顎がプリスの肩に叩きつけられるのは同時だった。
彼女は両手を離して立ち上がった。レオンがふらつきながら頭を押さえている。顎を強打し、脳が揺れたのだろう。
——今だ！
彼女はレオンの後方に回り込んだ。両手を彼のヘソに組んで腰を落とす。
プリスの動作が何を意味するか気づいたおばちゃんが叫んだ。
「バーックドロップ！　ヘソで投げる、テーズ式だよ！」
言葉どおり、プリスはヘソを基点にきれいなブリッジを描いた。ドサリという音と共に、レオンの両肩が緑色のフカフカした芝生におおわれた路面に着いた。
プリスはさらに体勢を動かす。おばちゃんなら、きっとやってくれる。
彼女の考えたとおりだった。おばちゃんは叫んだ。
「ワン、ツー、スリー！　バックドロップホールドで、勝者、プリス朝霧！」
「すっごーい、プリスちゃん！」
ネネの言葉にプリスは親指を立てた。ネネがうなずき、力強いサムアップを返す。
プリスは呆然としているように見えるシルヴァに人差し指を突きつけた。
「あたしの勝ちだ。こいつの牛肉コロッケは、あたしのものだ！」

「アイタタタ……」
レオンが意識を取り戻したのは一〇分後だった。目覚めた彼にシルヴァが声をかける。
「おはようございます、レオン」
「こういうときは『おはよう』じゃなく、『大丈夫か』だ」
レオンは首を振りながら応じて、あたりを見回しながら起き上がる。彼は覆面パトカーの中に運び込まれていた。
ネネはすでにいないしプリス朝霧の姿もない。答えは分かりきっている。
だが念のため、シルヴァに質問する。
「あいつらは？」
「帰りました。ネネさんとプリスさんから、あなたによろしくと伝言を承っています」
レオンはうめいた。畜生、相手が女だからと油断したつもりは毛頭ないが――
そこで彼は大事なことを思い出した。シルヴァに向かって尋ねる。
「おい、俺のコロッケはどうなったんだ？」
「それは……プリスさんが持っていきました。勝者の権利だそうです」
レオンは歯軋りと共にうめく。
「畜生、俺が金を払ったんだぞ！」

「〝エキシビション〟の賞品だったのでしょう?」
「あれはなあ!」
声を荒らげたレオンへ、シルヴァは冷静に告げる。
「まさか私闘だったのではありませんよね?」
レオンはそのとおりですと言えず、言葉に詰まる。
「オ、オゥ。当然じゃないか」
「本庁に報告する必要があるのかと思いまして」
シルヴァは奇妙な表情で応じた。生真面目さと機械っぽさが混じった、実に不可思議な表情である。感情に流されない報告者の顔だ。
——畜生、課長の野郎。これが狙いだな。融通の利かない余計な鈴をつけやがって。
心の中で二宮へあらん限りの罵倒を吐いていたレオンに、シルヴァが言った。
「しかし、見事なプロレスの試合でしたね。あの構えからある程度の攻撃パターンは見当がつきました。ほぼそのとおりの展開でしたよ」
レオンの怒りが爆発した。
「お前、そういうことは先に言え!」

第三章
Scratch Soul

三次元ディスプレイに、少女が映っていた。ギターを抱えているところから見て、何かのライブ映像だろう。

この映像を、一人の男が見ている。口許には満足げな笑みが浮かんでいた。実際、彼は満足していた。これは、彼一人のために撮影された映像なのだ。

ステージ後方やや斜め上という不自然なアングルの中、少女がためらいがちに言った。

『もっと歌いたいけど……門限もあるから。最後に一曲だけ』

映像の少女がギターを構え直す。男は傍らにあるギターを手に取った。映像とセッションするかのように、音出しのタイミングを見計らう。

少女の口が動いた。

『まだ誰も聞いたことのない作ったばかりの新曲、聴いてください！』

白いバインディングに黒いボディーを持つレスポールの音がマーシャルのスピーカーから鳴り響く。男は足でリズムを刻みながら、映像の少女——プリス朝霧（あさぎり）が奏でるリフにバッキングを加えた。

丸（まる）の内（うち）にある唯一の巨大なオフィスビル、その最上階でレスポール・カスタムが小気味よいサウンドを響かせた。

東京駅のリニア改札口を出てすぐ、皇居を取り囲む馬場先濠と日比谷濠の間。そこは通称、丸の内と呼ばれる場所である。

日本を代表する財閥系企業体のビルが立ち並んでいたそのエリアは、二一世紀初頭から二〇年続いた不況の影響を強く受けていた。

業績不振による企業の撤退や買収が相次ぎ、かつての輝きは遠い記憶のかなたに押し流されたかと思える時期もあった。

そのとき、ある新興先進企業が画期的な発明を成し遂げた。この発明品は不法移民労働者を雇用するよりもライフサイクルコストが廉価であり、危険な作業を厭うこともなく、長時間労働にも耐えることができた。

労働力を補完し代替するものとして、まさに理想的といえる。

新興先進企業は大企業に対して積極的に労働力を提供した。それは廉価な労働力を求めての企業海外移転を食い止め、不足する3K労働の担い手としても有効に機能した。

これにより、破滅に瀕していた日本の産業は息を吹き返した。

二〇二五年。『東京リストラクション』と呼ばれる首都再生計画において、この区画は八割以上の面積がその新興先進企業にゆだねられることになった。かつて、この地域の主だった財閥系企業にしても、その企業を抜きにしては経営が成り立たないのだ。

今、丸の内には建物が一つしかない。
高さが二五〇メートルほどもある、巨大な四角錘。エジプトにあるクフ王のピラミッドと比べて倍の高さを誇る、巨大な建造物だ。丸の内の四ブロックを潰しているこの建物は、新興先進企業が持つ独自の技術を用い、わずか三年で建造された。
外壁は乳白色の大理石に覆われ、朝日が昇ると共に徐々に淡く染まっていく様は、まさに新生日本の象徴ともいえた。
この光景が目を引き、現代のピラミッドは、今や世界的な観光名所になりつつある。現代の奇跡を目にした観光客は、物珍しい、だが同時にどこか落ち着かない視線を向けるのが常だった。
おそらく、それを建造した会社に対する本能的な畏れもあるのだろう。
ここを本社とする会社の名はゲノムコーポレーション。無限責任社員で構成される非公開企業であり——人造生命体「ブーマ」を、世界で唯一提供できる企業なのだ。
その社長を務めるのは、メイスン・クインシー。
三次元モニターを見ながら、レスポールを奏でている男だった。
メイスンは決裁書類の催促も忘れてギターを弾いた。何事にも優先して没頭する価値がある、そのくらいプリスの演奏はエモーショナルだと、彼はそう思っていた。

技術的にはまだまだ改良すべき要素がある。早いフレーズでリズムがときたま怪しくなることや、声量と音程のバランスが崩れるなど、課題は確かに多い。
だが、そんなものは大した問題ではない。時代を創るアーティストに大事なもの――特に、ロッカーにとって最も大事なものを、プリスは持っている。
常識や体制を疑い、抵抗すること。そして、アウトサイダーであり続けること。それがサウンドにあふれ出している。
これは、誰かが教えることができる種類のものではない。自分でつかみ取らねばならないものだ。
彼の見るところ、プリス朝霧はその二つを高い次元で持ち続けていた。
Vネットの立体動画配信サイトに投稿されたプリスの演奏映像を見た彼は、心の奥底からわき出る新鮮な驚きに身を震わせていた。ニュー・アーティストの出現に出会うことのできた自分は、心底幸運だと確信さえしていた。
〔ベイサイド・ホール〕で開かれたライブに、ちょっとした『用事』のせいで参加できないことをメイスンは本気で悔やんだ。
だから彼は部下に命じて〔ベイサイド・ホール〕の監視カメラを交換させた。この映像を手に入れるためだ。
違法という意識はなかった。彼にとっては、プリス朝霧のライブを鑑賞できない方が、

よほど罪深いことなのだ。
最後のフレーズに向けた間奏が始まると、メイスンの心に少しだけ苦痛が走る。
そう、この後すぐに――――！
轟音（ごうおん）と共に、三次元映像が乱れた。監視カメラが天井から落下し、妙な角度で映像が固定される。
『みんな逃げて！』
プリスの肉声が響いた。そう。彼女のデビューライブは、この暴走ブーマ乱入によって、音楽的には幕を閉じた。
だが、メイスンは思った。唇に軽い微笑みが浮かぶ。
『プリス朝霧のライブ』のクライマックスはここからだ、彼はそう思っていた。
彼はレスポールを構え直し、全音下げのチューニングを始める。手動で機械のように正確無比な調音を終え、彼は前奏を弾き始めた。ゆったりとした叙情的なフレーズだ。
横倒しになった監視カメラの中で、暴走ブーマがゆっくりと身を起こし始めていた。
メイスンの前奏が終わる。同時に、プリス朝霧がダークファイヤーのネックを両手でつかみ、華麗に宙に舞った。
彼は微笑み、ネックに左手の指を滑らせて狂熱的な早弾きを始めた。ブーマの頭に、プリスの一撃がめり込む。

ブーマの首が飛んだ。その瞬間こそがメイスンにとってのクライマックスだ。彼は、この衝動的破壊のためにライブがあったとさえ思っていた。
サラウンドシステムからサーッというホワイトノイズが流れる。彼は弾くのをやめた。ギター弦の振動が減衰する余韻を全身で受け止める。軽くエクスタシーを感じた。
彼は目を閉じる。このライブは、プリス朝霧のライブとして、ここで終わるべきだったのだ。それなのに――
静寂を通してかすかに人工音が聞こえた。パトカーのサイレンだ。
メイスンは眉をしかめる。彼は額の汗をぬぐい、レスポールから手を離した。肩に食い込むマホガニーの重みを感じながら独りごちる。
「警察も無粋なことを。せっかくのライブが台無しだ」
メイスンはギターのストラップを首からはずし、傍らのソファに座り込んだ。高級本革製の豪奢なソファは、彼の均整が取れた身体を受け止める。
「全ての人間が、彼女ほどの勇気を持っていれば、我々など生まれなかっただろうに」
彼はそう呟き、部屋の片隅を眺めて指を鳴らす。
空間に投影された三次元ディスプレイの映像が少しだけ歪んだ。ホロメモリにアクセスしているのだろう。案の定、数瞬後に映像は切り替わった。
どこかの埠頭が大映しになった。ロシアン・マフィアらしき外国人たちと、ＡＤ・ＰＯ

LICEが激しい銃撃戦を行っていた。彼は無表情にそれを眺める。人間同士の争いになど、彼は一切興味がない。
ブーマが突如として暴走し、SUVと融合したときになって、やっとメイスンの顔に笑顔が戻った。彼はブーマと機械との融合を満足げに眺めた。
暴走ブーマはマフィアも武装警察も共に吹き飛ばす。圧倒的な戦闘力だ。彼の口許が大きく緩んだ。
警察に密輸の情報をリークしたのは彼だった。
その上で、暴走ブーマと重武装のAD・POLICEとの戦闘を仕組み、新型ナノマシンの実戦テストを行ったのだ。
結果、全てが予定通りだった。メイスンは暴走ブーマの戦いぶりに満足していた。間抜けなAD・POLICEがプリス朝霧のライブ会場にブーマを落下させるという暴挙こそあったが、新たな彼女の魅力を発見できるという思わぬ副産物もあった。
メイスンは満足していた。これで、AD・POLICE設立後、抑え込まれる一方だった暴走ブーマによるテロを再開できる。人類に対する抵抗を再開できるのだ。
だが、不安要素もある。プリスともう一人が激しく抵抗しているときに乱入した装甲服着用戦士だ。これは、彼の計算になかったことである。
ブーマの発表と発売開始から十余年。彼が率いるゲノム社に抵抗できるだけの組織は、

この地球上にはほぼないはずだった。

私企業が対抗するのにゲノムは大きすぎる相手だし、中進国以上の国家はゲノム社抜きでもはや存在できない。それほど、ゲノム社は傑出した存在なのだ。

それなのに、彼とゲノムに対抗しようとする者がいる。

メイスンは唇を歪め、指を鳴らす。三次元モニターの映像が消え、スピーカーが沈黙した。

彼は険しい顔のまま腕を組んだ。窓際まで歩き、眼下はるかに丸の内を見下ろす。半壊し、再建されていない丸ビルの姿が見える。彼が仕組んだテロによるものだ。

だが、過去の偉業をあらわすその光景を見ても、メイスンの心は晴れなかった。

鐘が鳴り響き、解放の時を知らせた。

プリスは大きく伸びをした。彼女にとって、漢文の時間は謎に満ちていた。漢字を並べて詩を作ることなんて、現代においては中国人以外に不可能だろう。少なくとも、プリスはライブでやろうと思わない。

ともかく、これで放課後だ。高校生にとって、何よりも貴重な時間だ。

部活に精を出す、図書館にこもる、下校中にティータイムを楽しむなど、高校生の間にしかできない様々な楽しみ方がある。

しかし、プリスはそのどれにも興味がなかった。決まった部活にも入らず、成績もそれほど悪くない彼女にとって、学校に残っている意味はあまりない。ティータイムは楽しみではあるが、今日は——
「ちょっと、プリスちゃん。待ってよぉ」
焦ったような、だが能天気な声が駐輪場に響いた。彼女は聞こえないフリをした。これ以上、声の主に関わるのは御免だ。何か、ろくでもないことの起きる予感がする。
彼女は左右を見渡し、自分の自転車を探す。思わぬロスタイムに思わず舌打ちする。
プリスは今朝、ひどく急いでいた。だから、いつもの位置に停められなかったのだ。
彼女は焦っていた。早くしないと、あの能天気な悪魔に捕まってしまう。とにかく、何とかしてこの場から逃走しなくては——
彼女はやっとアレックス・モールトンを見つけた。素早く駆け寄り、ハンドルを握る。大きく息を吐き、一歩を踏み出そうとした、そのとき——
「プリスちゃあん、みぃつけたぁ！」
「ヒャアッ」
ネネの声が響き、プリスは思わず自転車のハンドルから手を離した。背筋に冷たいものが走る。背後から自転車の倒れる音が聞こえた。
「ちょっ、プリスちゃん、自転車！　高いんでしょ、これ」

ネネの慌てた声が聞こえる。プリスは呆然としたまま、力なく応じた。
「オ、オゥ。まあな」
「もう、いくら折りたたみ自転車だからって乱暴にしちゃダメだよ。大事に使わなきゃ」
ネネの言葉にプリスは我に返った。慌ててかがみ込み、車体をチェックする。少しだけ泥で汚れたが、特に問題ないようだ。
転倒の原因を作った本人が、ごく気楽そうに言った。
「ホント、高そうな自転車だよね。いくらしたの？」
「言いたくないいくらい高かった。もう、死ぬ気で何カ月もバイトしてさ……って！」
プリスが我に返った。仁王立ちし、人差し指をネネに突きつけながら言う。
「何でオマエが着いてくんだよ！」
「だってぇ、お友だちじゃない。一緒に帰ろうよ」
プリスはため息をついた。ネネと一緒にいるのも、別に悪くはない。だが、今日一日、彼女のせいで振り回されすぎている。明日ならともかく、今日は放っておいてくれよ。
そこまで考えて彼女は苦笑した。ネネの申し出を、ある程度認めている自分がいるのだ。
だがそこで、重要な事実に気づく。プリスは先ほどより幾分柔らかい口調で言った。
「いや、でも……大体、ネネ、どこに住んでんだ？」
「プリスちゃんはどこ？」

「質問に質問で答えんなって……ＯＫ、分かったよ分かった、高円寺だ」
ネネが頬を膨らませたのを見たプリスが仕方なく答える。彼女は世の中の理不尽さを痛感していた。人の話を聞かない人間の、何と強いことか！
その答えを聞いたネネが笑顔で応じる。
「やった、ネネは西荻窪。同じ方向だね～」
「どう同じなんだ。真逆じゃないか！」
プリスは大声で否定した。西荻窪駅と高円寺駅は学校の最寄り駅、中央線の荻窪駅を挟んで逆方向に存在している。絶対に、どんなことがあっても同じ方向ではない。
ネネは首をかしげ、不思議そうに言う。
「新宿から見れば、同じ方角だよ」
「ここのどこが新宿なんだ！」
プリスは何度目になるか分からないため息をついた。ネネの思考回路は謎すぎる。本当に人類か？　そんな考えすら頭に浮かんだ。
彼女は頭を振った。暴走ブーマも、ＡＤ・ＰＯＬＩＣＥも、謎の後輩も、今日のところはもう充分に堪能した。今はとにかく家に帰りたい。帰って何も考えずにゆっくり寝たい。
プリスは気持ちを切り替えた。ともかく、ネネとは逆方向なのだ。そこを強調しよう。
「いやー、でも自転車だと逆方向だな！　いやぁ、残念だな、ハハハハハ！」

彼女はネネの肩をパンパンと叩いた。できるだけさりげない様子を意識しながら愛車にまたがる。全力でダッシュできるよう、慎重にペダルの位置を調整する。
完璧なポジションを手に入れた彼女は、最後に強くネネの肩を叩いた。
「じゃあな、ネネ！　また明日！」
言うが早いか、プリスはペダルに力を込めた。完璧なダッシュが決まる。アレックス・モールトンが猛烈な勢いで駐輪場を飛び出し、ネネをその場に置き去りにした。
背後からネネの声が聞こえた。
「プリスちゃん！」
相当に慌てているらしい。ネネにしては早口だ。プリスは後ろを振り返った。ネネが口に両手を添え、メガホン代わりにしている姿が目に入った。何かを必死に訴えかけようとしているようだ。
プリスの良心がちょっとだけ痛んだ。そこまで必死になるほどなら、もう少しちゃんと話をした方がいいのかな——
そう思った彼女の耳に、ネネの大声が届いた。
「プリスちゃん、前！」
——前？
プリスは視線を前方に戻した。すぐ目の前に、大きな銀色の壁が見えた。駐輪場の入り

口を、自動販売機の補充トラックがふさいでいるのだ。
　プリスは大声で叫んだ。
「早く言ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」
　金属と金属がぶつかる鋭い音と、柔らかいものがぶつかる鈍い音が響いた。

「イタタタタ……」
　プリスは全身を襲う痛みにうめいた。骨折も打撲もない。速度がそれほど乗っていなかったせいだろう。トラックにぶつかってこの程度で済んだのは奇跡といえる。
「さっすが、プリスちゃんだね！」
　ネネが上機嫌で言った。逆方向なのに、なぜか着いてきている。
　プリスが後ろを振り返らずに尋ねた。
「何で着いてくんだよ」
「えっとね、さっきスマートコミュニケーターに連絡入ってたの。父さんから。『ぜひお礼を言いたいから、お前、プリスさんの家がどこにあるか見てこい』って」
　口調は能天気だが、若干苦しそうなネネの声が聞こえた。プリスのペースに着いてくるのがつらいのだろう。
　それが分かっても、プリスはいつもどおりにペダルを踏んだ。このリズムは身に染み着

いていて、いまさら変えられない。
息一つ乱さぬまま、プリスは応じる。
「礼なんか要らんって。大体、それだったら〝お兄ちゃん〟に頼めばいいだろ！」
「お兄ちゃん、そういうの、嫌い……なんだ。公私……混同……だって」
ネネが応じる。先ほどよりずっと息が切れている。消耗は確実に進んでいる。
だがプリスはそんなことを気にしない。ネネの言葉のみに着目して歯軋りする。
——あの牛肉コロッケ野郎！　都合いいときだけ、いい子ちゃんぶりやがって！
とはいえ、言ってることは正論だ。公僕としての意識が高いのは良いことである。
問題なのは、おかげでネネが家まで着いてくることだけだ。プリスはちらりと後ろを振り返った。
ここしかない。ネネとの距離は少し開き始めていた。疲れてきたようだ。
確信した彼女は叫ぶ。
「いいか、着いてくんなよ！」
プリスはペダルを漕ぐ足に力を込める。早稲田(わせだ)通りの直線は長い。ここを全力で漕げば、後輩を名乗る謎の生命体を振り切ることができる。そのはずだ。
彼女は意を決して前を見つめ、自らの過ちに気づいた。
頭上五メートルほどのところに見える、赤く丸い灯火。人もクルマも等しく停める、絶対的な存在。赤信号だ。

プリスはがっくりと肩を落とした。ネネが追いつき、得意げな顔をする。

横に電動自動車が静かに停まったのはそのときだった。プリスはモーターの高周波がそれほどでもないことに気づいた。よほどの高級車でないと、こうはいかない。

視線を少しだけ動かしたプリスは目をむいた。

停まっていたのはベントレーだ。深緑に光るボディーが無条件の高級感を発散し、極上という意味を静かに喧伝している。

それだけではない。そのベントレーはリムジンに改造されている。それも、なかなかお目にかかれない六輪のリムジンだ。

あまりの豪華さに、プリスは思わずベントレーを凝視する。

それがきっかけであるかのように、後部ドアのウィンドウが開いた。

――ヤバッ！

プリスは青くなった。もしかしたら、ガンを飛ばしていると思われたのかもしれない。

スモークガラスだから、中にどんな人物が乗っているかは分からない。だが、このクルマの値段から考えれば只者ではないだろう。黒社会を取り仕切るヤクザか、政治家を裏から操る悪徳商人か、いずれにしろまともな人間のはずがない。

プリスが固まる中、ベントレーのスモークガラスが下り切った。ああ、いいクルマはこういうのも無音なのか――プリスは場違いな感想を抱く。

プリスは覚悟を決める。畜生、黒幕が怖くてアーティストが務まるか。ここは一発、ガツンと言ってやる。
彼女は大きく息を吸い、次なる大爆発に備えた。
「ごきげんよう」
若い女性がプリスに声をかけた。知的な、上品な声だった。
怒鳴ろうとしたプリスは肩透かしを食わされた。プリスの勘が正しければ、声の主はまだ一〇代――おそらく、彼女と同年代のはずだ。
――お嬢様か。住む世界が違うなあ……
安堵半分にプリスは思った。おそらく、このベントレーに乗っているのはどこぞのお嬢様だ。クルマを凝視していた『下々の者』に興味を覚え、戯れ半分に窓を開けたのだろう。
彼女の予想は半分だけ正しかった。プリスに声をかけたのは、利発そうな顔をした少女だった。おそらく、お屋敷か何かのメイドなのだろう。
「ごきげんよう」
メイド少女の声が、再び車内から聞こえた。あくまで上品で静かな声だ。
「プリスさん、ですね？　はじめまして、わたくしはリンナと申します」
「リンナちゃんね、こんにちは！」
ネネが無邪気に挨拶を返す。車中の少女が柔らかい笑みを浮かべる。知的な顔立ちに、

メイド服が妙に似合っていた。
メイド娘がにこやかに言った。
「わたくしたちのお話を聞いて貰えませんか？」
プリスはこの一言でピンと来た。〝また〟レコード会社のスカウトだ。こういった形でのスカウトは、Vネットでの動画投稿以来たまにある。流石にベントレーでのコンタクトは初めてだが、芸能事務所であればカネはあるのだろう。
だが、プリスはロックで稼ぐことにはそれほど興味を持っていなかった。そもそも、音楽は『好きだから、やりたいように』演奏したいからやっているだけなのだ。
プロになるということは、『やりたいこと』とイコールでないことだ――彼女は、ぼんやりとだがそう理解していた。
それに第一、自分が将来何になりたいのか、自分でも分かっていない。将来を決めてしまうのに、一七歳というのは若すぎる――プリスはそう思っていた。
だから、彼女は一切の躊躇なく言い切った。
「契約なんかしないからね」
「そうではなくてですね」
「アタシはアーティスト。水着グラビアは出さないし、バラエティーにも出る気はない！」

プリスは胸をそらした。自分の決断に間違いはないはずだ。
リンナと名乗った少女のため息が聞こえた。
「ちゃんと話を聞いてください」
「そうだよプリスちゃん」
「オメーは黙ってろ！」
ネネの言葉に、プリスが脊髄反射で応じる。過剰反応だとは分かっているが、なぜか、ネネの言葉にだけは反論しなければ気が済まないのだ。
「リンナ。聞く耳を持たないおバカに話は通じないわ」
不意にベントレーの奥深くから、声がかかった。リンナ同様、少女の声だ。
プリスは首を延ばした。奥の席で、ゴシック・ロリータの少女が静かにカップを傾けている。琥珀色の液体は、ブランデーでなければきっと紅茶だろう。
お嬢様が口を開いた。冷徹で妖艶な、仮面の女王を思わせる口調で告げる。
「命英（めいえい）、構いません。やっておしまい」
「はい、シリアお嬢様」
壮年男性の声を、プリスは聞いた気がした。
次の瞬間、中央と後部のガルウィングドアがガバッと開いた。ドアはガチャガチャと音を立てて変形し、カニの爪のような形状になる。

二本のメカアームは、プリスとネネ、それに彼女たちの自転車を鷲づかみにした。
二人はあっという間に車内の中央席へ放り込まれた。もちろん、二人の自転車も折り畳まれてトランクへ収納されている。
その間、わずか〇・五秒。
メカアームは元の形に戻ってバタンと閉じる。裂け目一つ見つけ出すことはできない。
信号が青になった。
プリスとネネを強引に乗せたベントレーは、何事もなかったかのように発進した。

「何とか間に合いそうですね」
助手席からシルヴァがレオンに声をかける。レオンが嫌そうに顔をしかめた。
「お前が牛丼の食い方を知らないからだ」
「私のメモリーには、牛丼に納豆とタマゴをかけるのは禁忌(タブー)だと記憶されていました」
「……前にもそんなこと言ってたヤツがいたな」
レオンがどこか懐かしげな笑みを浮かべる。咳払いして続けた。
「だからって、納豆とタマゴをかけたくらいでフリーズしなくてもいいだろうに」
「申し訳……すみません」
「ま、いいけどよ」



レオンは人見街道をまたぐようにかけられた看板を見上げる。
『調布テクノバビロン　三ｋｍ』の文字を、どこか眩しげに眺めた。

調布テクノバビロン。東京都西部にある、ハイテク工業団地だ。

首都の様相を一変させつつある『東京リストラクション』。調布テクノバビロンは、この事業によって生まれた。

もともと、調布空港は色々と問題が多かった。首都のど真ん中にあるという好立地にも拘らず――いや、だからというべきか、航空機の運用には問題が多かった。

東京リストラクションは、当然のごとく調布空港に目をつけた。首都にある数万平方メートルにも及ぶ土地を、ほとんど価値のない飛行場のために遊ばせておく愚はない。

調布空港の機能は、軍民共用となった横田空港へ統合された。

東京リストラクションの企画部は、旧調布空港の跡地の使い道に頭を悩ませた。

都内には様々な工業施設がある。それ以外にも、金融センターも、官公庁機能も、各種大学も、特区的な場所がすでに存在していた。

しかも、内陸部にある土地は、水や各種コンテナの出入りには不利だった。それゆえに、この広大な土地が放置されていた、ともいえる。

悩みぬいた末、最終的に、この土地は現在の姿――ハイテク工業団地に落ち着いた。

工業団地といっても、実際に機械などを生産する工場があるわけではない。大手企業の研究開発施設がほとんどだった。
それが、東京リストラクション事業の答えだった。ハイテク研究は物流に影響を与えずに高価値が見込め、しかも知識集約性による生産性向上が認められる。
長引く不況から復活した日本がとるべき道は、ここしかない——彼らはそう考えたのだ。
警視庁もこの流れに乗った。先端技術研究所を調布テクノバビロンに置いたのだ。
彼らはナノテクノロジーや分子工学技術を使った犯罪に対応するため、第二科学捜査研究所——通称、〝二科研〟を設立した。
二科研の中でも、レオンたちAD・POLICEと直結している部門があった。
ブーマ技術部門。ここは、ブーマについての最新技術の宝庫だった。ゲノム社以外では、おそらく対ブーマ技術がもっとも進んだ研究施設である。

レオンは手慣れた様子で迷路のような二科研の通路を進んだ。いくつもの階段を上り、渡り廊下を歩き、セキュリティドアをくぐる。
「かなり分かりづらい道のはずです。よく迷いませんね」
「まあな。ここが迷路なのは知ってるし、前もって地図を確かめてるしな」
シルヴァの問いにレオンが応じた。捜査型ブーマが微笑む。

「計算が正しければ、普通の人ならば九八パーセントの確率で迷います」
「俺たちは刑事だぜ。道を覚えるのが本職だ」
「その場合、六八パーセントの確率で誰かに道を聞くか、地図を見直すかするはずです」
冷静な声にレオンが嫌そうな顔をした。
「お前、機械じゃねえんだから……いや、何でもない」
シルヴァが否定しようと口を開きかける。レオンが手で制した。
相棒が生体機械であることは知っている。だが、そいつは人型をし、人のように喋り、人のように振る舞っている。これは、本当のところ、〝人〟とどれだけ違うのか――そんなことが、ふと頭をよぎったのだ。
彼らはそれきり口をきかなかった。
さらに五分ほど歩き、目当ての研究室にたどり着く。
レオンはドアホンのボタンに手を伸ばした。押そうとして一瞬だけためらう。
「どうしましたか？」
シルヴァが尋ねる。レオンは唇を歪め、無言のままボタンを押した。
圧搾空気の音が響き、扉が左右に開いた。
その音を聞きつけた部屋の主が、長い髪をなびかせながら振り向く。入り口にかけてある時計を見た彼女が、微笑みを浮かべた。

「一六時ジャスト。相変わらず、時間に〝だけ〟は正確ね、レオン」
「言うなよ、クレア。今日は一人じゃないんだ」
レオンは怪訝（けげん）そうに眉をしかめたその女性に対し、親しげに同行者の存在を告げてからシルヴァを手招きする。
姿を現した人影を見て女性が目を丸くした。
「あなた、いったい――」
「コイツはシルヴァ。捜査型ブーマで、まあ、俺の相棒だ」
レオンはどこか面白くなさそうに言った。クレアのシルヴァを見る目が妙に潤んでいるのが気に入らないのだ。
それでも、彼はシルヴァにクレアを紹介しなければいけない。捜査型ブーマは、そのあたりをちゃんとしないと予期せぬフリーズを起こす。そのことを、今日一日で彼はイヤというほど学んでいた。
レオンはわざとらしく咳払いした。一人と一体の注意が自分に向いたことを確認し、何気ない口調を心がけながら言う。
「こいつはクレア。クレア篠原（しのはら）。二科研ブーマ班の捜査官だ」
「こんにちは、クレア」
シルヴァの声にクレアがうなずいた。シルヴァが妙に親しげなのが、レオンは気に入ら

ない。
クレアはクレアでシルヴァから視線をそらさない。それがまた、レオンのカンに障った。
——畜生、誰だ。このブーマをこんなツラに作りやがったのは。
レオンはシルヴァを睨みつける。よく見ると、目元が何となく自分に似ているような気がする。それがまた気に入らない。かつて、クレアに言われた台詞を思い出すのだ。
あのとき、クレアは『あなたの、その目が好きなの』と、確かに言った。
あれは学生のときだった。彼とクレアは、大学の同じ研究室にいた。
それから八年、お互い忙しくなり、何となく時間がなくなった。そのうちに、何となく連絡をとらなくなり、何となく疎遠になり、何となく——
レオンは頭を振る。くだらない。昔のことだ。積もる話も確かにあるが、今はそのときではない。とにかく、今は用件を済ませてしまうことにしよう。
彼はそう決意し、ごく短く言った。
「クレア、解析はどうなってる?」
「解析って?」
クレアがどこかぼうっとした口調で言った。レオンが眉をしかめた。
「決まってんだろ。昨日、ライブハウスへ落下したブーマの残骸だよ」
「あなたって、ホントに無粋な人。いつも捜査のことで頭がいっぱい」

クレアが肩をすくめた。
「徹夜で調べたのに、労(ねぎら)いの言葉もない。ホント、鈍感」
「仕方ない。それが、お前の仕事だろ?」
クレアはため息をついた。
「その様子じゃ、まだ彼女もいないんでしょ？　いい男なのに、ホントに残念な人」
「いいから。今まで分かったことでいいから、とりあえず教えてくれ」
クレアは再びため息をついた。手元のリモコンを操作し、照明を落とす。
「レオン、一歩下がって。そこに映すから」
レオンはおとなしく一歩下がった。
三次元モニターが立体画像を投影する。何やら角ばった結晶体に、ゾウリムシの鞭毛(べんもう)のようなものがついている。
食い入るように眺めるレオンに向かい、クレアが微笑んだ。
「レオン、あなたなら、これが何だか分かるわよね」
「ああ。ナノマシンだな。それも、相当に小さな。おそらく――」
「そ。原子サイズまで小型化されたナノマシンよ」
「当然、照会してみたよな?」
レオンの声にクレアが応じる。

「当然じゃない。本庁のホロメモリは全部当たったし、世界中の特許も全部調べたわ」
彼女は両手をひらひらさせた。
「分かったのは、これがまだ公開されてないってこと。つまり、新型ナノマシンってわけ」
「コイツの効能は？　肩こりに効く、とかじゃなさそうだな」
「ブーマが肩こりするのかどうか、興味はあるわ。今度、あなたの相棒に聞いておいてくれないかしら」
クレアはシルヴァを見て微笑んだ。レオンが不機嫌そうに唇を寄せたのを見て、さらにくすくすと笑う。
「冗談よ。このナノマシンの役割は簡単。人工知能ユニットに寄生し、再生機能、同化機能と筋力構造を増幅すること。ただそれだけ」
「それだけか？」
「役割的にはね。ただ、その過程で思考回路と制御システムを完全に破壊するわ。だから、このナノマシンがブーマに入れば……まず確実に暴走し、化け物になるわね」
クレアは三次元モデルを回転させた。回転する結晶体を見つめるレオンに対して、噛んで含めるように話す。
「簡単に言えば、ブーマだけが感染するゾンビウィルスね」

「あのなクレア、俺を相手に素人向けの解説すんな」
レオンが不機嫌に言った。クレアが上機嫌に応じる。
「あら。銃の撃ちすぎで、大学の知識なんか弾と一緒に飛んでいったと思ってたわ」
「抜けたのは、もっと他のもんだ。例えば……」
「常識とか、ね。女性に会う前に、納豆を食べてこないとか、その類の」
クレアが肩をすくめた。
「レオン。あなた、牛丼食べて来たでしょ。納豆とタマゴをかけて、グチャグチャのドロドロにしたやつ」
「仕方ないだろ。時間がなかったんだよ」
クレアは苦笑を浮かべた。
「まったく、あなたって本当に変わらないのね。そこが、あなたの……」
彼女は口をつぐむ。その沈黙の意味を図りかねたレオンが問いかけた。
「俺の、何だよ?」
「とにかく、一晩の調査で分かるのはそれだけ。もっと詳しく知りたかったら、おとなしく待っていなさい」
クレアは苦笑を微笑みに変えて言った。レオンの見るところ、それ以上は答えるつもりがないようだ。

レオンはもう一つの用件を切り出した。
「その、そのブーマを倒したっていう謎の装甲戦士はどうだ？　見当がつくか？」
これについては、プリス朝霧の証言だけが頼りだった。レオン自身は、その存在には否定的だった。同じ場所にいた彼の妹が「そんな人は知らない」の一点張りだからだ。
ただ、客観的に見れば状況証拠がある。暴走ブーマには、謎の物質――まるで矢のように見える物質が刺さっていたし、身体は鋭利な刃物でズタズタに切り裂かれていた。
少なくとも、その一点についてはプリス朝霧の証言と一致しているのだ。
だが、クレアは首を振った。
「あなたなら分かるでしょ。『技術的には可能でも、現実には不可能』ってこと」
「それを可能とする技術はあるが、実物を作ろうとすれば途方もない資金が必要になる。そういうことだろ？　生産技術の、トウゴウ教授がよく言ってたヤツだ」
クレアが懐かしそうな笑みを浮かべた。
「そうそう、トウゴウ先生。久しぶりにその名前を聞いたわ。〝俺の後ろに立つな、俺よりも前に行け〟が口癖だった。あなた、よく怒られていたわよね」
レオンが唇を歪める。それを見た彼女はくすくす笑った。
少しして、笑いを収めた彼女が真面目な口調で言った。
「そのスーツ一体だけで、シルヴァが一〇〇体くらい作れるわよ。多分」

「逆に言えば、金さえありゃあできるってことだろ？」
レオンは食い下がった。万に一つの可能性があるなら、調べてみたい。そう思ったのだ。
だが、クレアは現実的だった。男と女の差かもしれない。
「そうかもしれないわ。でもね、そんな人も組織も、現実には存在しないわよ？」
彼女は一拍置いて続けた。
「理想の男性が、そこらにいないのと同じでね」

プリスはドアが変形して二本のメカアームが展開される一瞬を、確かに見た。
次の瞬間、プリスとネネはリムジンの奥に引っ張り込まれた。プリスはほんのわずかに加速感を感じた。ベントレーが走り始めたのだろう。
彼女は正面を見つめた。いかにもお嬢様といった風情の少女が、優雅な動作で紅茶を嗜(たしな)んでいる。
その姿を見たプリスは少しだけ安堵した。この様子なら、少なくともすぐに殺されることはない。先ほどのアームといい、この連中は超技術を持っている。殺す気なら、一瞬で二人を消し去ることができるだろう。
それをしないということは――
「目的は何だ？」

プリスの荒々しい声に、お嬢様が優雅な口調で応じた。
「話を聞いて欲しいだけですわ。リンナが先ほどから申しているとおりです」
「だったら、何でこんな荒っぽいことするんだよ！」
「言葉には気をつけなさい。荒っぽい言葉は、荒っぽい人格を作るわよ」
「お前が力ずくでかっさらったんじゃないか！」
プリスが怒鳴った。つかみかかるかのように腕を延ばす。
シリアは右手でカップを持ったまま、左手の指を鳴らした。
プリスは革張り座席の中で何かが動くのを感じた。思わずあたりを見回す。
「そのままにしてなさい。動くと怪我するわよ」
シリアの言葉を理解するより早く、プリスの上半身を何かがつかんだ。柔らかい物質で加工された、何か頑丈なものだ。
プリスは両手で何度か叩き、正体を知った。これは安全バーだ。遊園地のアトラクション装置で、身体を固定するためにあるアレだ。
「無駄なことはやめなさい。その拘束バーはブーマでもはずせないわ」
彼女の正面に座るシリアが淡々と言った。
何とかして安全バーをはずそうともがいていたプリスはがっくりと首を落とす。シリアの言葉どおりだ。見た目よりも相当頑丈に作られている。とてもではないが、この状態か

らではずれそうにない。
プリスは力なく首を上げた。シリアが優雅な動作で紅茶カップを傾けている。勝利を確信しているのか、笑みがどこかいやらしい。
「やっとお話をする気になったのですね。まったく、教養のない人はこれだから困ります」
「お嬢様。早くご用件を」
運転席からたしなめの言葉が聞こえた。壮年と思しき男性の声だ。
たしか、メイエイとか言ってたっけ――プリスは先ほどの合計二〇秒ほどにすぎないやり取りを思い出した。
言葉の内容からすると、命英と呼ばれる人物は常識人らしい。プリスは少しだけ安心した。この数時間、彼女に関わった人物は、それまでの人生を合わせたよりもずいぶんと濃度が高かった。常識人は、これがはじめてかもしれない。そう思ったのだ。
その思いは確信に変わった。命英が言葉を続けたのだ。
「挑発するためにお二人を乗せたわけではありません」
シリアの動きが止まった。目を二、三度瞬かせて大きく見開く。
――もしかしてコイツ、忘れてたんじゃないのか？
プリスはふとそう思った。ほんの少しだけ、シリアに対する警戒心が緩んだ。

「分かっています、命英」
シリアは照れ隠しのように強い口調で言った。カップを隣に座るリンナに渡し、咳払いをする。
プリスは身構えた。場の空気が一気に張り詰める。彼女の辞書には緊張や警戒という文字がなさそうなネネですら、少し不安そうな表情を浮かべた。
「あなたたち、正義の味方になってみないかしら？」
「ハアア？」
プリスは素っ頓狂な声をあげた。何を言ってるのか、とっさに理解できなかったのだ。
数秒後、彼女は笑い始めた。小さく始まったそれは、たちまち巨大な爆笑となり、ベントレー・リムジンの中に響き渡った。
アーティストの声量にシリアが顔を歪める。リンナは止めようとしたが、プリスが身体をよじって涙を流しているのを見て諦めた。とても話ができる状態ではない。
プリスはたっぷり五分ほど笑った。何とか息を整え、ぜいぜいと息を切らしながらようやくのことで言葉を発した。
「正義の、味方、だって？」
プリスは人差し指で涙をぬぐった。鼻をすすりながら言う。
「いやぁ、ここ最近聞いた中では一番笑えるジョークだよ。なあ、ネネ。……ネネ？」

プリスは首を左右に振った。そういえば、このクルマに乗ってからネネを見ていない。彼女は焦った。昨日の今日だ。ライブに来たのも帰り道に着いてきたのもネネの意思だが、連日事件に巻き込まれたとあってはまずい。流石にあのコロッケ野郎にも言い訳がきかない。

だが、それは杞憂だった。

ネネはメイド服の少女と向かい合い、カップを傾けている。口許にクリームらしきものがついているところを見ると、何かを食べた後なのだろう。

ネネの声が響いた。

「リンナちゃん、次はこっちのケーキ食べよ」

「チョコレートミルフィーユですね。分かりました」

ネネはメニューらしき冊子を指し示し、リンナがうなずいた。ウィーンというモーター音と共に空のケーキ皿がダッシュボードに引き込まれ、ミルフィーユを載せた皿が現れる。

能天気な声の歓声があがった。

「わーい。ありがとう、リンナちゃん！」

その光景を見たプリスの身体から力が抜けた。お気楽なヤツに、常識的な何かを求めるのは酷なことだったのだと、いまさらながら思い知ったのだ。

同時に、のどが渇いていることにも気づく。拉致される直前まで自転車を漕いでいたこ

とに加え、先ほどの大爆笑が水分を奪っていたのだ。
プリスはシリアを見つめた。仇敵ではあっても、話に付き合った恩としての情けを請うくらいはできるだろう。
「なあ、その紅茶、ちょっと一口欲しいんだよな。もうカラカラなんだ」
「アレだけバカ笑いすれば、のども渇くでしょうよ。どうしようかしら」
シリアが面白そうに笑った。目を見る限り、おとなしく紅茶を渡す気はないらしい。
プリスは肩を落とした。やはり、人生はそう甘くは――
「お嬢様、アーティストにとってのどは命です。私からもお願いします。どうか、そのお紅茶を分けて差し上げるわけには」
――おお、オジサン！　流石は常識人！
プリスはいまだ一言も交わしたことのない壮年男性に心からの感謝をささげる。
シリアが鷹揚にうなずいた。
「なるほど。そういう見方もあるわよね、命英。分かったわ。あなたに免じて、この無礼者に紅茶を振る舞いましょう」
彼女は優雅な手つきでポットからカップへ紅茶を注ぐ。ダージリンの香りがプリスの鼻をくすぐった。彼女は思わず唾を飲み込む。
「さ、召し上がれ」

シリアがカップを差し出した。プリスは安全バー越しの無茶な姿勢で受け取る。
「ありがとう、助かった」
彼女はそう言って紅茶を一口含んだ。シリアが上品な笑顔を浮かべて尋ねる。
「お味はどう？　その紅茶はね——」
シリアは最後まで言えなかった。プリスが口に含んだ紅茶を彼女に噴きかけたのだ。
硬直したシリアに向かってプリスがわめく。
「おい、何で紅茶に砂糖なんか入れてんだよ！　風味が台無しだろ！」
「……何を言ってるの？　お紅茶にお砂糖を入れるのは常識でしょう？」
「お前は子供か」
シリアの言葉を、プリスは言下に否定した。彼女はどこか哀れむようにシリアを見つめ、心底呆れたように首を横に振る。
「そんなんだから、お前はチビすけなんだ！」
「チ、チ、チ……」
シリアが鳥のように繰り返した。目を大きく見開き、大声で言う。
「だぁれがチビすけですって！」
シリアの手がプリスの顔に伸びた。頬をムニッとつまむ。
「私はまだ成長期！　訂正しなさい！」

「イデェデデ！　このっ！」
プリスは腹を決めた。手が出た以上、これは喧嘩だ。喧嘩なら、絶対に負けるわけにはいかない。
彼女は両手を延ばし、負けじとシリアの頬をつまんでねじり上げた。お嬢様がわめく。極限状態のはずだが、妙に冷静なのがプリスには憎らしい。
「放せ！　放しなさい！」
「それがお願いする言葉か！　放してください、だろ！」
低レベルな争いは一向に終わる気配を見せなかった。
だが、その横では——
「このケーキ、美味しー」
「お代わりの紅茶もありますわよ」
ネネとリンナがにこやかに会話をしている。醜くどうしようもない争いなど、まるで目に入っていない。こちらはこちらで自分の世界に入っているらしい。
プリスとシリアの争いは蹴り合いに移行していた。プリスとしては腕が出せない以上、そうするしかない。何でシリアがそれに付き合っているのかは、彼女には分からなかった。
きっと、何かの意地なのだろう。
——ならば、それを超えてみせる！

プリスは自分でも分からない感情に燃えた。
彼女はシリアの足をガシッと抱え、そのままアキレス腱を極める。シリアが声にならない声をあげた。音にしないのは、お嬢様としてのプライドなのだろう。
だが、身体は正直だった。プリスのちょっとした動きに、シリアは反射的に身体をひねる。
それがプリスは気に入らなかった。彼女にとって、関節技は声を出させるための手段だった。いかに身体を痛めつけても、声を出させなければ自分の負けだ、プリスはそう思っていた。
彼女は自らに課した不思議なルールに基づいた行動を取った。アキレス腱を固めている腕の力を、ほんの少しだけ緩める。
シリアが大きく息を吸い込んだ。同時に、その身体から力が抜ける。
——今だ！
プリスは一気にシリアの靴を脱がした。反応する間を与えず、足の裏をくすぐり始める。
「ほーら、コチョコチョコチョ」
足の裏から伝わるこそばゆい感触。それを増幅する、プリスの間抜けな声。
その複合技にシリアは敗れた。お嬢様の顔面が一気に崩壊する。限界まで我慢していた分、崩壊の度合いはひどかった。

「あひゃ！　やめっ、ひゃひゃっ！　やめなひゃひゃひゃひゃ！」
シリアは涙を流して笑い苦しむ。取り澄ましたお嬢様の仮面は、もうどこにもない。
命英がベントレーの運転席で苦笑を浮かべた。頭を振り、一言だけ小さく呟く。
「類は友を呼ぶ、ですな」

太陽が、調布テクノバビロンの向こう側に沈んだ。
レオンとシルヴァは二科研を出た。心なしか、レオンの背が丸い。
暴走ブーマの解析については、あんなものだと思っていた。大体、昨日の今日で解析できるようなら誰も苦労はしない。未知の事項を調べるのは、決して簡単な仕事ではない。
技術系の大学を出ているレオンにも、そのくらいのことは分かっている。収穫が特にないからといって、特に落ち込む理由にはならない。
彼が背を丸めているのは、まったく別の理由だった。
「はぁ……何で俺……」
「何か?」
シルヴァが問いかけた。心なしか、心配するような響きがある。
ハッとしたレオンは背筋を伸ばした。機械であれ何であれ、相棒に無様な姿を見せるのは、幾ら何でもまだ早すぎる。

レオンは無駄に虚勢を張った。
「何でもねえよ！　ただな」
そこまで言って、続きを何も考えていなかったことに気づく。
「ただ……その、何だ。クレア、疲れてたな」
シルヴァがうなずいた。
「確かに、クレアさんは疲れていますね。私の開発プロジェクトにいた頃、よくあんな顔をしていました」
「ほう、お前の開発プロジェクトね。何やってたんだ？」
「いえ、ですから、私の開発プロジェクトです」
シルヴァが応じる。レオンは舌打ちしてシルヴァに顔を向ける。
「だから、お前の開発ってのは」
そこで不意に気づく。そうだ。こいつは人間じゃなかった。最新の捜査型ブーマなのだ。
そして、その〝捜査型〟ブーマが、〝開発プロジェクト〟と言うからには――
「お前か、お前のせいなのか！」
「何のことです？」
「一年くらい前から、クレアは超がつくほど多忙になったんだ。お前、その頃、ひょっとして――」

「はい。私はちょうどその頃開発されました。クレアさんがよく『最近、彼氏と会えない』という愚痴をしきりに言っていたのを覚えています。『極秘プロジェクトだからレオンにも話せないのよね』とも」

「お前、俺とクレアが付き合ってたこと知ってたのかよ！　何で先に言わねえんだ！」

「聞かれませんでしたから。私は、そのようにプログラムされています」

レオンは歯軋りした。もしも可能なら、別れたあの日まで戻ってこの事実を伝えたい。だが、過去はもはや変えようがない。

彼はため息をついた。相棒の捜査型ブーマに向かって言う。

「まあいい。これからは、俺や捜査に関わることは全部先に言ってくれ」

「分かりました」

シルヴァは真面目な顔でうなずいた。レオンは話題を変えることにした。

「ま、それはさておきだ。暴走ブーマはともかく、あの『装甲戦士』だ」

「何ならすぐにでも検索します」

シルヴァの言葉にレオンが眉をしかめる。

「それで見つかるわけがないだろ。ちょっとは考えろよ」


「しかし、こういった場合にはホロメモリ、データバンク、Vネットの順で検索するように、捜査手順プログラムが」

「大企業が絡んでるなら、それで分かる。だが、今回のコイツは違う。大企業ってよりは、どこかの金持ちの道楽じゃないかって気がするんだ。中東の富豪がカスタム仕様のスーパーカーをオーダーするみたいな感じで。そんなわけないのにな」
レオンはシルヴァの言葉を否定した。黙り込む相棒に向かい、さらに言葉を続ける。
「それからさ、ずっと気になってたんだが」
「何でしょうか?」
シルヴァの視線を感じながら、レオンが息を吐いた。
「お前、朝からVネットだホロメモリだデータバンクだって、コンピューターに頼りっきりだな。何でだ?」
「それは、捜査手順プログラムに従えば、情報の収集が——」
「だから、その手段が何でネットなんだよ」
シルヴァが答えるより早く、レオンが言葉を続けた。
「刑事は靴をすり減らして足で調べるモンだ。よく覚えとけ」
どこか説教がましいのは、何かの照れ隠しなのかもしれない。
プリスたち四人を乗せたリムジンは、地下へと入った。正しく言えば、少なくともプリスは地下に入ったような感覚を覚えた。それも、二階三階ではない。かなり深い地下駐車

場だ。
　ここに至って、プリスはようやく観念した。いずれにしても、現在地がどこか分からない以上、脱出することもできそうにない。
　彼女は気落ちした声で言った。
「なあ、そろそろこのバーをはずしてくれないか？」
「なぁに？　何ですってぇぇぇぇえ？」
　シリアは苦痛にあえいでいた。痛みのあまり、両手で革のシートをバンバンと叩いている。それでもお嬢様口調を崩さないあたり、見上げた根性だ。
「負けたよ。あんたらの勝ちだ。もう、逃げたりしない」
　彼女はシリアにかけていた足四の字固めを解いた。足を解放されたシリアが大きくため息をつきかけ、はっとした様子を見せる。
　彼女は逆に息を吸い込んだ。よほど、弱みを見せるのがイヤなのだろう。
「そ、そう。最初からおとなしくすれば良かったのに」
　その言葉にプリスは再びキレかけた。感情を理性で必死に抑える。
　――こらえろ！　こらえるんだ、アタシ！
　プリスはその言葉を頭の中でひたすら繰り返した。たっぷり一〇〇回ほども唱え、ようやく落ち着きを取り戻す。

安全バーがはずれるのと、ベントレーのドアが開くのはほぼ同時だった。
プリスはゆっくりと駐車場に降り立った。打ちっぱなしのコンクリートによる硬い感触を噛みしめる。
執事服を着た五〇代の男性が立っていた。おそらく、シリアが命英と呼んでいた人物だろう。
彼はネネとプリスが降りたのを確認すると優雅に一礼した。
深いバリトンが地下駐車場に響く。
「ようこそ、『ナイトセイバーズ』のシークレットベースへ。まずは、こちらに」
命英の案内した先はエレベーターだった。五人全員が乗り込むと同時に扉が閉まる。直後、エレベーターが下に向かって加速を始める。
いったい、何フロア下りているのか分からない長い加速の中、ネネがポツリと言った。
「ねえ、プリスちゃん。『夜のお助け隊』って、何をするところかな?」
「はァアアア?　何言ってんだ、ネネ?」
プリスの目が丸くなった。まじまじとネネを見つめる。人知を超える能天気だと思っていたが、とうとうそれをこじらせてしまったのだろうか。
シリアも同感らしい。ただ、こちらはネネに耐性がない分、より深刻だった。動きが完全に固まっている。思考どころか、呼吸も停止しているかのようだ。

彼女たちの異変に気がつくこともなく、ネネが深刻そうに言った。
「だってここ、『ナイトセイバーズ』の基地なんでしょ？　『ナイト』は英語で夜で、『セイバーズ』って、きっと『セイバー』、助ける人の複数形で――」
「どうして『ナイトセイバーズ』が『夜のお助け隊』になるの！」
再起動を果たしたらしいシリアがやっとのことで言った。プリスに視線を送り、信じられないという口調で言った。
「ちょっと、あなた。いったい、この子にどういう教育をしてるの？」
「いや、そんなこと言われてもね。ってアタシ、ネネの保護者じゃないし」
「とにかく、あなたの責任で何とかなさい」
シリアが顎を上げた。プリスが応じる。
「じゃあお聞きしますけど、『ナイトセイバーズ』って何なんだよ？」
「それは」
シリアが答えかけたとき、ポーンという軽快な電子音が響いた。エレベーターが目的の階層についたのだろう。
リンナがシリアに視線を送る。シリアが大きくうなずいた。
「それは、実際に見ていただければ分かります」
エレベーターのドアが開く。開いた先は大きな部屋だ。中は薄暗かった。その部屋のあ



ちこち、何かの光が動いて闇を切り裂いているのが分かった。

目が慣れてくるに従い、その光が無数のモニターから成り立っていることに気づく。よく見れば、地図と数値がとめどなく流れているのが分かる。

「何だこりゃ？　あんたら、投資でもやってるのか？」

プリスは独語した。昔、映画で見た株のトレーダーが、ちょうどこんな部屋で売り買いしていたことを思い出したのだ。

リンナが優しい口調で言った。

「いいえ。私たちは『ナイトセイバーズ』です」

「だから、そいつはいったい……」

部屋を見渡していたプリスが黙り込んだ。部屋の一角の平らなフロアから、ロッカーのような筐体がせり上がり、その中に、あり得ないはずの影を見出したのだ。

その影はスレンダーで女性的なシルエットをしていた。ロボットやブーマではない。頭部がバイクのヘルメットのように大きい。それは中に人間の頭が入ることを示している。

プリスはその影に見覚えがあった。

「あのときの！」

シリアが口を開いた。すっかり落ち着きを取り戻しているようだ。お嬢様然とした、慇懃な、同時に力を感じさせる口調で言う。

「驚かせてしまったようですね。お二人に、どうしてもお願いしたいことがあるんです」
「お二人？　ネネにも？」
ネネが目をパチクリさせた。リンナが言葉を引き取る。
「はい。お二人に、正義の味方になって貰いたいのです」
「はぇ？」
ネネがキョトンとした。一見、普段の姿とあまり変わりない。だが、よく見れば目がわずかに大きく開いている。
プリスは、先ほどベントレーの中でシリアが話した言葉の意味をようやく悟った。あれは、嘘でも冗談でもなかったのだ。
「……なぜ、あたしたちなんだ？」
プリスの訝(いぶか)しむ声にシリアが答えた。
「運命的な出会いだったから、と言っておきましょうかね」
「運命的な出会い、ねえ。要するに、道楽ってことか？　そんなくだらないことは迷惑千万だ」
「断る、っていうの？」
シリアの表情が変わった。自分が崇高だと思っている行為をにべもなく否定されたのが気に入らないのだろう。

だが、気に入らないのはプリスも同じだった。彼女は静かに激怒していたのだ。
「金持ち嬢ちゃんの『正義の味方ごっこ』なんかに付き合ってられるか。こんな大層な装備があるなら警察に売り込めばいいだろ」
プリスはそこで一息ついた。深く息を吐き、先ほどよりも大きな声で言った。
「あたしは高校生で、アマチュアのアーティスト。格闘技はただの趣味だ。正義の味方なんて、冗談じゃない！」
プリスはそう言ってシリアを睨みつけた。いつの間にか姿を消していたリンナが再び姿を現す。彼女はシリアに何事か耳打ちした。
シリアの表情が変わった。ネネに向かって、プリスに対するのとはまったく異なる優しい笑顔を向ける。
「ネネさん、あなたはどう？」
問いかけられたネネはうつむいた。どう答えるのだろう、プリスがそう思った瞬間。
「やってみたい」
ネネは小さく、だがきっぱりと言った。ほとんど即答だ。シリアの顔が綻ぶ。
「おいネネ、何言ってるか分かってんのか？　死ぬかもしんないんだぞ」
プリスが叫んだ。
「正義のヒーローってやつは、一度負けると死ぬんだぞ。テレビでもそうだろ。一クール

の放送中で何回勝っても、たった一回の敗北で死ぬだろ。現実ってのは厳しいんだよ!」
「……テレビの見すぎね」
シリアの呟きをプリスは無視した。喩えは確かにテレビだが、言ってることは間違っていない確信がある。
だが、ネネは首を振った。ほとんどはじめて見せる表情と声で言う。
「でも、プリスちゃん。ネネは、今までお兄ちゃんに守られてばっかりだった。もし、これでお兄ちゃんの手助けができるなら……」
ネネは毅然とした声できっぱりと言う。
「ネネはやってみたい。『ナイトセイバーズ』になって、お兄ちゃんを手伝ってあげたい」
「……勝手にしろ。アタシは降りる!」
プリスはわめいた。ネネが心配そうな目で彼女を見る。プリスはそれに気づいたが、いまさら意見を変えるつもりはない。アーティストとして社会と戦っていく矜持(きょうじ)はあるが、それと正義の味方になることはまったく別だ。
「さぁ、家へ帰せ!」
事のなり行きを黙って見ていた命英が、唐突に口を開いた。
「プリス様。あなたは確かに素晴らしい素質をもったアーティストです。ですが、歌声と作曲の才能だけで一流になれるほど、今の音楽界は甘くはありません。充分な機材や、支

援体制が必要なのです。あなたがビッグアーティストを目指すなら、いずれその壁にぶち当たるでしょう」

プリスは面食らった。命英さんは常識人だと思っていたが違ったらしい。いきなり場違いなアーティスト性の話を持ち出すあたり、この人もネジが飛んでいる系に違いない。

だが話している内容自体はまともだ。実際、昨日の事件で愛用のダークファイヤーは壊れてしまった。バイトして買い直すにしろ、暫く時間がかかる。実際のところ、途方に暮れていたのだ。

「我々の出番がここにあります。私たちは、その壁を突破する機材と支援体制を、あなたに与えることができます。どうお思いですか？」

プリスは黙り込んだ。命英はかなりの策士に違いない。彼女の琴線を良く分かっている。暴走ブーマ事件に関して、その生い立ちから含むところのある彼女には、実を言うとこの誘いが大いに魅力的だった。

シリアの高飛車な態度が気に入らないので抵抗していただけなのだ。

プリスは大きく深呼吸した。

「本当に、機材と体制を整えてくれるんだな？」

「『ナイトセイバーズ』に、二言はありません。そうですな、お嬢様？」

命英とプリスのやり取りを半ば呆然と眺めていたシリアは我に返った。どこか慌てたよ

うに何度もうなずき、早口で言う。
「も、もちろんです。わが『ナイトセイバーズ』に二言などあるものですか」
「ハッ」
命英が満面の笑みを浮かべて一礼した。
「さて、それでは機材の準備をしなくては」
彼は嬉しそうだ。まるで、自分自身がバンドを組むかのように浮かれている。
「では、早速……」
彼は大きくうなずいて一同を見回した。
「それでは、お嬢様は電子機材とキーボードを。ピアノをやっておられますからな。リンナはドラムで。皆様の間を取り持ち、リズムを刻むのが得意そうです。ネネ様は……」
命英は首をひねった。
「ネネ様は、ベースでいかがでしょう。プリス様と、左右に並ぶ形で」
プリスたち四人は顔を見合わせた。何を言っているのか、今一つ理解できない。
「命英。何の話です？」
シリアが全員を代表して尋ねた。命英はしれっと、そして爽やかに言った。
「プリス様とバンドを組むのです。決まっているでしょう？　機材と体制の支援とは、そういうことですよ」

「そんなの聞いてネーヨ!」
広大な空間にプリスの怒声が響いた。

第四章
Shakedown

高円寺（こうえんじ）はほどよく離れた場所にある街である。
かつては純情な商店街で、その後は阿波踊りで有名になったこの街だが、二〇三〇年代になってもなお、昭和の雰囲気を失ってはいなかった。
高い天井と狭い道が名物の長いアーケードには、びっしりと店舗が立ち並んでいる。チェーンの牛丼店やコンビニの数は少ない。どちらかといえば、ここに根づき、街と共に生きている個人商店が多く存在する。
北口アーケード街のややはずれにある『Ｍｏｂｙ Ｄｉｃｋ』もそんな店の一つだ。アーケード街の中では平均的なサイズで、決して大きな店ではなかった。それでも、この店はこの商店街の名物的な存在だった。
音楽喫茶と銘打ってはいる。
だがほとんどの場合は重厚なドラムソロがメインのインストゥルメンタルが流れている。
そんな気難しい店のイメージにも拘（かかわ）らず、店主の容貌はどこか優しげである。
それでいながら喧嘩にはめっぽう強い、という噂だった。
そのガサツさとは無縁な、繊細極まるコーヒーのドリップが売りだった。
ギャップだらけの特徴が受けているのか、この店を訪れる客は後を絶たない。

そして彼と元気な一人娘の切り盛りするこの音楽喫茶には、もう一つの名物があった。各種スパイスをふんだんに使い、コラーゲンがトロトロにとろけるまで煮込んだ、『牛すじ煮込みカレー』である。

「牛すじ煮込みカレー、お待ちどうさま」
『Ｍｏｂｙ Ｄｉｃｋ』の店主、塩沢剛三（しおざわごうぞう）がお盆をテーブルに置いた。スチール製の皿が、ガチャリと硬質な音を立てる。
六人がけのテーブルに五人の姿があった。少女と呼ぶべき若い女性が四、壮年の男性が一という割合だ。男性が少女たちを引率しているような雰囲気がある。
剛三は一人を除いた全員の前にカレーの皿を置く。スパイスと牛すじの合わさった、何ともいえない香りが漂う。テーブルを囲む四人の顔に笑顔が浮かんだ。
唯一、笑っていない少女――プリス朝霧（あさぎり）が眉をしかめた。
「ねえ、アタシのは？」
剛三がプリスの頭を小突いた。顔にはにこやかな笑みが浮かんでいる。
「自分で取ってこい。何でお客様みたいな顔してんだ」
「だって、今はお客様として、ここに座って……」
「何か言ったか、ン？」

剛三の口角が嫌な形に上がる。それを見てプリスの顔色が変わる。プリスはにわかに背筋を伸ばし、ギクシャクと立ち上がった。
「いえ、何でもありません。お父様」
「ウン、素直でよろしい」
口角を上げたまま、剛三が優しく言った。
「まあ、好きなだけ分けなさい」
「ありがとうお父さん。あたしとってもうれしいなアー」
プリスは棒読みで応じる。彼女は手と足をカクカクと動かし、厨房につながる扉の向こう側に消えた。
「ちゃんとエプロンと三角巾するんだぞ」
剛三が声をかける。返事はない。彼の顔に苦笑めいたものが浮かんだ。
ネネが小首をかしげながら剛三に問いかけた。
「プリスちゃん、どうしちゃったの?」
「何でもないですよ。ちょっとした、親子のコミュニケーションです。ウチではいつものことです」
「ふうん」
剛三はお嬢様風の少女が目を丸くしてこちらを見ているのに気づいた。たしか、シリア

さんだったな――と、名前を思い出しながら口を開く。
「どうかしました？」
「あの、あなたがあのじゃじゃ馬の」
いかにも知的な少女――リンナという娘だったなと剛三は思った――が咳払いをした。
シリアをたしなめたのだろう。剛三は笑みを深め、シリアが発する次の言葉を待つ。
「あの子のお父様なんですか？　にしては、その」
「似てませんかね？」
「いえ、そうではなくて。ただ……、その」
シリアが慌てて手を振った。彼女が何を言いたいのかを悟った剛三はうなずく。
「そのとおりで、名字は違います。あの子は養子なのです。一〇年前に事故であの子の両親が亡くなって以来、色々とありまして」
「そうなんだ……。ネネと同じだね」
無邪気な少女が言った言葉に、剛三は思わず目を見張った。何か言おうとしたが口を閉じる。こういう場合には余計なことを言わない方がいいと、経験上知っているからだ。
シリアとリンナも同様なのだろう。二人とも神妙な顔をしている。
店内のスピーカーから流れる、手で直接パーカッションを叩く音がやけに大きく響いた。
壮年男性――命英と名乗る紳士が神妙に口を開いた。彼はポツリと言う。

「皆様、食べないのですか？　冷めてしまいますぞ」
「そ、そうね！　早くいただきましょう」
シリアは氷水で汗をかいているグラスから、鉄製のスプーンを取り出した。
「カレー！　カレー！　美味しいカレー！」
ネネが怪しく歌う。お世辞にも上手とは言えないその歌を、剛三はひどく嬉しく聞いた。
四人は声を合わせて唱えた。
「いただきます」
その声に反応したのか、制服の上に白いエプロンをしたプリスが厨房から顔を出した。
頬が膨れている。拗ねているようだ。
「ちょっと、あたしが行くまで待っててくれーー！」

大盛りのカレーを片手にプリスが席に着く。シリアたちはすでに食事を始めていた。
彼女は空いている席に座っていた剛三を見て顔をしかめた。
「んだよ、親父ぃ。カウンターにいりゃあいいジャン」
「いいだろ、他にお客様もいないんだし」
「あんまりヒマだと、潰れちまうぞ」
「大丈夫さ。この店のファンは多い、とネット掲示板に書いてあったよ」

剛三がニヤリと笑った。命英はスプーンを動かす手を止めた。彼は感嘆した様子であたりを見回し、深くうなずきながら言った。
「さもありなん。この店の空気は作り物じゃない、時が育んだ熟成の賜物（たまもの）です」
「ありがとうございます」
剛三が軽く頭を下げる。命英が夢見るような、半ば独白するような口調で言った。
「私が学生の頃、関西のあるヘビーメタルバンドが人気でしてね。武道館ライブのチケットを取るために徹夜で並ぶ、そんな青春を過ごしたものです。当時はロックマニアのオヤジが店主の喫茶店に仲間とたむろしたものですが、その店がちょうどこんな雰囲気で……」
命英はハッと目を開いた。喋りすぎたと思ったのだろう。彼は咳払いして続ける。
「幸い、ご主人の思いは娘さんに結実した。プリス様の歌声に、シリアお嬢様が一目ぼれなされたのです」
命英はシリアを見る。だが、彼女は話を聞いていなかった。今までこの手の本格カレーを食べたことのない彼女にとって『Ｍｏｂｙ Ｄｉｃｋ』のカレーは新鮮な味覚なのだ。
命英は主の様子に苦笑を浮かべながら続けた。
「昨日のことです。シリアお嬢様は一緒にバンドを組みたいと言い出しまして。プリス様にオファーさせていただいたところ〝実に快く〟ご了承いただきました」

剛三がプリスに視線を送る。命英の話をつまらなそうに聞いていた彼女は数度うなずく。どこか芝居がかっているのは、照れ隠しのつもりなのだろうか、と剛三は勝手に納得した。

命英は大きくうなずき、確信に満ちた口調で言った。

「お嬢様は、一度やると決めたらトコトンやるお方なのです。ですから私も昔取った杵柄を活かしていこうか、と思った所存」

命英がにこやかに言った。再びスプーンを手にし、小さくうなずく。

「そのようなわけで、これからはプリス様を中心に積極的なプロデュースをいたしますから、何とぞ宜しくお願い申し上げます——という挨拶がてらの来店なのです」

命英はどこかの敏腕営業マンのように人好きのする笑みを浮かべた。その明るい顔と、どこかブスッとした表情のプリスを見比べた剛三は苦笑する。

「どうしたプリス、嬉しくないのか？　バンド組みたいって言ってたじゃないか」

「いや、そりゃあ言ったけどさ……オヤジ、こいつらって……」

——こいつら、完全に素人だぜ？　ロックどころか、楽譜読めるかも怪しいところで……

プリスが内心思っていた愚痴を言いかける。剛三が首をかしげた、その瞬間。

「Ｗｏｗ！」

素っ頓狂な声が『Ｍｏｂｙ　Ｄｉｃｋ』に響いた。ネネの歓喜の声だ。妙にノッてるのは環境に流されやすい人間性の発露、店内に流れる古典ロックの影響であろうか。

「剛ちゃん、このカレー美味しい！」
「ご、ゴウちゃん……」
プリスが硬直した。彼女の養父は赤心流松林拳の猛者で、若い頃は相当にヤンチャだったとの噂だ。最近はずいぶん丸くなったとはいえ、「ちゃん」づけで呼ばれるのが似合う顔立ちとは考えられない。
だが、剛三には別の意見があったらしい。目を細めながら応じる。
「そうだろそうだろ。良いクミンが手に入ったからなあ」
スプーンを動かしていたネネの手が止まった。ぎょっとした顔つきで皿を眺め、剛三を恐る恐る眺める。
「それ、このカレーに入ってるの？」
「何だネネちゃん。クミンが気になるのか？　ツウだな」
「えっと……どこのクミン？」
「セイロンだよ。色々試したんだけど、あそこのクミンの風味が一番……」
「〃区民の正論〃？　それって何区の？」
「区？　よく分からんけど、熱帯とかそういうヤツかな……」
聞かないフリをしてカレーをかき込んでいたプリスは咳き込んだ。意味不明な問答を無視していた彼女だが、やっと意味が分かった。

彼女は水を一口飲むやコップを叩きつけるように置く。そしてネネを睨みつけて叫んだ。
「その〝区民〟じゃネェ!!」
突然、プリスの頭からパカーン！　という気持ちの良い音が響く。いったいどこから取り出したのか、剛三はオタマを手に握っていた。
プリスは頭を両手で押さえつつ「オォオオォォオ」とうめいている。
「お客様に何て態度だ！　ホントにこの子はもう」
剛三は立ち上がり、四人に向かって頭を下げた。
「こんなジャジャ馬ですが、皆さん、どうかホントによろしくお願いします」
「うん！　よろしくね」
ネネが口許をもぐもぐと動かしながら言った。
シリアが上品にうなずき、リンナが微笑んだ。そして命英のバリトンが店内に響く。
「こちらこそ、お嬢様とリンナ、そしてネネさんもどうぞよろしくお願いします」
突然、ネネが最後に残しておいた牛すじを頬張りながら言った。
「それで、これからどうすればいいの？　プリスちゃん」
「だから、〝ちゃん〟はやめろって……まあ、いいさ」
剛三の殺気を帯びる視線を感じたプリスは、一瞬口ごもる。
そして気を取り直したように続ける。

「まずは楽器だ。シリアとリンナはもうキーボード一式とドラムセットを持ってるよな?」
二人がうなずいたのを確認して、プリスは続けた。
「後はネネの使うベースを手に入れないとな。よし早速だ、楽器屋行くぞ」
「御茶ノ水(おちゃのみず)ですかな?」
命英がプリスに尋ねる。御茶ノ水は昭和時代から楽器屋のメッカとして知られた地域である。だが、プリスは首を小さく横に振った。
「いや、ちょっと違うところに行くつもり」
「御茶ノ水以外でどこかいい店が? 新宿か池袋(いけぶくろ)、渋谷(しぶや)かい?」
剛三が首をひねるのを見て、プリスは微笑を浮かべた。
「秋葉原(あきはばら)ITの街だけにDTM(デスクトップ・ミュージック)ショップが多いけど、小金持ちを狙ってヴィンテージ弦楽器のいい出物が集まってるんだ。この間は三大ギタリストのサンバースト・レスポールを、コレクターの禿げオヤジが数百万のキャッシュで購入するのを店頭で見かけたよ」
「どうして秋葉原に事件の鍵があると?」
覆面EVパトカーの助手席からレオンにシルヴァが話しかける。レオンが口角を上げる。

茶化すような口調で問い返した。
「ご自慢の検索で分からないのか？」
シルヴァがフリーズした。目の焦点がどこか遠くに飛んで、たっぷり一〇秒ほどそのまま硬直した。レオンは相棒を二度見する。無茶な質問で壊してしまったのかと心配した。
だがその心配は杞憂だった。シルヴァの目に光が戻ってきた。そしてレオンを見つめた。
「分かりません。パターニングできる限りのデータ照合を行いましたが、合致する仮説は立てられませんでした」
「だぁから言ったろ？　捜査ってのはナ……」
「足で稼ぐ。ですが、どうやって……」
続く台詞をシルヴァに先取りされたレオンは肩をすくめ、質問に別の質問で返答した。
「今朝、クレアから来たメールを見たか？」
「二科研の調べた、暴走ブーマのパーツ一覧ですね」
「そうそう。それだよ」
レオンはシルヴァに相槌を打った。そしてちょっとした想いに耽(ふけ)る。――クレアは本当に優しいヤツだぜ、いつも泥縄で適当な俺のために……
「レオンさん？」
レオンの返事がないことを怪訝に思ったのか、シルヴァは彼に先を促す。

――チッ、機械のように無粋なヤツめ。……まぁ、機械だからな……。
レオンは苦笑を浮かべ、心中を悟られまいとして会話を再開する。
「あの一覧から、暴走ブーマは違法製造されたものだってことはすでに分かっている。その中に、俺がご存じな密売屋だけの扱い物があったのさ」
「密売屋、ですか……」
シルヴァが顔をしかめた。捜査型ブーマが言外に潜ませた疑問にレオンは答える。
「危険なヤツじゃない。どちらかといえば性的愛玩目的な違法ブーマのパーツ屋なんだ」
「しかし、罪を犯している者と非公式の関係を持つことは……」
「まあいいから続きを聞けよ。それに、あいつは口が軽いんだ。あんまり軽すぎで、恨み買って殺されるんじゃないか？　――俺はそう思ってるし、本庁やマル暴の連中も心配してる。だがその口の軽さは……」
「情報屋として重宝だということですか。重要人物ならどうして本庁のホロメモリに、彼の名前がないのでしょう？」
「全部引っくるめて、お目こぼしってことさ」
レオンが赤信号にクルマを減速させながら、言葉を続ける。
「ヤツは、ブーマの違法パーツを密売する傍ら、趣味の音楽を活かして表向きは楽器屋を営んでいる。『Ｂｕｒｎ』って店だ」

シルヴァが一瞬だけ固まる。納税記録にでもアクセスしたのだろうか、彼は目を見開いて不思議そうな感じでレオンに尋ねた。
「売り上げ規模から見ると相当に成功している範疇に入ります。その収入だけでも充分に潤っているのに、違法行為に手を染める理由が分かりません。何故ですか？」
レオンが口を開こうとしたとき、信号が変わったので彼はアクセルを踏んだ。そしてレオンはシルヴァを一瞥して答える。
「趣味を本業にしたら楽しみがなくなるだろ。だから趣味より儲かる商売が必要なんだよ」
「ここだ。ココ」
秋葉原駅から少し離れた店の前でプリスは足を止めた。ネネが看板を読む。
「えーっと、Ｇｕｉｔａｒ Ｓｈｏｐ『Ｂｕｒｎ』？」
「ま、入れば電気屋じゃないってすぐに分かるよ、早く入ろうぜ」
プリスが自動ドアのスイッチを押し、ネネと共に店内へ一歩足を踏み入れると、二人は空気を震わす重低音の手荒い歓迎に圧倒される。むせび泣くギターの音が耳をつんざく。
ネネは一瞬だけ耳を押さえたが、すぐに思い直して手を離す。そして好奇心に満ちた視線であたりを見回した。彼女は店内ところ狭しと並ぶ楽器に目を輝かせる。

興奮気味なネネの表情を確かめて、プリスは笑みを浮かべた。
「凄えだろ、ここは。初心者用の楽器なんて一本もないんだぜ」
「アラいらっしゃい、プリス。ニュースで見たわよ、凄かったじゃない。大丈夫なの？」
横の方からプリスに親しげな声が投げかけられた。浅黒い肌をした男性に視線を向けて、彼女は笑みを深める。
「ロベルト、久しぶり」
男性は身をくねらせながらプリスにウインクする。
「ホント久しぶりだわね。アラ、今日はずいぶん可愛いお友だち同伴なのね、お名前は？」
「はじめまして、ネネ六波羅（ろくはら）です。よろしくです！」
ロベルトと呼ばれた男は白い歯を見せて自己紹介を返す。
「アタシはロベルト・ジョンソン。ボビーって呼んで。店長やってるの、よろしくね」
「ボビーちゃん、よろしく！」
プリスは肩をすくめて目的を切り出す。
「ってわけで墓穴掘りそうな自己紹介は終わりにして、今日はコイツの買い物に来たのよ」
ロベルトはネネに興味深げな様子で、プリスに尋ねる。

「プリスはギターだけど、この子は？」
「ベースです。ベンベンするやつ！」
ネネが横から返答する。ロベルトは大きくうなずいて、店内の一角を指し示す。
「ベースはあそこよ、ヴィンテージも全部売り物だから、どれでも好きなのを選んで」
「どうもです！　いぇーい、ネネいきまーす！」
プリスの止める間もなくネネが駆け出したのを見て、ロベルトはクスクスと笑う。
「元気な子だわね、ちっともあなたの友だちらしくないけど」
プリスはロベルトの疑問に答える。
「一昨日会ったばかりで、ちょっとした縁があってね。それだけなんだけどさ……」
そう話しながら、何げなく視線を動かした入り口上部の壁に、ボルト留め金具でネックとボディーを固定された白いギターの姿が目に飛び込んできた。
よくよく眺めてみると、鋭角的なV字型のボディーに備わるボリュームノブの一個が見覚えのある形で大きく、ペグ（糸巻き）も少しだけ変な格好をしている。
「アレにはじめて気がついたみたいね」
ロベルトはプリスに望まれるのを待つことなく、ギターを壁から取りはずすためのスパナをレジ裏から持ち出した。そして手際よくボルトをはずして壁からギターを下ろす。
「このランディVはロボットギター化されているの。チューニングし難いフロイドローズ

（トレモロユニット）専用に高速で微反応するよう調整されたパワーチューンシステムを搭載してるのよ。ロック式ナットまで自動で連動するの。フレットは交換済みだし、ネックの反りもないわ。チューナーの操作はダークファイヤーと同じよ」
「存分にアーミングできるのにチューニングが早いのか……」
「何よりもデザインに華がある、だからあなたにお似合いよ。でも気になるのは音の方なんでしょ？　早く弾いてみなさいよ」
ロベルトは自信ありげにプリスに試奏を促す。
「その様子なら、試すまでもない太鼓判ってことなんでしょ？」
組んだ指をボキボキと鳴らして言葉とは裏腹に試奏する気マンマンのプリスに対し、ロベルトは思わせぶりな視線を湛えながら顎でマーシャルアンプの方を指し示した。
「ネネはこれにする！」
そのとき、存在をうっかり忘れかけていた能天気な声が響いた。ネネが一本のベースと一冊の本を手にして、プリスの元へと戻って来たのだ。
宝物でも見つけたかのような笑顔を浮かべた彼女は、少しランディVとも似る、一本の鋭角的なシェイプをしたベースを掲げた。フライングVである。
プリスは肩をすくめた。偏った重量バランスの問題からヘッド側が下がり気味になるし、ボディーに引っかかりがなく安定しないから座っての練習にも適さない。

これから練習を重ねる素人が使うにはどうかと思うが、しかし格好のインパクトは大きい。初心者丸出しの選び方だなと、そう思った。
だが、違う反応を示した者もいる。
「うーん、ずいぶん稀少なお爺ちゃんのベース持ってきたわね……それはちょっと……」
ロベルトは難しい顔でうめいた。ネネが無邪気に反論する。
「えー？　ボビーちゃん、何でもいいって言ったじゃん」
「確かにね。だけど……」
「どうしたの、ボビー？」
店主の呟きを聞いたプリスが尋ねる。ロベルトが首を振った。
「そりゃあ、この店にあるものは全て売り物だけど、わずか二年間だけの生産のうちの、八一年のオリジナルでコンディション良好だから高いのよ……素人が使うには……」
「ヤだ。これがいい！」
プリスとロベルトが眉間に皺を寄せながら渋るのを見て、ネネはフライングVに頬ずりしながらダダをこねた。プリスは額に手を当てて天井を見上げる。疲れたような口調で言った。
「〝とくに〟オマエにはもったいない、違うのにしとけ」
プリスは腰に両手を当ててネネを見つめる。ネネは絶対離さないといった風にベースギ

ターを抱きながら、アッケラカンと応じた。
「だって、一本のマイクでプリスちゃんと寄り添って歌うんでしょ？　だったら、似てる形のベースを使った方がカッコいいでしょでしょ？」
確かにそれも一理あるので、プリスは黙り込んだ。ネネが続けた。
「今から覚えるんでしょ？　おソロっぽくて、これならやる気がドックンドックン出る！」
そう言って爽やかな笑みを浮かべ、手にしていた本を差し出した。
「だからこれもください！」
プリスはネネが差し出した本を目にして、突きつけられた事実にあらためて絶句する。
彼女が差し出したのはベースのテキスト本だった。それ自体は珍しくもないが、問題なのはそのタイトルだった。
「『バンドやろうや！　シーズン1～ぼちぼち始めるベースギター～初級編』」
プリスは天井を仰いだ。
こんなド素人とバンドを組まねばならないとは……トホホすぎるだろ――超高校級な技術とやる気にプライドを持つ彼女のそれを、ズタズタにされた気分になった。
彼女は半ばヤケクソ気味に、決定的な失言をしてしまう。
「そんなもの買うな！　アタシが一から仕込んでやる！」

「やったーーー！　プリスちゃん大好きーーー!!」
シマッタ！　とプリスは瞬時に思って頭を抱えたが、すでに時遅しだった。
ネネが続けて唐突に言った。
「プリスちゃんもそのギター買うんでしょ？　弾いてみして弾いてみして！」
嵐のように襲来したネネのおかげでプリスは平常心を失いかけていた。だが、そのお騒がせな彼女の一言で、プリスは自分が優先して行うべきタスクをハッと思い出す。
「そうだ！　ねぇねぇ、あれやってよ！　タリラリラリラリ♪　ってやつ、そう『天国への階段』」
「そりゃ、無理だ」
プリスはある一角を指さす。
試奏用に何台かのアンプとストールが設置されたそこには、大きな文字の刻まれた金属プレートによる注意書きが掲示されていた。
『〝天国への階段〟を弾くような初心者お断り』と記されている。
〝スモーク・オン・ザ・ウォーター〟を弾く奴はトットとお帰りください、とも小さく書き添えてあった。
調子に乗っていたネネは出鼻をくじかれ、ヒィ！　と小さく叫んでたじろぐ。
プリスはしてやったりと肩をそびやかしたが、ネネは不服そうに頰を膨らます。

「とにかく、そういうことなんで悪しからず、フフッ」
プリスはスツールに腰かけ、アンプにケーブルをつないでギターを鳴らす。そしてダークファイヤーと同じ要領でチューニングを行う。チューナーペグは滑らかな動きだ。
手馴れたフレーズを幾つか弾いてみると、サスティーン（響き）もキレも最高だったし、ネックが何よりも手に馴染む、とプリスはそう思った。正確には思ったのではなく、ヤバいと感じたのだった。
ギブソン・レスポールよさようなら、ジャクソン・ランディVよヨロシクね！　って気分、と興奮気味の心でプリスは考える。彼女は、アーティスト風に擬人化されたレスポールがどこか悲しげに手を振って去っていく姿を、幻視したような気がした。
そのとき、ロベルトのポケットからパワフルなドラムと特徴的なシャウトが響いた。
彼は眉をしかめ、スマートコミュニケーターを取り出す。
発信者の名前を見た彼は通信を保留にし、プリスに話しかけた。
「ごめんねぇ。急用ができちゃったわ。ちょっとはずすわね」
彼はそう言って手を振りながら、そそくさと店の奥へと引っ込んでいった。
『Ｂｕｒｎ』店主は裏口から入ってきたレオンたちを愛想良く迎え入れた。
「お久しぶりぃ、レオン」

「おう、繁盛してるか？　表も裏も」
レオンが応じた。ロベルトは苦笑いを浮かべる。
「あなたっていつもそうね、イヤらしい」
「いいから、早く見せろよ」
ロベルトは肩をすくめた。そしてエレベーターの扉を開け、レオンらと一緒に中へと滑り込んだ。壁面の窪みにカードキイを挿入し、コンソールから秘密コードを入力する。
エレベーターが下に動く。階数表示上に地下フロアは存在しない。違法建築である。
シルヴァはその間、一言も発しなかった。
ポーン、という音と共に扉が開いた。
そこには壁一面に性的愛玩用の違法ブーマが並んでいた。レオンが鼻を鳴らす。
彼は目の前に広がる光景に顔をしかめる。何度見ても、慣れるものではない。
「こんなのが全部売れるのか？」
「これでも足りないくらいなのよ。日本人って世界一の変態だわ」
そのおかげで商売が成立している密造ブーマ店の主は、他人事のように言った。
「ところで、そこのボーヤは？　あたしがお気に召さないようだけど」
「俺の相棒は何も考えてないよ、お堅いだけだ。名はシルヴァってんだ。ちょっと変わってるとこあるが気にするな……それよりな」

レオンは無造作に置かれたソファへどっかりと腰を下ろしながら、本題を切り出した。
「一昨日の暴走ブーマ事件は知ってるな?」
「ああ、ウチの大事な顧客のライブを邪魔したヤツね」
レオンは牛肉コロッケ乱闘事件をにわかに思い出す。そして不機嫌な声で続けた。
「客? まあ知ってるなら話は早い。そのブーマの残骸を調べたら、何が出てきたと思う?」
警戒して沈黙するロベルトの表情を確認しながら、レオンが言葉を継ぐ。
「技適番号BMX－20329382 83。型式番号YMS－560N14016SV」
レオンが口早に告げる。ロベルトは顔色を変えた。
「ちょっと、ナンなのよそれって」
「パーツの出所はお前んとこだ。そうだな?」
ロベルトは黙って商品管理端末に取りつき、キーボードを叩いて帳簿を調べる。
怪訝そうな表情を浮かべるシルヴァに、レオンはニヤリとして説明した。
「こいつはブーマの密売人なクセにお上へ情報を流すクワセ者で、表じゃただの善良なロック好きのフリしたトンデモないヤツだが」
「最後のはホンモノよ、取り消して」
ロベルトのクレームをレオンは受け流して言葉を続ける。

「野良犬には野良犬の掟がある。ラブ&ピースを脅かす目的に自分の商品が使われるのは許せない、そういうことだ」
「それは事実だわ。これがその――」
ロベルトが帳簿の検索で抽出したデータ入りのチップを管理端末から抜き取り、それをレオンに渡そうとしたときだった。
突然、ブーンという低周波音が室内に響く。
「起動音、警戒しろ!」
レオンが叫ぶのと、女性型ブーマの一体が彼らに襲いかかるのは、ほぼ同時だった。
とっさにレオンは対ブーマ用の大口径ハンドガンを発砲する。襲撃者の至近距離で炸裂したそれは強力な破壊力を証明し、女性型ブーマの頭は一撃で吹き飛んだ。
だが制御ユニットを粉々にされたはずの暴走ブーマは、動きを止めなかった。
「畜生、コイツはアレと同じヤツだ!」
生体機械は周囲の金属と愛玩ブーマを自らに取り込んだ。
それは多数の腕と足が生えた化け物へと変化を始め、首が妙な角度へ曲がったかと思うと、第二の新たな頭まで生えてきた。
ブーマは第二の頭に備える双眸(そうぼう)でレオンを真っ直ぐ睨みつけ、威嚇するように大きく口を開き、野獣のようにシャァッという叫びをあげる。

レオンがハンドガンを発砲すると、ブーマの顎が吹き飛んだ。だがブーマに大きなダメージを与えることはできていない。何事もないように化け物はまだ動いている。
「チッ、このゾンビ野郎！」
レオンの舌打ちをあざ笑うかのように、ブーマは金庫と融合を始めた。
ロベルトは驚いて叫ぶ。
「まずいわ、その中には護身用の銃が——」
「！」
レオンがロベルトを庇い伏せるのと、暴走ブーマの融合銃が発砲するのは同時だった。

「だからそうじゃないってば！　指先じゃない！　手全体を使え！」
「ひぇーん。せんせぇ、優しくお願いしまーす！」
プリスは頭痛のしそうな思いで、自分のこめかみを押さえる。
初心者の覚えが悪いのは当然で不思議もない。だがネネの習熟が遅れたら遅れただけ、それはプリスのデビューが遅れることに直結するのだ。
自分の見通しが甘かったかな？　とプリスが少し後悔を始めた、そのときだった。
ミキシング・コンソールの操作ミスで大型スピーカーから漏れたバスドラムのような音が聞こえ、店の床が震えた。

「何だ何だ？　きょくち地震？」
ネネが小首をかしげた。プリスが応じる。
「あんな地鳴りするるか？　ガス爆発かな」
突然、店の奥のドアが吹き飛んだ。中から三人組の影が転がり出る。
見ると全員、プリスに見覚えのある顔ばかりだ。
店主ロベルトと刑事レオン、それに相棒のシルヴァだった。
「お兄ちゃん、見て見て！　ネネ、カッコいいベースを買って貰っちゃったー」
ネネの存在を無視してロベルトが何事かを英語で叫ぶ。ずいぶん切迫した様子だが、さっぱり見当がつかない。
異変を察知したプリスは、アーティストらしい声量でレオンに叫ぶ。
「オイ、〝お兄チャン〟、何があったんだよ!?」
レオンは答えて怒号をあげる。
「急げ、オマエら早く逃げろ！　ネネ、急いで！」
その瞬間、猛烈な振動と共に床にひび割れが走った。下から強引に圧力がかかったのだ。コンクリートが隆起し砕け、ほの暗い破孔が現れる。
一瞬置いて、そこから〝何か〟が現れた。
多数の手足や首を生やした、生き物ではない、何かの化け物だった。

それを見て、プリスは目を見開く。
「またかヨ！」
彼女は叫んだ。その声に爆音が被さる。プリスは反射的に轟音の方へ目を向けた。
レオンが対ブーマ拳銃を構えているのが見える。レオンが怒鳴った。
「何してる、死にたいのか！　早くしろ！」
彼が豪快に発砲する。それが呼び水となったのか暴走ブーマは軋るような叫び声をあげ、レオンに向けての移動を開始した。
それを見てプリスは自分が為すべきことに気づく。一方の手でベースを抱えたネネを引っ張り、もう一方の手にランディVをつかんで、店から逃げ出そうと走り出す。
「くたばりやがれ化け物が！」
プリスたちの背後からレオンの怒号と、ドラムを乱打するような音が響く。武装刑事と暴走ブーマの激闘が奏でる戦場音楽だ。
彼女たちが振り返る余裕はない。プリスはネネを引いて楽器の山を抜けた。開きっ放しの自動ドアから外に飛び出す。通行人はその騒ぎに何事かと足を止める。
店外に出て離れた場所で少し落ち着いたプリスは入り口を振り返った。発砲音が大きくなる。数瞬、武装刑事が後ろ姿のまま、店外へと現れた。
レオンは大声で叫ぶ。

「まだ止まるな！　走れ！　行くんだ！」
ほとんど同時に、『Ｂｕｒｎ』の壁が崩れて炎を噴き上げる。続けて中から暴走ブーマが姿を現した。
ブーマは低く息を吐き、武装刑事を上目使いで見つめ、次の瞬間に野獣のように甲高い声で叫んだ。その声が往来に響き渡る。
驚いた通行人たちは走り出す。我先にとあらぬ方向へ逃げようとするので、大混乱となった。レオンが何かを叫んでシルヴァが場を仕切ろうと行動を始めたものの、それを止められそうになかった。
「『Ｂｕｒｎ』が燃えちゃうーー！」
先ほどまでいた店が崩壊する様を見て、ネネが半泣きで叫ぶ。
だが、プリスは危機の中でチャンスと思った。この状況なら逃げるのに精一杯で、謎の『正義の味方』が登場したって誰も気にしないだろうと考えた。彼女はコミュニケーターを操作し、シリアを呼び出した。
わずか数秒だが、じりじりとする時間が流れる。
「こちらシリア、ハロー」
「おい、これが見えるか!?　暴走ブーマだ！」
プリスはスマートコミュニケーターのカメラを暴走ブーマの方に向け、通信相手のシリ

ア に向かって叫んだ。

「もう分かっています。今、リンナがそちらに急行しているところです」

「だったら話が早い。ついでにアタシのハードスーツをくれよ。アタシも闘う！」

シリアが答える——

「ダメです。あなたの戦闘参加は認められません。使い方も知らぬ人間が着用しても、頑丈なだけの木偶の坊で邪魔にしかなりません。あなたたちは速やかにそこから逃げなさい」

コミュニケーターの向こう側から、シリアの冷静な声が響いた。

「ナンだってー！！！⁉」

プリスは問い返した。シリアが何を言っているのか聞き取れなかったのだ。

通信機から再度、シリアの苛立った声が聞こえる。

「早く逃げなさい。そこにはAD・POLICEの精鋭もいるはずです。市民の誘導は、その人たちに任せなさい」

プリスは背後の通りを振り返った。荒れ狂う暴走ブーマから逃げ惑う市民の姿が見える。

彼女は舌打ちする。あたしが闘わなきゃこの人たちは——

通信機が再び叫んだ。

「命令です。早く逃げなさい！」

「じゃかしいわ！　そんなことができるか、何のための正義の味方だ！」
「プリス！」
「うるせえバカ！　こちとら江戸っ子だぞ！」
プリスは叫び返した。シリアが何か言っているようだが耳に入らない。彼女はコミュニケーターの画面をぶん殴るようにして通信を切断した。一刻の時間も惜しいのだ。
「アレを使わせて貰う」
彼女は自衛用としてシリアから与えられた、ハードスーツ装着時の接点でもあり緩衝装置でもあるアンダースーツ、通称『ドレススーツ』のみで、ブーマの暴走を食い止めると決断した。いずれにしてもここで動けないようなら『ナイトセイバーズ』としての価値はないだろうと考える。
彼女はこの場にいるもう一人の同志に、共に戦うことを促す声をかけた。
「ネネ、いくぜ！　……ネネ？」
プリスは返事をしない後輩を振り返った。
ネネは目を大きく見開き、立ち尽くしている。ベースを抱える肩は小刻みに震え、顔面蒼白で怯えきっている。
戦闘どころか、もはやこれ以上立つことすらままならないだろう。
プリスは原因に思い当たった。

——そうだよな……こいつまだ、ブーマにやられた記憶が……
ネネの中にある、暴走ブーマに襲われた恐怖が、まだ鮮明に残っているのに違いない。
プリスは唇を嚙んだ。いかに能天気とはいえ、ただの高校生だ。その恐怖を克服しろというのは、今の状況では難しいだろう。
「アタシのVも守っててくれ……頼んだぜ！」
プリスは自分のランディVをネネに押しつけた。その場で丸くなったネネを置き去りにして、彼女は建物の陰へと走り込む。
周囲に誰もいないのを確認した彼女は、大きく息を吸った。初陣(ういじん)の不安を消し飛ばすように、腹の底から音声指令ワードを叫ぶ。
「バトルコマンド。〝トランスフォーム〟オン！」
瞬間、淡く青白い光がその場を包み込んだ。

レオンの目を閃光が焼いた。続いて巻き起こった轟音(ごうおん)が鼓膜を揺さぶる。
——対ブーマ銃の連続発砲って身体に良くないぜ。目か耳が傷んだら労災下りるのか？
彼は脳のどこかでそんなことを考える。だが今はそんなことを全て無視する。ほとんど条件反射といえる速度で、レオンは残弾を気にしながら引き金を引き続けた。
銃が吼え、ブーマから機械の部品を引きちぎる。暴走した生体機械は、人間に理解でき

ない甲高い叫び声をあげる。叫びながらもレオンにケーブルの塊を向ける。
その先端にあるものに気づいた彼はビルの瓦礫に身を隠す。ドン、っという音と共にコンクリートの破片が飛び散った。散弾だ。
「ヒュウッ！」
彼は思わず声をあげる。今のは危なかった。暴走ブーマが銃器を取り込んでいるというのを知らなければやられていただろう。
彼はセーフティーを操作し、残り一発になった弾倉を取り出した。無駄弾を撃つわけにはいかないが、一発しか打てないのもまずい。舌打ちしつつ、新しい弾倉を拳銃に放り込む。金属の嚙み合う重い音が響いた。一五発の対ブーマ弾が拳銃に補給される。
だが、これが最後の弾倉だ。後は、先ほどのように一発かそこらしか残っていない弾倉ばかりだ。現実的には何の役にも立たないだろう。
レオンはため息を押さえ込み、背後を振り返った。シルヴァが何事か叫んで市民を誘導している姿が見えた。
——あいつに銃器携行が認められてたら、もっと楽なのに。
彼にはそれ以上、繰り言を考える時間がなかった。暴走ブーマにさえぎられたのだ。連続した発砲音が響き、コンクリートがさらに削られる。
「クソッタレ！」

レオンは吐き捨て、瓦礫から身を乗り出す。素早く照準を合わせて引き金を引いた。遠雷が鳴り響き、ブーマの触手についていた銃が吹き飛ぶ。オイルか血か、何か分からない液体が噴出した。生体機械がうめき、苦しげに身をよじる。
「ざまぁ見ろ」
レオンは唇を歪めて鼻を鳴らす。よし、これで遠距離武装は封じた。あとは、市民の誘導さえうまくいけば――
その考えは甘かった。ブーマは不機嫌に唸りながら大きめの瓦礫を拾い上げる。二、三度重さを確かめるように動かし、圧搾空気のような叫びと共に投げつけてきた。
「投擲か、古代戦法かよ！」
レオンはとっさに身体を丸めた。砂埃と共に鈍く大きな音が響き、レオンが隠れていた瓦礫は衝撃で揺れた。
――こいつぁ、マズいな。
レオンは唇を舐める。このブーマは瓦礫を使うことを思いついた。この前の暴走ブーマよりも、少しだけ知恵が残っている。このままだといずれ追い込まれてしまう。
かといって、黙ってAD・POLICEの増援を待っているわけにはいかない。到着まではそれなりに時間がかかるだろうし、それに何より――
――俺もそうだが、弾も保たない。さすがにこのままじゃ……

彼はそこで眉をひそめた。瓦礫を投げられて以降、やけに静かだ。知恵をつけたはずの暴走ブーマから彼に対する攻撃が、なぜか止んでいるのだ。
どういうことだ？　そう疑問に思った彼は、瓦礫から頭を出してブーマを見つめた。
するとそこに、新たな人影らしきものを彼は目撃した。ブーマに比べて黒く小さな影だが、黒を基調としてひらひらとしたフリル状の布をたなびかせていた。下半身はスカートで、その下からは黒いストッキングを履いた足が覗いている。
驚いたことに、その影がブーマを乱暴に殴り、蹴りをぶち当てていたのだ。
顔の部分にはベールがかかり、離れたところから表情をうかがい知ることはできない。だが、どう見ても華奢な女性の姿だということは分かる。
レオンは唐突に思い出す。オイ、それじゃ、これが、プリス朝霧の言ってた……だが装甲服戦士だったはずだ……ムダにお洒落なやつじゃなくて——
彼は食い入るように黒い影の戦いを眺めた。

〈ソォリャア！〉
電子加工されたプリスの声が響く。華麗な外見とは裏腹に、豪快な戦いぶりだった。
彼女は裂帛（れっぱく）の気合と共に右ストレートを放つ。暴走ブーマは高く耳障りな声をあげながら、大きくのけぞった。

確かな手ごたえにプリスは満足を覚える。
彼女は「護身用に」と渡されたドレススーツのことを、まったく信用していなかった。何より、見た目の印象が良くなかったのだ。
黒い、ヨーロッパの貴婦人のようなベールのついたドレス。それをフリルとリボンで飾り、かすかに膨らんだスカートと黒いストッキングで足元を締める。
どう見ても典型的な、ゴシック&ロリータ・ファッションの文脈そのものである。これが戦いの役に立つと考える方がどうかしてる、そう思ったのは当然だ。
だが、このドレススーツはそこらのゴスロリとはひと味違っていた。戦闘用に作られたゴスロリなのだ。
『ナイトセイバーズ』が用いる第一種装備、『ドレススーツ』。これは瞬時に外形変換の可能な超伝導色彩と形状記憶繊維によって生成されている。このドレススーツは、
——着用者の全身を覆い、そのパワーとスピードを倍力強化アシストする！——
ブーマがケーブルの触手を振り回し、力任せの一撃を繰り出す。プリスは難なくかわすと、逆にケーブルをつかんで乱暴に引きちぎった。
バチッという音と共に電光が飛ぶ。暴走ブーマがうめいて一歩後ろに下がる。
ベールの下でプリスがニヤリと笑う。今のは、それなりのダメージだったに違いない。
——ドレススーツも、案外いけるジャン！

ドレススーツは、強力な防護力とパワーが得られる装甲服である第二種装備『ハードスーツ』のアンダースーツにすぎない。
気密と防弾防刃、それに最低限のスピードとパワーのアシスト機能は、ハードスーツの一〇分の一にも満たないだろう。
だが、それでも。プリスは笑みを深めた。
この局面ならこれで充分だ。少なくとも現在はまだ大丈夫。
プリスは一気に距離を詰めた。素早く左右の拳を動かし、ブーマに連打を入れる。パワーと質量の不足をスピードで補い、暴走ブーマを圧倒するつもりだった。
〈吹っ飛べェーー！〉
彼女は、渾身の力を込めて右ストレートを放つ。
暴走ブーマは、ヒップホップＤＪがレコードのスクラッチに失敗したような異音を立てながら、胴をひしゃげさせた。
だが――
暴走ブーマは一瞬仰け反っただけで、元の状態に回復した。そしてプリスに無機質な機械の顔を見せつける。小癪（こしゃく）な相手と思ったかのように、計り知れない憎悪を込めた視線でプリスを貫き、威嚇するように大きく口を開ける。
ダメージは与えている、だが倒しきることができない。弱点を突く決定打がないのだ。



プリスは渾身の怒りを込めて暴走ブーマに蹴りを入れる。オイルが噴出し、金属骨格が曲がった。それでも、ブーマの倒れる様子がない。

怪物は腕を振り回して彼女の胴をなぎ払った。プリスは軽いステップで強烈な一撃をかわす。怪物が体勢を崩した。

彼女は唇を引き結んだ。右手を大きく振りかぶって全体重を乗せつつ怪物を殴る。だが、やはり——

プリスは声を限りに叫んだ。電子加工された彼女の声が、秋葉原に響く。

〈こぉン畜生ォオ！〉

黒い影はブーマをよく翻弄している。人間が相手なら、もう何十回とトドメを刺したであろう。

だが相手はブーマである。致命傷を与えることができていない。おそらくは質量が違いすぎるのだろう。いかに技量で勝っていようと、回復力を上回るダメージを与えなければこの暴走ブーマは倒せないのだ。暴走ブーマの回復力は、黒い影の攻撃力以上だった。

ブーマは回復のために、手当たり次第に近場の金属を融合し始めていた。

そして、その中には——

「こりゃ、マズいぞ」

レオンは思わずうめく。暴走ブーマが路上の車を取り込んでさらに巨大化したのだ。

そのタイヤが回り始める。走行能力まで身につけてしまったのだろう。

このままではダメだ、あのときのように逃げられてしまう、と彼は焦った。そして事態はさらにまずい状況下にある。

一昨日は高速道路という閉鎖空間での暴走だから封鎖することができた。だが今回は市街地区である。ロケット弾を撃つような無茶は絶対にできない。

また、大勢の市民を守りながら戦うのを迫られることは、大きなハンデだ。

レオンは拳銃のグリップを強く握りしめた。こうなったらイチかバチか——

張りつめた弓の、弦を解放する音が聞こえたのはそのときだった。

レオンはその音源を求めて振り返る。三ブロックほど先にあるビルの屋上に、誰かが立っているのを確認できる。だが逆光のせいで細部がよく見えない。

ドンッ、という音と共に小さな振動が起きる。音速で飛来した金属製の矢が、ブーマをアスファルトへ串刺しにしたのだ。

豪弓（ごうきゅう）の音は続いた。暴走ブーマに次々と矢が命中し、ブーマ本体は動きを止める。暴走した生体機械は、路面へと完全に縫いつけられた。

すると怪物が身動きを取れなくなったところへ、シルヴァが地下電気ケーブルを引きちぎって押しつけた。

基幹電線には数百万ボルトの電気が流れている。
それを喰らえば、いくら再生能力に優れたブーマといえども致命傷だろう。
だが、それは同時に——
「シルヴァ！　バカ野郎、やめろ！」
レオンは、捜査型ブーマが一瞬笑顔を浮かべたように思った。
次の瞬間、シルヴァと暴走ブーマは激しいアーク光に包まれた。暴走ブーマの有機パーツが蒸発し、断末魔の甲高い遠吠えが秋葉原のビル街に響いた。
化学物質の焼ける嫌な臭いがあたりに充満し、暴走ブーマはついにその機能を停止した。
だが、レオンは暴走ブーマの最期に興味がなかった。
彼は黒焦げになった相棒に駆け寄る。
「シルヴァ！　おい！　シルヴァ！」
シルヴァは動いていた。黒煙を上げながら目を動かす。口を開くが声は出せないようだ。
レオンは相棒を抱き起こして強く抱きしめた。

プリスはレオンの駆け出していく光景を、衝撃を持って見つめていた。
シルヴァは黒焦げになりながらも生きている。胴からはみ出たケーブルを見るまでもなく、それがブーマだと分かる。生命機械以外に、一〇〇万ボルトの電撃を喰らって生きて

いることなどできないだろう。
あのシルヴァとかいうヤツは、ブーマだった。暴走して彼女と殴り合っていた怪物と、元は同じなのだ。
だが、二つのブーマは本質的に大きく違う。一方は破壊の限りを尽くし、人に危害を加えた。もう一方は、街を守り、市民を守り、そして相棒を守ったのだ。
シルヴァは確かに生体機械だった。そうかもしれないが、この場にいたどんな人間よりも人間らしい行動——誰かを、何より仲間を守るという行動を、誰よりも適切に、自己犠牲を払って選択したのだ。
人間が人間であることの本質は、共生の精神を持つことである。
彼を人間らしいと呼ばずして、何と呼べばいいのだろうか。
プリスは男たちの、命がけの戦いに圧倒されていた。彼女は半ば呆然としながら、レオンが相棒を抱きしめて男泣きする様子を眺め続けた。
《今がチャンスです。今のうちに姿を消してください》
不意に、電子的に加工された声が近くで響いた。彼女は首を回す。
ハードスーツを着たリンナが立っていた。ビルの上から豪弓を放っていたのは彼女だったのだ。
プリスに声が届いていないと思ったのか、リンナが繰り返した。

《現場が混乱しています。今のうちに姿を消してください》
〈けど、どこに……〉
プリスの声にハードスーツの頭が揺れた。うなずいたのだろう。
《こっちです。着いてきてください》
リンナのハードスーツが地を蹴った。華麗に宙を舞い、ビルの屋上に降り立つ。プリスはシルヴァにもう一度視線を送り、少しためらってからリンナの後を追った。

現場から逃げ出したプリスとネネは、リンナが経営する近くのメイド喫茶にいた。客は彼女たち以外にいない。
暗闇の中、蠟燭を明かりにしている店内はひどく幻想的に見えた。
プリスはリンナが淹れた紅茶を一口飲み、軽くため息を漏らす。
そのため息に応えるようにリンナが呟いた。
「基幹電線がやられたようですね」
プリスは唇を嚙む。そうだ。店内が薄暗いのは、雰囲気作りのためではない。秋葉原一体を襲う、大停電のせいなのだ。
シルヴァが黒焦げになりながら基幹電線を引きちぎったことを思い出したのだ。人間以上に人間らしいブーマの仕業による結果である。

「えっと、ここはね……ちょっと待ってね」
ネネは振り返って、リンナに尋ねた。
「リンナちゃん、ここ、どのあたり？」
「ここは、メイド喫茶『とりぷれ☆あ』。神田（かんだ）の近くよ」
プリスは右に視線を送った。ネネがスマートコミュニケーターで何やら話している。家族に無事を伝えているのだ。移動通信の中継機能は予備電源ですでに回復していた。
プリス自身は、もう連絡を済ませている。剛三は『ネネちゃんを死んでも守れ』と言い残してコミュを切っていた。他人を守ってこそ人生だよと、剛三は常にそう言っていた。
プリスにも、その意味は良く分かっている。
けれど、彼女がネネを守るのはそれが理由ではなかった。剛三に言われるまでもない。
ネネはバンドのベース担当で、『ナイトセイバーズ』の仲間で——
——何より、アタシの友だちだ。
「うん、分かった。それじゃね」
ネネがコミュを切った。プリスが話しかける。
「お兄ちゃんか？」
「うん。……忙しいから、迎えには行けないって」
「そっか」

プリスはネネの肩が震えているのを見た。彼女は優しく微笑み、後輩の肩を抱きしめる。ネネが気持ちよさそうにプリスの肩に頭をもたれかけた。

『とりぷれ☆あ』のドアがガチャガチャと鳴った。誰かが合鍵を使っている。プリスはネネを放し、ドアに近づいた。

「待ってなよ、今開けるから」

プリスがそう言った途端、ドアが乱暴に開く。街灯の明かり一つない中、少女と壮年男性の影が見えた。シリアと命英だ。

「ちょっと！　あなた！」

シリアは室内に入るなり言った。

「どうして指示を無視して、アンダースーツのままで戦闘なんてしたの？」

頭ごなしに言われたプリスは顔をしかめた。シリアの性格からして何かあるとは思っていたが、まさかいきなりこう来るとは思っていなかったのだ。

彼女は不機嫌そのものの口調で言った。

「いいジャン、助かったんだから」

「あなたが死んだら、せっかく調整してるスーツがムダになるわ。分かってる？　あれは高価なものなのよ？」

「カネの問題なのかよ、オイ！」

「無駄になるのがイヤだ、って言ってるんでしょ。お金も、あなたの命も！」
シリアはプリスを激しく責めた。
「どうして逃げなかったのよ？　早く逃げてれば、あんな心配しなくても」
言わせておけばと、プリスは感情的に怒鳴った。
「あの状況で逃げられるかよ。大体さ――」
「おやめなさい」
年季の入った女性の声が聞こえた。凛として強い、人を従えることに長けた声だった。
その口調に二人は口ごもった。何かを言える空気ではない。
店の奥から、正調ビクトリア・メイド服に身を包んだ老齢の女性が姿を現した。シリアがぽつりと呟く。
「君枝さん」
「君枝さん？　誰？」
リンナがプリスの疑問に答えた。
「私の祖母です。そして」
「シリアさんの後見人みたいなもの、といったところかしら」
榊原君枝は、にこやかに言った。
「ちょっとしたご縁でね、シリアさんがオーナーを務めるベンチャー技術企業の後援をし

ているの。シリアさんが立案したナイトセイバーズも、応援させてもらっているのよ」
君枝はそう言うと、シリアに厳しい視線を向けた。
「シリアさん。あなたはプリスさんとどういう関係なのです?」
「それは、『ナイトセイバーズ』の一員として——」
「バンドは?」
ネネがシリアに問いかけた。君枝がネネに視線を送り、優しく微笑む。
「そう、そういうことね」
君枝は目を閉じた。目を開いた彼女は、優しくも厳しい口調で言った。
「シリアさん。あなたはプリスさんを部下ではなく、同志として迎えたのではないのですか?　どうなのです?」
「それは……そうです」
「ならば、何ですか、あの高圧的な物言いは。同志なら、そのようになさい」
シリアが顔を落とした。力ない声で言う。
「……はい」
その姿を見たプリスが片頬を上げた。いい気味だ。もっと言ってやれ——
彼女が傍観者でいられたのはそこまでだった。君枝がプリスに向き直ったのだ。
老女は真っ直ぐにプリスの瞳を覗き込んだ。

「プリスさん。あなたもあなたです。あなたは礼儀がなさすぎです。シリアさんは確かに過剰反応していますが、それだけではありませんよ。あなたも少しは礼儀をわきまえなさい」

静かな中に巌のごとき強さを秘めている彼女の雰囲気に、プリスは圧倒された。彼女の養父がかもし出す空気とは別種の強さに、プリスは神妙にうなずいた。

君枝を包んでいた、張り詰めた空気が少しだけ緩んだ。彼女は柔らかく微笑む。プリスとシリアもつられて笑みを浮かべた。

君枝は咳払いして姿勢を正した。

「バンドの話はリンナから聞いています。不束な孫ですが、どうか宜しくご指導くださ い」

君枝はプリスへ頭を下げた。プリスは彼女の真摯な態度に驚く。

――実るほど頭を垂れる稲穂かな、ってヤツか……

プリスは昨日の現代国語で習ったばかりの言葉を思い出す。意味不明だと思っていたが、役に立つこともあるもんだ。そう思った彼女は笑顔を浮かべた。

プリスは大きくうなずいて胸を叩く。力いっぱいの元気を込めて言った。

「まっかせてください！」

レオンは薄暗い場所にいた。建物としては充分に大きいはずだった。だが様々な機械が置かれているために、自由になるスペースは広くない。
そして、やや狭いスペースも快適とはいえなかった。埃くさいしかび臭かった。
何に使うのか分からない器具に付着した油汚れを嫌そうに見ながら、レオンが呟いた。
「お前さ、もうちょっと掃除しとけよ。いくら何でもこりゃひどいぜ」
「仕方ないじゃない。あんまり使う場所じゃないんだから」
ここの主、ロベルトが顔をしかめる。唇を尖らせて反論を続ける。
「ここは第二工作室なの。第二なんだから、ちょっと扱いが雑になるのは仕方ないのよ」
レオンは肩をすくめた。芝居がかった様子で左右を見回しながら言う。
「今までは、な。これからは、ここが第一工作室だ。もうちょっと、大事にしようや」
「……まあ、確かにね。今度、大掃除をした方がよさそうね」
「アキバの楽器屋も潰れたんだ。時間はあるだろ」
「気楽に言ってくれるわね。アレはアレで大損害なのよ、ロックの文化遺産的な意味でも」
ロベルトが上目遣いにレオンを睨んだ。レオンはニヤリと笑う。
「じゃあ、廃業するか？　だったら協力するぜ。今すぐワッパかけてやるさ」
「それはフェアじゃないでしょ」

「だったら、そこの机をちょっとだけ片づけてくれ。コイツを置けないからな」
レオンは特殊部隊の用いる、頑丈で巨大なバックパックを背負っていた。彼が軽く揺すってみせたその中には、黒焦げになったシルヴァが入っていた。
捜査型ブーマは、焼けた肌をした首を突き出し、おぼつかない口調で言った。
「レオンさん……どうか、無茶をしないで……私は……」
レオンは首を曲げながら言う。
「バカ言ってんじゃねえよ。このままでお前を持って帰ったらどうなると思うんだ。相棒を一日でぶっ壊した阿呆でございます、なんてどの面下げて言えってんだ」
彼はさらに後ろを覗き込んだ。シルヴァの首は後ろに折れており、レオンから表情は見えなかったのだ。
レオンはシルヴァの顔を見ることは諦め、おどけたように言った。
「始末書がいくらあっても足りないだろうがよ。懲戒免職になっちまうぜ」
「しかし、あなたが……修理をやるなんて……無茶ですよ」
「だからって、本庁や調布に持ってってみろ。修理に出せば必ず原因を聞かれる。そうなりゃ、勝手なことをやったお前は欠陥扱いで間違いなく解体処分だぞ。違うか？」
「あの状況じゃしょうがないじゃない」
机を片づけながら、密売人が口を挟んだ。

「この子が地下電気ケーブルを引きちぎらなかったら、あなたはどうなってたと思うの？」
「まあ、二階級特進だったろうな。遺族年金もガッチリだぜ、悪くない」
レオンが唇を歪める。ロベルトが肩をすくめた。
「昇進の機会を奪われて残念ね……はい、片づけたわよ」
「うるせえ。いずれにしても、コイツはやりすぎたんだ」
レオンがバックパックを置いた。ジッパーを開ける音が倉庫に響く。彼は大事そうに黒焦げのシルヴァを修理台の上に置いた。
彼は半壊した捜査型ブーマを見下ろし、とがめるように言った。
「何であんなことしたんだよ。『あの状況ではやむを得なかった』と言うには、ありゃああまりにもやりすぎだ。そのくらい、お前の『プログラム』でよく分かってるだろう？」
「自分は……貴方の生命を守ることを……何より優先するように……プログラム……されています。その中……には『規則……なんか……クソ喰らえ』というコマンドも……含まれて……います」
「いったい誰だ？　そんなバカなコードを打ち込んだヤツは」
「私の……メモリ……には、残って……おりません」
「本能とか、前世の記憶みたいなもんだからな。そりゃ、まあそうだろうよ」

言いながらも手は止まらない。流石に元工科大学生でメカ好きなだけあって手際よく修理していく。
シルヴァに使われている素材やパーツを見た店主が言った。
「こいつは大したものね。ブーマのロールスロイスよ」
「ロールスはBMWだ。俺はマイバッハの方が好みだな……よし、これで」
レオンは一息ついた。唇に笑みを浮かべながら、シルヴァの内臓部分に生体ロジックボードを格納し直す。
一瞬の後、ブゥン、という音が室内に響く。ブーマとしてのメインユニットが再起動を果たした音だ。シルヴァが大きく息を吐いた。
シルヴァの持つ自己修復機能が復活したのだ。これで、もう大丈夫だろう。
彼は壁にもたれかかりながらそのときを待った。そして——
「これで借りができましたね」
シルヴァが言った。先ほどまでの疲れたような様子とは違い、声がずいぶんと明るい。
だが、それを聞いたレオンはそっぽを向いた。壁を見つめながら、しかめ面で言い返す。
「バカ野郎。道具を手入れするのは常識だ」
シルヴァは微笑んだが、何も言わなかった。

第五章
Stand and Fight!

ＨＲが終わり、担任が一礼した。
次の瞬間、プリス朝霧(あさぎり)は世界陸上のゴールドメダリストも慌てて道を譲りそうな勢いで階段へと突進する。
バスケットシューズのまま一年生の生活空間である一階まで、一気に駆け下りていく。
途中、先生の叫ぶ大声が聞こえた。だが、音が歪んで何を言ってるのかよく分からない。ドップラー効果か何かの作用であろう。
標的を逃がすな！　その思いだけが脇目も振らずに突進するプリスの行動原理である。
――Ｃ組！
壁から廊下へ突き出たクラスの表札を見つけ、彼女はニヤリとした。目標を見定めたウルフカットの二年生は足を止め、バスケットシューズで廊下をドリフトする。
教室のドアを開くや、プリスは目標の姿を探す。それがまだ、ここにいることを確認して彼女の頬は少し緩んだ。
彼女は猫撫で声で、優しくあやすように話しかけた。
「ネネちゃぁーん。練習行くぞ、練習」
教室に残っていたクラスメートたちが何事かとビクッとしてドアの方に顔を向ける。だ

が闖入者(ちんにゅうしゃ)の正体を確認すると、生徒一同は揃って肩をすくめた。
ネネのクラスメートは彼女がバンドを始めたと知った当初、ひどく驚いた。それが有名なプリス先輩のバンドとあれば、にわかには信じられなかった。
だが、今となってはそのことに驚く者などいない。もはや見慣れた光景だからだ。
プリスはネネが自分の席についているのを確認し、獲物を見つけた猫のように微笑んだ。
『わーい見つかっちゃった、こんどはプリスちゃんの隠れる番ね！』
練習から逃げようとロッカーの中に隠れていたことからすれば殊勝である。
そう言いながら〝てへぺろ〟したネネの襟首をつかんで引きずり出したのは、一昨日のことである。
プリスはネネの座席に近づく。ネネは指先を見てため息をついている。指先が硬くなってきたのだろう。らしくなってきたな、と感じて思わずニヤリとする。
「指、痛いか？」
「痛いよう。見れば分かるでしょ？　プリスちゃんの意地悪～」
ネネは指先を見てブツブツと呟いていたが、不意に顔を上げる。
そして明るい声で言った。
「思い出した。今日は『パティシエミラノ』でシュークリームが半額なんだよ。プリスちゃん、一緒に……あれ？　プリスちゃん？」

ネネがあたりを見回すも、プリスが見あたらない。
そのはずで、ネネが指先を眺めているあいだに、プリスは彼女の後ろ側に回り込んでいたのだ。プリスはネネの両脇を抱えて、彼女をひょいと持ち上げる。
「捕まえた！」
「えっ！　あっ？　でも、さぁ……その……ねえ？　ちょっと！」
その身に起きたことをにわかに理解できなかったのか、ネネは一瞬キョトンとしてから、手足をバタバタと動かした。そして彼女はプリスを見上げて抗議の声をあげる。
「油断したー！　急に捕まえるなんて――プリスちゃんズルい、卑怯者！」
「観念しな。練習練習、練習あるのみ！」
プリスの催促に、ネネは往生際悪く暴れながらダダをこねる。
「ヤダヤダ、練習やだよう！　今日はやめてー、テレビの占い運も最低だったしー」
「そっか。逃れられない運命ってことだな」
「うわーん、プリスちゃんは人さらいだー。誘拐されるー！」
「口を閉じろ！　ひと聞き悪いこと言うな」
大騒ぎをよそに一年C組の生徒は下校の準備を続ける。
彼らにとってすでに、これはありふれた日常なのだ。

ネネを捕獲したプリスは、校門で待ち構えていたベントレー・リムジンに彼女を放り込む。それを不思議に思う者は、もはやこの校内にいない。ここ一週間、ずっと繰り返されている光景だからだ。

命英（めいえい）の運転するベントレー・リムジンは、静穏にして大出力な六機のモーターを駆動して、粛々と練習スタジオに向かっている。

プリスは自分用のマグカップにコーヒーを一口分だけ注いだ。練習場所は学校から遠くないので、カップ一杯のコーヒーを飲みきるほどの時間はない。

一息ついたプリスは、ネネの方を向いて口を開く。

「練習イヤか？」

「イヤ、ってわけじゃないんだけど……」

ネネは逃げ出すことができないように、安全バーで固定されている。彼女は言いよどんで、足をブラブラさせながら言う。

「何ていうか、難しいなぁって……」

ネネが苦笑しながら首をかしげる。プリスは柔らかい笑みを浮かべて諭すように言った。

「今は我慢しろ、もうすぐ壁を越える。乗り越えれば勝手に手が動くようになるから」

「そういうもんかな……」

ネネの煮え切らない相づちに、プリスは太鼓判を押す。

「あぁ大丈夫だ、スマコに文字入力するのと同じくらいにスラスラ動くようになるよ」
「ネネ、音声入力しか使わないし」
車内に気まずい沈黙が流れる。
「そろそろ『Gently Weeps』に着きます。準備してください」
低く穏やかな命英の声が、練習スタジオへの到着を告げて車内に響く。

練習スタジオ『Gently Weeps』には地下室があった。
もともとは普通の音楽スタジオで音楽喫茶『Moby Dick』にもほど近く、数百万ヒットを集めたプリスの動画はここで撮影されたものだ。
だが、ベントレー・リムジンを駐めるスペースが周囲になかったのと、四人＋一人が秘密に集まるにはちょうどいい場所ということで、バンドを組むにあたり、シリアが周辺の土地と建物、それに経営権を買い取り、大改造を行った。
一見すると少し大きな駐車場を備えた豪華な音楽スタジオ、という印象だ。だが改造の秘密は地下にあった。彼女は自分の要望どおりに施設を改装した。
商業スペースである地上のスタジオとは別に、地下に広々として設備の充実した彼女たち専用の練習場を設置し、その階下にはナイトセイバーズの第二基地を造営した。
さらには『Moby Dick』から秘密の地下通路までも設けたのだ。

シリアはこの改造工事をわずか五日間で完了させた。
今日は、このスタジオを使った初練習の日である。
「金満だなあ」
プリスはギターを担いで裏口から地下スタジオへ至る階段を下りながら、そう呟いた。
「何かおっしゃったかしら?」
シリアが前を歩くプリスに声をかける。プリスはとぼけて肩をすくめた。
「いや何も。金持ちの考えはイマイチ分からない、ってだけサ。そういや、何で練習のときもその格好なんだ?」
気合の入ったゴスロリ姿をしたシリアが平然と返答する。
「これが普段着ですので。一番落ち着きますわ」
「ああ、さようでござんすか、お上品なこって」
そう毒づきながらプリスがドアを開けると、大型ミキサー卓のある小部屋から仕切られた窓の向こうに大きな空間が広がり、大型のスタックアンプやキーボード類、ドラムセットにマイクといった機材の並んでいるのが目に入る。
レコーディングスタジオ並みだった。駐車場の空間にまで地下スペースが拡張されているのだろう。
先に来ていた少女がプリスらを笑顔で出迎えた。リンナはいつものメイド服ではなく、

黒にゴールドのラインが入ったジャージ姿である。彼女は片手に３Ｄビデオカメラを抱えていた。初練習を映像に収めようというのだ。
そしてリンナが出迎えの言葉を発した。
「お待ちしていました。準備はできてますわ」
「待たせてゴメンゴメン、コイツがさ」
プリスがネネを小突く。いつものことではあった。
「じゃあ、普段着に着替えてくるわ！」
プリスが手のひらを上にし、伸びをしながら気合いを入れて言った。
バンドの練習として、今日ははじめて全員での音合わせをする予定だった。
キーボードを担当するシリアの演奏は完璧だった。ピアノを長年続けている経験から、ジャンルの違う楽曲でもコツをすぐに飲み込んだし、コンピューターの知識は完璧だから、ＤＴＭソフトの操作もあっという間にマスターした。
リンナのドラムも初心者にしてはまあまあ以上だった。生来の生真面目さから、人一倍の練習を黙々と重ねた成果である。
問題は、やはり楽器扱いのイロハから手取り足取り教えなくてはならない、練習嫌いのメンバーである。
だが、はじめて訪れたスタジオの豪華さに、ネネは興奮気味で歓声をあげた。

「凄ぉーい！　プロのアーティストみたい！」
パーカーとデニムショートパンツへ着替えを終えたプリスが、それに茶々を入れる。
「いや、プロになるって約束でバンド始めたんだろ私たち。オマエもな」
「……ねえねえ、このアンプでっかい！　プリスちゃん何か弾いて弾いて！」
他人の言葉なんてまるで耳に入らぬように、ネネはプリスに試奏をねだる。
「オマエの練習が先だろバカ……」
そう毒づきながらも、プリスはいそいそとアンプにプラグをつなぎ込む。
彼女自身も実のところ、スタジオの環境に満足以上の興奮を感じていたのだった。
演奏の準備ができたところで、愛器ランディVの弦を弾いてチューニングを行う。
プリスが腕慣らしに幾つかのフレーズを弾いてみると、シミュレートしたそれとは異なる、ホンモノのマーシャルアンプの音色、しかも大音量のサウンドが鳴り響いた。
発せられた魅惑の大音響に、プリスは自分自身で酔いしれた。
「プリスちゃん、カッコいいーーーー！」
ネネの歓声に気をよくしたプリスは、彼女に笑顔を向けて話しかけた。
「この曲は知ってるだろ？」
プリスは、アームダウンやチョーキング（弦を持ち上げる）、タッピング（フレット上で弦を叩く）を駆使する、あるギターソロのフレーズを高速で弾いてみせた。

「アーォウ！」
ネネは笑みを浮かべて反応したが、脇から別の合いの手も入った。
「ワーォ、マイコーゥ！　ですな」
命英がヒューッと口笛を吹いて、プリスのプレイに称賛を示す。
ネネが怪しい足取りで後ずさりを始めた。ムーンウォークのつもりらしいが、どう見ても爬虫類か何かを目撃しての、苦しまぎれの逃走シーンである。
その日は結局、プリスの独演会で練習時間の大半を終えることになった。

「あり得ません」
横から聞こえた、やや平板な声に捜査二課長は顔をしかめた。
「もう一度言ってくれるか？　何があり得ないのかな？」
「精密部品の取り引きを、そのような場所で行うとは考えられません」
シルヴァが、ゆっくりと周囲を見渡した後で、課長へ顔を向けた。
「大気には海からの塩分が含まれています。埃の量も市街地より多いです」
「ブーマ風情が」
課長の顔色を読んだ部下の一人が低く呟く。捜査型ブーマは無視して言葉を続けた。この場には、自分と自分が話しかけている男しか存在しないような話しぶりだ。

「環境も悪すぎます。港の設備、特にガントリークレーンや照明は大量の電磁波ノイズを発しています」
「確かに、君には大問題だろうな。だが、人間には大した問題ではない。君には永遠に分からないだろうがな」
捜査二課長の言葉に失笑が満ちる。彼らは、捜査型ブーマとの捜査経験がないのだ。
レオンとシルヴァは、暴走ブーマの密造工場を突き止めようと躍起になっていた。だが、あまりにも手がかりとなる情報が少なすぎた。完全に手詰まりの状態だったのだ。
彼らは少しでも情報を得ようと、同じ事件を追っている別の捜査チームとの合同会議に出席した。
彼らはそこで〝とびきりの情報〟なるものを聞かされた。その情報にシルヴァが反論したので、刑事たちが嚙みついたのだ。
レオンは舌打ちした。こいつら、俺の相棒をナンだと思ってやがる――
嫌味の一つも言ってやろうと彼が口を開きかけると、シルヴァはそれを手で制した。
彼は捜査二課長に向けて言った。
「しかも、電磁波ノイズが多ければＥＳＭ――電波傍受機能が阻害されます。そのような環境では、罠を仕掛けられていても回避できません」
「罠を回避する自信がない、と言うのか？」

捜査二課長が問いかけた。レオンが代りに応じる。
「いえ。ただ、万が一の際に防ぐことができない、そう申し上げているんです」
「そんなことはない。大体」
「こいつは、この取引が罠だって言ってるんだよ」
我慢できなくなったレオンは、捜査二課長の言葉をさえぎって言う。
最後の言葉を聞いて、男の頬が緩んだ。
「大丈夫だよ、レオン君。その可能性はない。この取引は絶対に本物だ。新幹線が空を飛ぶことがあっても、ここでアクシデントの起きることは絶対にない」
「根拠は何でしょうか？　大気が洗浄されていない場所で、ケースを開けて商品を確認することによる部品の消耗率は、私の計算が正しければ……」
「シルヴァ君が〝商品〟の品質保全を気にするのは分かるよ」
横合いから合いの手を入れた者がいる。嫌われ者で有名な二課員だ。その男の口角が嫌な形で上がって、彼は言葉を続けた。
「何しろ、シルヴァ君にとっては同類な仲間の内臓なんだからな」
皮肉の意味が分からない風に、シルヴァが小首をかしげた。
そのやり取りを見たレオンが乱暴に机を叩き、叫ぶように言った。
「キサマ、俺の相棒はてめえの給料何十年分の稼ぎの高級品と思ってるんだ」

「二人とも自重しろ。捜査会議の最中だ」
捜査二課長がたしなめた。レオンは男を睨みつける。男は小さく舌打ちして押し黙った。
レオンは軽く深呼吸して気を取り直し、挙手をして発言を求めた。
捜査二課長がうなずくのを確認したレオンは口を開く。
「秋葉原(あきはばら)の騒ぎで違法パーツを取り引きできなくなった密売人たちは焦っています。あの件から時間的に間隔が短かすぎです。早すぎますよ」
「六波羅(ろくはら)君、君は知らないのか」
「何をですか」
レオンの答えに捜査二課長が唇を歪める。
「連日の大騒ぎで警察の威信が地に落ちている。本庁上層部はおかんむりだ。『早く何とかしろ』という催促の矢面(やおもて)に立つ辛さを、君は理解できないのかね?」
「言わせておけば良いじゃありませんか。俺たちの役割は」
「警察の威信や体面を保つのが目的ではない。『警察が市民の安全を守るという役割を果たせていない』という批判的世論に、応えるべき義務があるということだ」
市民に犠牲者も出ている。捜査二課長の言葉にレオンは口をつぐむ。
これ以上の被害拡大を防ぐためなら、どのような情報であっても手がかりとして活用したいという気持ちは理解した。

だが、レオンには他にも気になることがあった。
「しかし今度の取り引き場所は、東京港ではなく神奈川県の横須賀港です。県警との連携は？」
「神奈川県警へは一応伝えたが、協力を待っている時間はない。一刻を争うのだ。今回の取り引きが本当だったら、我々はみすみす犯人を取り逃がすことになる。市民を危険にさらすことになるのだ」
一拍置いた後で、捜査二課長は全員に命じた。
「よって今回は神奈川県警との連携は行わない。本件において、我々は単独での取り締まりを実施する」
「課長！」
レオンの呼びかけに、捜査二課長は無機質な視線を送りながら最終通告を行う。
「六波羅君、これは決定事項だ」
「練習中に申し訳ありません。緊急事態です」
スタジオの扉が開き、命英によるバリトンの声が響く。
突然のことに、ベースを担いでピョンピョン飛び跳ねていたネネは動きを止める。
ヴィンテージもののフェンダー・ローズ・ピアノの前に立つシリアは、命英に問いかけ

た。

「無粋な。何事です？」

「闇ブーマの取り引きで、ＡＤ・ＰＯＬＩＣＥが動くとの内部情報を得ました」

命英が表情を変えず、冷静な声で答える。

プリスはシリアに視線を送った。

シリアは応えて大きくうなずく。そして再び命英に尋ねた。

「場所と時間を教えなさい」

「本日夕暮れ、とのことです。場所は神奈川県横須賀市の、コンテナ埠頭です」

その情報に、プリスは怪訝な表情を浮かべた。リンナが命英の情報を捕捉する。

「警察の中に、わが社の〝試作品〟をお使いの方がいるのです。〝試作品〟には、利用者も知らないリアルタイム送信機能が組み込まれているのです」

彼女はそう言ってプリスにうなずきかける。

「それって……」

ネネの兄貴の相棒のことか？　という言葉を、プリスは飲み込んで沈黙した。

ブーマの事故による孤児は多く、プリス自身もそうだった。ネネも、実の両親がブーマの暴走事故で死んだらしいことを聞いていた。

警察はブーマの事故をそれほど真面目に調べてくれない。ハイテクの塊で真の原因はよ

く分からないというケースが多く、基幹産業となったブーマ製造に影響を与えるなという政治的圧力もかかっているからだ。警察も絡んだ利権の温床でもある。
その警察に捜査用のブーマがいて暴走ブーマ事件に関わっている。ブーマを使っているのは、両親をブーマに殺された少女の兄の刑事である。
繊細な神経の持ち主でなくても納得できないだろう。
プリスがそんなことを考えてネネに視線を巡らすと、彼女は椅子に座り込み、足をパタパタさせていた。プリスは苦笑いして首を振る。天然娘の心配など無用だった。同時に、ネネは意外と心が強いのかもしれない、という思いも抱く。
——両親の事故をコンプレックスとせず、自分らしく生きることは難しいな。
退屈そうなネネを見ながら、プリスはそう考えた。
「プリス?」
シリアが眉を寄せながらプリスに問いかける。彼女が考えごとをしているらしいのが気になったのだ。プリスはハッとして表情を引きしめた。
命英が情報の続きを、相変わらずの冷静な声で伝える。
「警察の情報を整理した限りだと取引場所は、陸地とは橋一本で結ばれた埋め立て地のようです」
「……待ってちょうだい命英。それって」

シリアが眉を寄せた。命英は同意して大きくうなずく。
「お嬢様の推察どおりだと思われます。この種の取り引きなら普通は最悪の事態を想定するものです。場所が不自然です」
「どういうこと？」
命英とシリアの顔を見比べたプリスが言った。プリスの問いにはリンナが応じた。
「犯罪者にとって最悪の事態とは、逮捕です。そうならないよう、いつでも逃げられるように準備するのがプロの犯罪者。そして、ブーマの闇取り引きに、素人は関わらない」
「ＡＤ・ＰＯＬＩＣＥは嵌められたのです」
その言葉に、ネネが反応した。
「お兄ちゃん……！」
彼女は小さく息を吸い、心配そうに呟いた。
プリスはリンナと視線を交わしてシリアを見る。彼女はうなずき、凛とした声で言う。
「皆さん。直ちに準備を始めましょう。ナイトセイバーズの出動です！」
陽が西に傾いた。相模湾を太陽が赤く染め始める。
横須賀港のすぐ北に浮かぶ埋め立て地にあるコンテナヤードへ、忍び寄る夜と呼応するような黒塗りの大型トラックが滑り込んで来た。

トラックはコンテナの渓谷を迷うことなく進んだ。小さなビルの高さほどまで積み上がる様々な色をした金属箱の中を、漆黒の影が移動する。
行進が止まった。発光ベストを点灯させている保安警備員が手で制したのだ。彼は左手に持ったバトンライトを軽く振って、トラックを停止させる。
巨大で威圧感たっぷりのトラックは、警備員の指示に抗うそぶりも見せず、静かに停止した。眼前に下ろされた腕が上がるのを静かに待つ。
警備員とトラックの前を、大型コンテナを満載したフォークリフトが通る。大出力モーターが唸り、フォークリフトは視線から消えていった。
通過を見届けた警備員が、身体をわずかに乗りだして左右の安全を確認する。
彼はトラックへ身体を向き直すと、右手でヘルメットの端をつまんで軽く上下させた。自分の指示に従ってくれたことへ感謝の意を伝えているのだろう。
「どうぞ」
警備員はごく短く言った。左手のバトンライトを軽く回して発進を促す。トラックが短くクラクションを鳴らした後でするすると前へ出る。警備員が軽く会釈した。
トラックが通り過ぎる間、警備員は手慣れた仕草でバトンライトを回し続けた。漆黒の姿が角を曲がり、彼の視界から消える。
警備員はすぐに右手で制服の襟をつまんだ。抑えた声で言う。

「こちらヴォーカル。チケットを買った客がハコに入った」
彼の言葉は襟の裏にある小型無線機の中で圧縮暗号化され、ナノ秒単位の微弱なバースト電波となって虚空へ放たれた。
《ベース了解。こちらでもカメラで確認した》
ベース――それは統括本部からの応答である。ヘルメットの中に仕込んである骨振動スピーカーが鼓膜を震わせた。警備員は、続く言葉を緊張と共に待つ。
《ヴォーカル、封鎖しろ》
「了解」
予想通りの言葉に警備員の顔が引きしまる。ここからが本番だ。
警備員――レオン六波羅は、左手のバトンライトを大きく振る。先ほど通過した大型フォークリフトがバックライトを点灯させて後退してきた。
フォークリフトは通常なら鳴らすはずの後退警告ホーンを止めて、滑るように後退している。普通のフォークリフトの動きではない。安全を無視している。
やがて、レオンが振るバトンライトの動きに合わせて減速し、車体を旋回させて停止した。油圧シリンダーの駆動音が静かに響く。積載したコンテナが下ろされた。
コンテナは先ほど通過したトラックの通路をふさぐように設置される。それを見届けたフォークリフトは、先ほどのように音もなく後退を始めた。

レオンはフォークリフトを操縦するシルヴァへ右手を軽く振った。シルヴァが両手を動かし、頭上で大きな円を描く。レオンはうなずいて襟をつまむ。
《こちらヴォーカル、封鎖完了》
レオンはコンテナへ向けて駆け寄った。音を立てないように走るレオンの耳に、骨伝導スピーカーから声が響く。
《ベースから各位へ。ドラムは当初計画に従い……》
「うまくいきますでしょうか？」
シルヴァの問いかけにレオンは肩をすくめる。
「どうだかな」
そこで彼は言葉を切ると、周囲を見渡した。外界へと通じる海、忍び寄る夜の闇、そして港。いかにも怪しげな取り引きに相応しい。
だからこそ、罠だと確信できる。問題は、その罠が——
トラックの消えた方から、突如として獣の咆哮が響いた。
二人は鋭い視線を交わす。彼らは全力で走った。
黒いトラックの周囲には血だまりがあった。レオンは、待機していた待ち伏せ班が全滅したことを悟った。
その血の海の中に何とも奇妙な姿のブーマが立っていた。

半人半虎とでもいうべきブーマは、レオンの姿を見るや襲いかかってくる。
とっさにシルヴァが庇ってレオンを突き飛ばす。その代償で、彼は衣服ごと身体の皮膚層を削られた。
だがそれをものともせず、レオンを守ろうとブーマへ挑みかかるシルヴァだった。彼の攻撃を、レオンは銃撃で掩護した。
しかし、人型のレオンと戦闘用に特化したブーマでは、勝負にならない。
「キシャアアーー」
奇声を発したブーマは、鋭い鉤爪を振り回した。力任せに振るわれるそれを、シルヴァは両腕で受け止める。
いや、受け止めたように見えた。
シルヴァの両腕からオイルが噴出する。次の瞬間に、何かの弾ける音がしたかと思うと、その両腕が地面に落ちた。
「シルヴァ、大丈夫か！」
レオンは叫んだ。シルヴァも叫び返す。
「レオンさん！　逃げて！」
それは、シルヴァがはじめて彼に向けて発する命令形の言葉だった。シルヴァは続ける。
「ここは、私が――」

シルヴァの胴に虎人ブーマの両拳がめり込んだ。捜査型ブーマは口から半透明な液体を吐き、表情を歪める。
「シルヴァ！」
「グォオオオオオオオン！」
レオンの声に応じたのは戦闘型ブーマだった。捜査型ブーマの腹腔に差し込んだ虎人の両腕が大きく盛り上がる。怪物は力任せに両腕を開いた。シルヴァの胴体が裂ける。
「カハッ！」
シルヴァは胴体を真っ二つにされ、無惨にも横須賀の埠頭に転がった。虎人は両手を大きく開き、天に向かって勝利の雄たけびをあげる。
隙ができた、とレオンはそれを見逃さなかった。シルヴァの上半身だけを引きずって、虎人から逃げようと試みる。
シルヴァがかすれる声で言った。
「あのブーマの標的はレオンさん、あなたのようだ。脅威でなくなった私はもう大丈夫。気にせず逃げてください」
「バカ野郎、海に蹴り込まれたらどうする!?　相棒を置き去りにできるかよ！」
レオンが叫ぶ。そもそも、現実的にはシルヴァを捨てたところで逃げ出すことは不可能に近かった。


対峙するブーマは完全な戦闘特化型だ。パワーもスピードも、これまでの暴走ブーマの比ではない。シルヴァを捨てて逃げ出しても、あっという間に捕まってしまうだろう。
レオンは振り返った。ブーマが歯をむき出した。乱杭歯からオイル、血と唾液の混合物が滴る。生体機械が大顎を開け咆哮した。
とっさに銃を構え、その口に目がけて引き金を引く。ブーマは素早くかがみ射線から逃れる。彼に残された最後の対ブーマ弾がコンテナに命中して火花と高い金属音を発する。
ブーマの口元が醜く歪んだ。確実に獲物を仕留めにかかる肉食獣の笑みだった。戦闘用生命機械はそのまま後ろ足に力を込め、一気に跳躍した。
レオンはどこか冷静に思った。
——意外とあっけないオレの人生だな、ネネは一人で生きていけるんだろうかな？
それでも、彼は最後の抵抗を試みる。落ちていた鉄パイプを拾って脇に構える。
ブーマは奇怪な笑みを深めた。
生体機械の猛獣が、その鋭い爪を振り上げ——
突如、ブーマの姿が消えた。
何が起きたのか分からないレオンはあたりを見回す。彼はそこで、人生二度目となる光景を目撃した。
秋葉原で見たのと同じ装甲服戦士、それがブーマを殴り飛ばしたのである。レオンは大

きく目を見開いた。
今度は一体だけではない。全部で四体である。
二体のスーツが猛然と虎人に襲いかかり、もう一体が弓を構えて牽制している。
残りの一体が、彼とシルヴァに近づいてきた。電子加工された声が響く。
《今のうちに。さあ、つかまってください》
「お前ら、何モンだ?」
シルヴァを先に渡し、自らはスーツの肩につかまりながらレオンが尋ねる。装甲服戦士の女性――外形と声のせいで、レオンはそう考えた――が、柔らかい電子音で告げた。
《我々は、ナイトセイバーズ》
「ナイト……何だって?」
《黙って。舌、噛みますよ》
レオンはおとなしく従う。彼が口を閉じるのと同時に、ハードスーツが地面を蹴る。
ハードスーツは一人と半体を抱え、どこか悠然と宙に舞い、その場から離脱した。
レオンは、ナイトセイバーズが戦闘ブーマへと挑みかかる光景を空から見下ろした。
空から見る装甲服戦士たちの姿に、メイスンは目を細めた。彼は丸の内でその戦闘を眺めていたのだ。映像は、横須賀上空を飛んでいる無人偵察機――UAVからのものだ。

ＵＡＶの高度からでは声が聞こえない。だが、時折発生する爆発と火花から、装甲服戦士と戦闘用ブーマの間で激しい戦いが始まったことだけは分かった。
戦場には、荒々しい音が満ち溢れているだろう。
彼はネックを握ったレスポール・カスタムを傍らのギタースタンドに立てかけ、革張りのソファに座り込んだ。
「やはり、この刑事が鍵だったようだ」
彼は指を鳴らした。別の、小さな三次元モニターが起動する。
これも上空からの映像だった。大きな三次元モニターと同じようなノイズが載っているところから見て、別のＵＡＶによる映像なのだろう。
だが横須賀ではない。どこかの町のようだ。
メイスンは人差し指を振る。映像が拡大され、ある地域が大写しになった。商店街のある駅前らしい。
メイスンはもう一度、今度は少しゆっくりと人差し指を振る。映像がさらに拡大されて、商業店舗の並びにある建物が大写しになった。看板には『Ｇｅｎｔｌｙ Ｗｅｅｐｓ』と掲げられている。
彼は空間投影キーボードを呼び出す。青い光が空中に現れた。メイスンはキーボードを操作し、ＵＡＶの記録を確認する。

プリス朝霧とそのバンド仲間が、この建物を出たという記録はなかった。
彼は慎重にデータを注視する。だが、何度見ても結果は同じだ。そこから得られるデータは、彼女たちがレッスンの真っ最中であることを示している。
「この刑事を狙ったのは正解だったな」
自分の判断に安堵するメイスンは独語して笑顔を浮かべた。彼は罪を告白するような口調で続けた。
「プリス朝霧を消し去るような真似は、しなくて済んだな」
——少なくとも、今のところは、まだ。
その言葉をメイスンは飲み込んだ。彼女は、所詮は人類だ。最終的には我々に管理されるべき存在なのだ。ロッカーがその自立精神を失ったら、それはすでに死んだも同然だ。
だが、今は——
メイスンは傍らに置いたレスポールを撫でると、三次元映像に興味を戻した。

《ソォオリャアッ！》
戦闘用ブーマの顔に、ハードスーツの足がめり込んだ。ブーマの顔が苦しむように歪む。
左足が金属を打ち砕く感触に、プリスは陶然としながら叫ぶ。
《よっしゃあっ！》



ハイキックを決めたプリスは叫んだ。完璧だ。自分の身体が、自分の思った以上に動く。ハードスーツが彼女の格闘スタイルに合わせ、近接格闘戦用に特化されている所以だろう。プリスのために新しく作られたハードスーツ。真新しい強化プラスチックとワックスの匂いがこもる中、彼女は満足げに頬を緩める。

この前の戦いとは大違いだ。今なら、シリアがドレススーツで闘うなどバカげていると言った意味が理解できる。

ドレススーツとハードスーツでは段違いの戦闘力だ。比べること自体が愚かである。

全身にみなぎる力を感じながら、プリスは叫んだ。

《いっけーーーい！》

叫びながら彼女は渾身の力で右ストレートを放った。直前まで脱力していた右の拳に、インパクトの瞬間だけ力を込める。手に重い感触が伝わった。

「ウグォオ！」

ブーマの左頬が弾ける。拳に超振動ビットを仕込んだパンチが装甲を打ち砕いたのだ。それでも、虎人の戦闘意欲は衰えない。右腕を伸ばし、彼女の胴を握り潰すかのようにつかみかかった。

プリスは化け物の頭を右手でつかむ。右腕を支柱に空中で身体を回転させ、足を振った。右手を通して、頭をつかんだブーマの首がゴギン、と鳴るのが伝わってくる。

「グゥルルルッルウ！」
ブーマの肩の筋肉が盛り上がった。両腕を振り上げ、一気に下ろす。その先にシリアの姿があった。長剣を構えたシリアが突き飛ばされて、コンテナに激突する。
《ナニしやがんだい！》
言葉より先に身体が動く。プリスの両足はアスファルトを蹴る。
伸ばした足が刀となって、シリアを突き飛ばしたブーマの首筋へめり込んだ。
「ノゴァア！」
跳び蹴りを受けたブーマが首を大きく仰け反らせた。その間にシリアは体勢を整える。
彼女には、プリスの作り上げたチャンスを無駄にする気はなかった。
《イヤアッ！》
シリアは裂帛（れっぱく）の気合と共に剣をなぎ払った。澄んだ刃物の音が風を切る。ブーマが左腕を押さえて苦悶の声をあげる。
左腕は肘から上で切断されていた。コンクリートの上に落ちた生体機械の腕が、何かをつかむように痙攣する。
半人半虎のブーマが信じられないという顔で失われた左腕を見つめた。その顔に凶悪な怒りが浮かぶ。
オイルと人口血液の混じり合った液体が左腕の切断面からあふれ出すのも構わず、戦闘

生物機械は雄たけびをあげた。
「ゴァアアアアア！」
血も凍るようなその叫びを、プリスは平然として聞いた。
――あれは怒りじゃない。自らを鼓舞し、恐怖を誤魔化すための声だ。
ブーマと視線が合う。プリスは確信を深める。虎人の野蛮な目に浮かんでいる色に気づいたのだ。そこには、強者に倒されることへの本能的な怯えがある。
彼女は顎を引いた。気持ちの上でも戦力的にも、こちらがずっと上だ。だが厳しいのはむしろここからだ。
手を抜くことはできない。油断は、迅速で確実な死へとつながるからだ。
ブーマが身を屈める。背中を大きく丸め、プリスに強烈な視線を送る。
殺す。その意思だけを込めた、単純にして明快な瞳。
生体機械の瞳孔が狭まった。太腿の筋肉が大きく盛り上がる。次の瞬間、ブーマは秘めた筋力を一気に解放し、プリスとの距離を縮めようとした。
その瞬間を、リンナの豪弓(ごうきゅう)が狙っていた。
ブゥン、という大きな音と共に音速を超えた矢が放たれる。ブーマの太腿に特殊金属の棘が刺さった。
ブーマは左手でその矢を抜こうとする。その腕へと、さらに矢が命中した。

「ノゴォオオオオオオアアア！」
ブーマが苦しげにうめく。頭を激しく振り、矢が飛んできた方向を睨みつける。
——今だ！
プリスは拳を固めた。思い切り振りかぶって叫ぶ。
《終わりダァア！》
ドンッ、という音と共に彼女の拳がブーマの胴にめり込む。同時に、ハードスーツの先端に仕込まれていた特殊装備がその力を解放した。
ブーマの神経系に障害を発生させる化学合成物質を弾頭に充塡した、対ブーマ用の切り札。「α　GEED」技術の秘密を握るシリアが開発した、別称「シルバーブレット」弾だ。
これによりブーマのあらゆる神経活動は阻害され、戦闘力がほとんど無力化される。
ブーマが声もなくうめいた。声を出す神経さえもシルバーブレットに侵されたのだろう。
戦闘生物機械の動きが完全に止まる。
その身体にリンナの豪弓が降り注いだ。矢は次々とブーマに命中する。胴に、背に、足に、手に、頭に——
シリアが音もなくブーマの背後に立った。レイピアを高く掲げて叫ぶ。
《成敗！》

その声と共に白刃がきらめく。戦闘用ブーマの虎の首が宙を舞った。頭を失ったブーマが前のめりに倒れる。

《やった！》

プリスが叫んだ。

切り落とされたブーマの頭は、水しぶきを上げて海中へと没していった。

「完璧にやられたな」

メイスンが思いを口にする。言葉とは裏腹に、悔しがっている様子は皆無だ。

事実、ここまでのことは想定済みだった。

——私の研究成果を生かした、大事な暴走ブーマを二体破壊したのだ。このくらいのことができないようではな。

彼は三次元映像を拡大した。もともと少し粒子が粗かった映像に、さらにノイズが乗る。

それでも、拡大しないわけにはいかない。ある意味では、ここからが本番なのだ。

拡大された映像の中で、矢襖（やぶすま）となって首を落とされたブーマの背が、わずかに動いた。

それを確認したメイスンが楽しげに呟く。

「せいぜい、気をつけてくれたまえ」

彼はレスポールをひざに乗せ、一度だけコードを弾く。不協和音が室内に響いた。

ブーマの背が不気味に盛り上がった。緩みかけた空気が再び張り詰める。
リンナが緊張した声で叫んだ。
《気をつけて！　何かが出てきます》
その言葉どおりになった。
ブーマの背を引き裂き、何か小さなものが飛び出す。一応人型をしているが、恐ろしく小さい。身長は二〇センチもないだろう。
丸みを帯びた、三角形の耳。毛むくじゃらの身体に、小さな頭と短い手足。背中にある蝙蝠（こうもり）のような羽に、矢印のようにとがった尻尾。一見、羽の生えた子猫のようだ。だが、その姿はどこか滑稽だった。
小さく暗い目に輝く、明確な憎悪さえなければ。
子猫はミャーミャーと甲高い声をあげ、動かなくなったブーマの周りをぴょんぴょんと飛び回った。時折憎々しげにナイトセイバーズを見上げ、威嚇するように歯をむき出す。
《何だコイツ!?》
プリスが叫ぶ。リンナさえもあっけに取られ、飛び回る子猫を呆然と見ていた。
シリアがバカらしいとばかりに鼻を鳴らした。
《何であれ、敵から生まれ出でた者は敵なのよ》

彼女はそう言ってレイピアを振り下ろす。ブーマは羽を広げて飛び立ち、レイピアをよけた。そのまま宙に舞って高度を取った。
子猫の姿が小さくなる。
《リンナ！》
シリアの声にリンナが我に返る。子猫の影は埠頭のクレーンに近づいていた。かなり見えにくい。それでも、彼女は手にした豪弓を引き絞って狙いをつける。そして——
《嘘、そんな！》
小さな影はそのままクレーンと一体化した。陰に隠れたのではない。金属として取り込み、そして——
《融……合？》
プリスは呟いた。まるで、出来の悪いＳＦ映画の一場面を見ているような気分だ。彼女は急速にのどが渇いていくのを感じた。
その間にも、ブーマのボディーはクレーンのボディーへとめり込んでいった。もう、身体の大部分が一体化している。
《いったい、どんな技術なの？　分子間融合？　それとも非発熱型金属混合？》
リンナが呟きというには大きな声で独語した。シリアが聞きとがめる。
《何でも良いわよ！　こいつは！》

ブーマの姿が完全にクレーンのボディーの中へ消えた。次の瞬間、クレーンが震えた。ジブが球状に盛りあがり、液状化した金属が下へと流れ落ちる。

ボディーが異音を上げながら凹んでいく。変形に耐えられなくなった防弾ガラスのウィンドウに亀裂が入り、粉々に砕け散っていく。

クレーンが再び震えた。それは今までよりも大きい。

溶けた金属が人型のシルエットを形成した。その中から姿を現したのは、つい先ほどここを飛び立った小型ブーマの顔だ。

クレーンと一体化して超巨大化したブーマが、ナイトセイバーズに対しての憎悪を込めた視線で睨みをきかす。

ブーマが巨体を揺るがせて叫ぶ。耳障りな高周波が響き、プリスは思わず耳を覆った。

リンナが豪弓(ごうきゅう)を構えた。目一杯引き絞って放つ。

大気を揺るがすドン、という音がコンテナヤードに轟(とどろ)いた。特殊金属の矢は音速の三倍の速さで天空を駆け、超巨大ブーマの目に突き刺さる。途端にブーマが悲鳴をあげた。

――やれる！　でかくなっただけで、痛みには弱いんだ！

プリスがそう考え、ダッシュすべく構えたときだった。

クレーンがワイヤーを振り回す。プリスは頭を下げてかわした。ヒュン、と空気を切る音が頭上を通り過ぎる。

ブーマの攻撃は執拗だった。ワイヤーを振り回し、先端についた爪で地面を叩く。当たれば大ダメージが避けられないだろう。

もっとも、攻撃精度はそれほどでもない。無人のところにもワイヤーが落ちている。プリスは口角を上げる。

《大男、総身に知恵が――》

回りかね、までを言い切ることができなかった。

クレーンの爪が盛り上がり、そこから生えてきたものを目の当たりにしたからである。

プリスは目をむいた。そこから現れたのは、一〇本近くの金属製の腕だった。その先端には、機関銃、グレネードランチャー、集束ロケットパックがついている。

――さっき、地面を叩いてたのは……

プリスはようやくブーマの意図に気づいた。おそらく待機していたAD・POLICEの備品を吸収していたのだ。彼女は歯噛みして巨大ブーマを見上げる。

その姿を見たシリアは、まるで現代火器で武装したインドのハイテク仏像ねと、どこか冷静に思った。何のためにそんな物騒な法具を持っているのか――答えは明らかだった。

《散って!》

シリアが叫ぶのと、ブーマの腕についたロケット砲が火を噴くのはほぼ同時だった。

戦場で装甲車両を屠(ほふ)るために作られた武器は、横須賀の片隅にあるコンテナヤードでも

同じ機能を発揮した。
コンテナをプラズマの炎が貫いた。ロケットはコンテナヤードに残されていたAD・POLICEの車両にも命中し、片端から破壊する。
暴走ブーマの突進にも耐えられるはずの重車輌から炎と爆風がほとばしり、まるで蹴飛ばされた空き缶のように宙を舞う。
プリスはその爆風をモロに受けて吹っ飛び、コンテナの側面へ叩きつけられた。
宇宙の果てへ飛びそうになる意識を気力でつなぎ止め、頭を軽く振る。
《プリス！　大丈夫？》
レシーバーからシリアの声が響く。
《ちょっと……痛いぜ》
プリスは正直に答えた。実際、これほど痛めつけられたのは久しぶりだ。
体重をコンテナに預けながら立ち上がる。プリスは大きく息を吐いた。
半人半馬ならぬ半人半車の容姿をした暴走機械は、巨軀を軋ませると先端についた腕を振り回した。
ろくに照準もせず手当たり次第に発砲し、周囲にある全てを破壊する。
プリスは物陰に隠れた。唇を舐める。
――コイツは、久々にヤバい。

彼女の見立てで、自分を含むナイトセイバーズの三人は巨大化ブーマに圧倒されていた。
そして、もう一人のナイトセイバーズは——

普通の高校生でしかないネネは、完全にビビっていた。
今回の出動で、彼女に期待された役割。それは、兄とシルヴァを安全と思われるところへ避難させることだった。
シリアやリンナのように戦闘訓練を受けたわけでもない。プリスのように天賦の才を持つわけでもない。
ごく平凡な女子高生である彼女が、初陣で唯一活躍できるのはその役割だったのだ。
正義の味方デビュー戦にしてはつまらない役割でも、ネネは引き受けた。
もともと、彼女がナイトセイバーズに入りたいと思ったのはレオンを助けるためだ。
最初の戦いで早速それができる。ネネはむしろ喜んで任務をこなした。
消音モーターとナイトビジョンによる無音無灯火走行という特徴を持つモトスレイヴで二人を離れたところまで運び、他言無用を念押ししたネネ。意気揚々と戻って来た彼女が、最初に見たもの——
それが、この惨状だった。
ただでさえ凶悪なブーマが、銃やロケット弾で周囲をなぎ払っている。恐るべき光景に、

ネネは足をすくませた。
——こんな……こんな、ひどいじゃない。
コンテナは砕け、クルマは潰れ、地面が裂けている。あちこちから強い火の手が上がり、コンテナヤードは炎に包まれつつあった。
まさに戦場だった。
ネネは、自分が『正義の味方』を甘く見ていたことに気がついた。
『正義の味方』はヒーローかもしれない。けれど、決して華麗なものではない。暗くおぞましいものと対峙する、泥臭いモノなのだ。
爆発音が響いた。ネネは思わず身をすくめる。
——もうイヤだ。
彼女はそのまま、その光景に背を向けようとした。そのとき——
《シリア!》
通信機からプリスの声が聞こえた。ネネがびくっと背を震わせる。彼女は叱られた子供のようにゆっくりと後ろを振り返った。
ハードスーツが、破壊されたコンテナの中からゆっくりと姿を現した。二、三度首を振るような仕草をするのが見える。
シリアから通信が入った。

《この程度、どうということはありません。ちょうどいいマッサージですわ》
《やる気満々だな》
《当たり前です、プリス。敗北はあり得ないのが、私の信条です》
《奇遇だな、あたしもさ。とにかく、ネネが戻って来るまでに、カタつけようや》
《そうですね。リンナ!》
《はい!》
その言葉と共にリンナが矢を放った。矢は真っ直ぐに飛び、巨大ブーマの腕を一本引きちぎった。ブーマが全身を震わせてうめいた。ネネは思わず耳を押さえる。
《ヨッシャぁあああああ!》
プリスの雄たけびが聞こえた。一体のハードスーツが飛び出し、巨大ブーマに向かって一直線に進む。
巨大ブーマがその豪腕を振り回す。プリスは地面に伏せ、その一撃をかわした。
ネネは唇を噛んだ。そうだ。私にだって、私にも、私なら!
彼女は大きく息を吸い込んだ。教わったばかりの腹式呼吸で、腹から声を出した。
《てやぁあぁああ!》
その声は、お世辞にも勇猛と言えなかった。だが渾身のものだった。
他のナイトセイバーズから見て、その姿はどう映ったのか――

《ネネ!》

声に気づいたプリスはネネの姿を探した。彼女の姿はすぐに見つかった。あちこちから炎が上がる中を、どこかヨタヨタとした足取りでハードスーツが走っていたのだ。

それでも、ネネが勇気を振り絞っていることはプリスにも分かった。普通の女子高生の――ある意味、それ以下の――彼女にとってどれだけ大変なことか、想像に難くない。

それでも、ネネは走った。ハードスーツのＡＩアシストを受け、ネネはブーマの攻撃を巧みに避けてプリスの横に立つ。

《よく来たな、ネネ》

プリスはハードスーツ越しにネネの頭を撫でた。

《プリスちゃん、やめてよっ。子供じゃないんだし》

《悪ぃ悪ぃ》

ネネの抗議にプリスは笑みを深めた。これで、ナイトセイバーズは四人揃った。

何だか、もう負ける気はしない。プリスはネネに視線を送った。

《シンクロで行くぞ。できるか?》

《……うん。やってみる》

そう言ってからネネが首を振った。彼女は震える、だが力強い声で言った。

《ごめん、やってみる、じゃない。やるっきゃないでしょ！》
ハードスーツの頭がプリスを向き、大きくうなずいた。プリスはその頭を撫でてやろうと手を伸ばしかけ、途中で思いとどまる。
共に歩む戦友を、子供扱いするわけにはいかない。彼女はふとそう思ったのだ。
《よし、行くぞ》
プリスがうなずく。何度か練習はしたが、実戦で使うのはこれがはじめてだ。彼女は思い切り息を吸い込み、ハードスーツに命じる。
《バトルコマンド〝シンクロモード〟オン！》
ガクン、という小さな衝撃がハードスーツを揺らす。プリスとネネ、二人のハードスーツが連動し、同じ動きを行うモードに入ったのだ。
《ネネ、着いてこいよ！》
彼女はそう言うや、真っ直ぐに巨大ブーマへと向けて駆け出した。シンクロモードでは彼女の動きが正となる。余計な動作をすれば、ネネにもその動作を強いてしまう。
プリスとネネは一体となった。
二人はコンテナを飛び越え、ワイヤーをかわし、炎をくぐる。その動きは合わせ鏡のように等しく、一切のブレがない。
彼女たちの動きに、巨大ブーマは翻弄された。振り下ろすワイヤーも、打ちつける豪腕

もことごとくかわされた生体機械は、苛立ったように巨大な唸りをあげる。
矢が風を切る音が響き、クレーン・ブーマに金属の棘が生える。リンナが豪弓を放ち、プリスとネネの突撃を支援しているのだ。
弓に気を取られたブーマがワイヤーを振り回す。大きくしなる腕から繰り出された、音速を優に超えるワイヤーがリンナを襲う。
命中するかに見えた瞬間、凛とした軌跡がワイヤーを断ち切る。シリアがリンナにうなずきかけた。
《見つけたァ！》
プリスが叫ぶ。わずかに残る子猫の顔が、そこにあった。先ほどの、まだ小さかったブーマの痕跡を発見したのだ。二人はブーマの懐へ飛び込んだ。
《トリャアアア！》
《てぇぇぇぇえい》
二つの気合が重なる。プリスの剛拳が装甲を粉砕し、ネネの拳がその隙間からブーマ本体に突き刺さった。
《フィニッシュ！》
シリアの声がネネのヘルメットに響く。

ネネはこのときのために教えられていた言葉を思い出し、音声認識装置に向かって叫んだ。
《バトルコマンド〝ブラッククリスタル〟オン！》
ネネのハードスーツのみに組み込まれた抽出装置が作動した。スーツの中で、ネネの身体が光に包まれる。彼女の遺伝構造から因子を抽出し、ある単分子素材を精製した。
《やっちゃえ！　ネネ》
プリスの絶叫がヘルメットに響く。ネネはうなずき、先ほどよりも大きな声で叫んだ。
《バトルコマンド〝ブラック・スピアー〟オン！》
その言葉が合図になった。ハードスーツが拳から単分子素材――〔ブラック・スピアー〕を射出する。ブーマの体内奥深くに貫入したブラックスピアーは、周囲のナノマシンを急速に組み替えていく。
ブーマの禍々(まがまが)しい外装が剝がれ落ちた。ブーマが内部から崩壊を始めているのだ。
子猫の顔をしたブーマと目が合う。破壊の限りを尽くし、荒れ狂っていたはずのブーマは、不思議と優しい目をしていた。まるで憑き物が落ちたかのようだった。
それに気づいたネネは、誰にも気づかれないように小さく呟いた。
《バイバイ》
――もし君が生まれ変わったら、お友だちになろうね。

ネネには、崩れ行くブーマが微笑みを浮かべたように見えた。
ブーマはそのまま崩壊を続け、オイルにまみれた鉄の残骸へとその姿を変えていった。

メイスンははるか上空からその光景を見ていた。
悶え苦しみながら崩れ落ちていくブーマ。原因は不明である。
断末魔の叫びを聞きたい。その声から、何が起きたのかの手がかりを得たい。メイスンはそう願った。
ブーマは制御系を破壊されたわけでも、思考ユニットを破壊されたわけでもなかった。
ただ腐り、自壊している。
——自壊？
メイスンはもう一度、三次元モニターを覗き込むように見た。
間違いない。戦闘用ブーマは、何者にもよらず、自ら溶けるようにして消滅しつつある。
「これは！」
メイスンは大きく目を見開いた。愕然としながら三次元モニターを凝視する。
ブーマを自壊させる技術について、彼は一つだけ知っていた。立体映像を見ながら、囁くような声で呟く。
「ブラッククリスタルオブジェクト……B結晶体が、まだ存在していたのか」

Ｂ結晶体。それは、長く失われたと思われていたブーマ技術の一つだった。
現在ゲノム社が保有するのはＷ結晶体——ホワイトクリスタルオブジェクトをベースとした技術体系だった。Ｗ結晶体とＢ結晶体は、それぞれ互いに破滅的な影響を与える。
それを知ったメイスンはＢ結晶体を研究していた技術者を密かに殺害した。それからすでに数年以上の時が流れている。もちろん、その研究成果は全て完全に消去済みだ。
奇跡でも起きない限り、この技術が復活するはずはない。
だがブーマの自壊は、その奇跡が起きたことを示している。
Ｂ結晶体の仕業以外では、この事象の説明がつかないのだ。
全てのブーマを独占的に製造しているメイスンにとって、それは明らかなことだった。
メイスンは体中を突き抜ける驚愕に、しばし呆然とした。ネックを握りしめていたレスポール・カスタムが、どさりという音を立てて床に転がる。彼は背を丸め、床を眺めた。
衝撃が走り去った。うな垂れていたメイスンの背が小刻みに動き始めた。その動きは少しずつ大きくなり、ついにメイスンは大声で笑い始めた。
無人のフロアに彼の笑い声だけが響いた。
しばらく笑った後、彼は床のレスポールを拾い上げた。表面を撫で、革張りのソファに横たえる。メイスンは苦い笑みを浮かべ、天井を見上げた。
「神は私にダモクレスの剣を突きつけた、というのだな」

彼は呟いた。彼の言葉が丸の内にある唯一の建物、その最上階で虚ろに響く。
メイスンは三次元モニター上に視線を送った。何事かをうなずき合った装甲戦士たちが跳躍を始めている。基地へ帰還しようというのだろう。
彼が生まれながらにして持つ合理性が追跡を命じた。知性がそれに同意する。追跡か、ないしは追撃をさせるべきだ。今なら、奴らを一網打尽にできる。
一瞬だけ迷った後、彼は感情へと従うことにした。
メイスンは口角を歪めて指を鳴らした。三次元モニターからの映像が乱れ、その後で途絶える。カメラを仕込んだＵＡＶが自爆したのだ。
彼の笑みが深まった。
世界は不確定要素が多すぎる。しかし——
「これだ。こうでなくては〝作られたもの〟としてこの世を楽しめぬ」
彼は再び指を鳴らした。落としていたブラインドが上がり、鮮やかな月と艶やかな夜の東京の街が上下からメイスンの姿を照らす。
メイスンは均整の取れた長身を優雅に動かし、窓に向けて歩き始めた。その手にはレスポールが握られている。
彼は、東の空を眺めた。
下弦の月が、白く妖しくきらめき始めていた。

第六章
The Man on the Silver Mountain

「リンナちゃんのマフィン、これ凄く美味しい」
ネネの明るく弾んだ声が、『Ｇｅｎｔｌｙ Ｗｅｅｐｓ』の地下練習スタジオに響く。
バンドの練習が一段落した『ナイトセイバーズ』の面々は、お茶の時間を楽しんでいた。
プリスは、ＢＢＣ（英国放送協会）が第二次大戦中に占領地へ「こちらロンドン」と語りかけるのに模したパンクバンドの名曲を、皆で最初に演奏する課題曲として選んだ。
特徴的なレゲエ調のベースラインを、プリスが心配していたよりもネネは上手に弾いた。
ネネとしても会心の出来だったのか、表情は明るい。
広大な地下スタジオ、その片隅に置かれた樫のテーブルには、リンナが用意してきたお茶とお菓子が並んでいた。
お手製のマフィンを褒められたリンナは、曇りのない笑みを浮かべて応じる。
「ありがとうございます。作ってきた甲斐がありました」
「ホント、これ凄いよ。正直、メイドの格好って商売用だけかと思ってたけど、ホンモノ中のホンモノなプロの仕事だよ」
そう言った後でプリスはマフィンを一口頬張り、顎を動かしながらにこやかな表情を浮かべた。

ネネがにわかに伸び上がって、リンナの前にあるマフィンへと手を伸ばした。
「もう一個もーらい！」
「こら、それはリンナの分だろ！」
プリスがネネをたしなめたが、リンナは微笑みながらプリスを制した。
「良いのですよ、ネネさんどうぞ。私は、喜んで食べていただくほうが嬉しいんです」
「リンナのお菓子作りの腕前はパティシエ級ですわ。今日はマフィンですけど、他にもミルフィーユやブッシュ・ド・ノエルも絶品ですのよ」
シリアが優雅にカップを置きながら笑顔で補足する。プリスは同意してうなずく。
「あたしは、カレーくらいしか作れないのになぁ。っていうか、ネネとシリアは何か作れんのか？」
「ネネは納豆タマゴかけライスが作れるよ。お兄ちゃんのお気に入り！」
ネネがくったくなく即答した。プリスは肩をすくめ、シリアに視線を向ける。
するとお嬢様の視線は泳いだ。
「私は……そおね、そのぉ……ええっと……言うなれば……」
「お嬢様。できないことはできないと申し上げた方がよろしいのでは」
渋いバリトンで苦言を呈す命英（めいえい）を、シリアはバツの悪い表情で睨みつけた。
「チビすけは料理もできないのか」

プリスは小馬鹿にするように言って、フンと鼻をならした。
シリアが彼女を悔しそうに睨みつける。
軽い緊張感の中、何事もなかったようにネネが叫んだ。
「もう一個もーらい！」

夜の丸の内は人通りが少ない。側には日本有数の繁華街、銀座があるにも拘らず、だ。
最近に入ってからのことではない。二〇世紀からずっと、夜になればそれほど人は通らなかった。オフィスビルが立ち並ぶ地域であれば、むしろ当然とさえいえるかもしれない。
だが、二〇三〇年代になってから、丸の内の夜は少し質を違えていた。
丸の内で稼動する、唯一のオフィスビル——巨大ピラミッド、通称〔ゲノム・タワー〕。
無数のカクテル光線にライトアップされ、乳白色に輝くこのビルから発散される何かは、人類の本能に訴えかけるものがあるのだ。『夜、ここに近づいてはならぬ』と。
その、ライトアップされた〔ゲノム・タワー〕最上階には、重厚なサウンドを聞きながら身体を動かす一人の男がいた。
ゲノムコーポレーション社長、メイスン・クインシーだ。
彼は巨大な鏡を前に立ち、ややつま先を上げたフォームで鋭い右のハイキックを放った。
そのまま一回転し、上体をやや倒して頭に手を置く。帽子を押さえるようなしぐさをする

と、つま先をやや立てた姿勢でまるで機械のように滑らかなムーンウォークを見せた。
彼は音楽に合わせて髪を振り乱し、叫んで飛んだ。時折、帽子を投げるようなしぐさを見せたり、鏡に向かって指を突きつけたりしながら、広大な部屋を動き回ってパフォーマンスを続けた。
数曲かかる間、彼は踊るのをやめなかった。
やがて、ライブ一回分の演奏が終わった。彼は目を閉じる。両手を高く掲げ、左右の足を重ねるように立つ。メイスンは余韻に浸るようにかすかに口を開き、感に堪えぬかのように身を震わせた。
彼の目には、次々と失神していくブカレストの観衆の姿が、確かに見えていた。
メイスンは満足して目を開いた。
——やはり、プリス朝霧（あさぎり）とはセンスが合うようだ。
彼は感心していた。ネットにアップされた彼女の練習風景の映像に触発されたメイスンは、あのアーティストの曲を久々に聴いていた。最初はおとなしく聞いていた彼だが、その音楽に身体を動かさずにはいられなかったのだ。
伝説のライブに合わせて全てを踊りきった彼は、あらためてオリジナルを歌ったアーティストに感嘆する。まさに、不出世の天才の一人だ——彼はそう確信していた。
そして、それを思い出させてくれたプリス朝霧も、また。

メイスンは微笑む。
——もっとも、彼女は人間だ。私の望みが叶うとき、最終的には……
メイスンはタオルで額の汗をぬぐう。床からペットボトルを拾い上げ、彼のために調整されたスポーツドリンクを一口含んだ。
四面全てにある窓に近づき、北を——秋葉原の方を見る。由緒ある電脳街は、一部の例外を除いて明かりが少なかった。
メイスンは微笑んだ。彼が仕組んだブーマの暴走によって生じた大停電の後遺症は、まだ続いていたのだ。秋葉原はいまだ機能不全に陥っていた。
彼はタオルを首にかけ、両足を少し開いた姿勢で腕を組んだ。
彼は謎の装甲戦士に思いをはせる。
あの装甲戦士は湾岸ライブハウス、秋葉原、そして横須賀で彼の暴走ブーマを仕留めている。
彼は引き続きネット、各種監視機器、ブーマと人間、そのいずれからも情報を集めていた。だが、いかなるルートを使おうとも、その三回以外での目撃情報はまったく得られなかった。
であれば、あの装甲戦士は、彼に——ゲノム社とブーマにだけ敵対する存在だと考えて間違いないだろう。

Ｂ結晶体の技術を持つことから推測しても明らかだ。我々に挑戦するため彼らは現れた、そう断言できる。

メイスンは表情を消し、ガラス越しの秋葉原に背を向けた。

部屋の片隅にあるカウンターからバーボンを取り出し、バカラに注ぐ。そのまま一気にあおり、のどが焼ける快感に身を震わせながらため息をついた。

数少ない出現。とはいえ、彼は三度目の横須賀における戦いで確信を得た。

あの刑事が危機に陥ったとき、装甲戦士は必ず出現したのだ。

――ならば……

メイスンは誰もいない社長室で一人うなずく。ならば再度、罠にかけることもできるはずだ。もっと慎重な計画が必要だが、できないことはないだろう。

再び秋葉原を振り返る。電脳街は相変わらず暗い。

彼はふと、あの暴走で崩壊したビルの下敷きとなって消えた、名機の数々を思い出した。

メイスンは大きなため息をついて首を振り、バーボンのボトルを再び傾けた。

■ご意見、ご感想、著者＆イラストレーターへのファンレターなどのあて先
〒104-8011　東京都中央区築地5-3-2
朝日新聞出版　朝日ノベルズ編集部

ASAHI NOVELS

バブルガムクライシス　超鋼守護天使（ハードメタル・ガーディアンズ）

2012年４月30日　第１刷発行

著者　志真（しま）　元（はじめ）
原作　AIC

発行者　市川裕一
発行所　朝日新聞出版
〒104-8011　東京都中央区築地5-3-2
電話　03-5541-8832（編集）
　　　03-5540-7793（販売）

印刷製本 株式会社 光邦

ISBN978-4-02-273990-2
定価はカバーに表示してあります

落丁・乱丁の場合は弊社業務部（電話03-5540-7800）へご連絡ください。
送料弊社負担にてお取り替えいたします。

ASAHI NOVELS

ASAHI NOVELS

志真　元 Shima Hajime

1969年、愛知県生まれ。TVアニメの制作進行を振り出しに、設定制作、制作プロデューサーを経験。世界名作劇場『ポルフィの長い旅』の脚本など、TVアニメ制作、TVアニメ脚本、ノベルス執筆という三重兼業状態のヘビーワーカー。

ASAHI NOVELS

Illustration:
深野洋一 Fukano Youichi

過去に某重工メーカーで鉄道車両デザインに携わっていた元工業デザイナー。現在はキャラクター業界にて企画・デザイン・イラスト・版権等多方面に携わっている。アニメ版美少女戦士セーラームーンではRとSシリーズでロッドや変身ブローチ等主に番組登場アイテムのデザインを手掛ける。
代表作に講談社『宇宙海兵隊ギガース』(今野敏：著)のビジュアルを担当している。

ISBN978-4-02-273990-2

C0293 ¥900E

定価：本体900円 ＋税

朝日新聞出版

ASAHI NOVELS

妖しく進化した2030年代の巨大都市〝東京〟――。女子高生ロックアーティストの卵であるプリス朝霧（あさぎり）は、人造生命体「ブーマ」の暴走に遭遇したのがきっかけで、富豪令嬢のシリア榊原（さかきばら）から共に戦う仲間になって欲しいとスカウトされる。彼女はバンドデビューを支援してもらうという条件付きで、同じ高校に通うネネ六波羅（ろくはら）や、女子高生メイドのリンナ山崎（やまざき）と共に、学園生活の裏側で超絶の装甲戦士「ナイトセイバーズ」としてバトルを開始する！　名作アニメシリーズを原点として〝再構築（リストラクチャリング）〟した書き下ろし新作、怒濤のライブ開幕！

ASAHI NOVELS